川柳塔



No. 790

女性同人特集

三月号

日本川柳愛媛大会 全

宿題

宿題 参加費 投句先 会 投句料1000円を同封のうえ、左記へ 場 第1 **∓** 530 3000円(昼食・記念品代共 爱媛県民文化会館 部 無記名、 (事前投句・5月10日締切) 大阪市北区天神橋2丁目北1 ステップイン南森町702号 話 封筒に住所氏名を明記 全日本川柳協会大会係 波多野 真珠の間 五楽庵

映

一仲川たけし

猿田 礒野いさむ

風

剣人

第2部 • 正午締切) 英比 曹

泉

进

全(詠込み可)」 秀

客

選 選

〈市内観光〉 6月12日 (土) 午後零時半集合

介前 夜祭〉(武典・祝宴)

6月12日 (十)

午後了時~

同8時半

8500円

参加費

В

民文化祭文芸大会 8 E

応 応募方法 応 応募受付期間 募 募

実行委員会作成の応募用紙に記入し、

郵便局で受け取った受領書または写し

1000円 郵便振替口

146

利用

4月1日~6月30日

選 選 選

川柳大会

020 大会・吟行・懇親会参加の有無を明 盛岡市内丸10

を添え、封筒に

川柳作品

と朱書、

先

岩手県庁内郵便局留置「文芸大会」 (入選句発表)

係

当日句課題と選者(各題2句) 花巻市湯本・花巻温泉 10月10日(日)午前10 時~午後4時 ホテル千秋閣

第二次選者 見」ちば東北子「定年」波多野五楽庵 間片倉 大野風柳・斎藤大雄・森中恵美子 沢心「出会い」 佐藤

(4)

文部大臣奨励賞・岩手県知事賞ほ 川柳大会終了後に懇親会(会費30 応募者全員に無料配布 00円)、合同大会後に吟行 山田良行・渡邊蓮夫

賞

(予定)

柳募集要項

時

6月13日

(日) 午前10時開場

事前投句課題と選者 (各題2句

ひいな流し

西尾栞

うための行事であった。そのために紙や あと古雛をサンダワラに乗せて静かに川 に供えて、みんなで一緒に食べる。その ドを築いてお汁粉をこしらえ、お雛さん の意か)と呼ぶ行事がある。 きれで人形を作り、水に流したのである。 変節期に、身体の健康を祈って災厄を払 区が多い。もともと春の陽気の濃くなる 日(今年は三月二十五日)に行われる地 ールに追われて、一日一日を過してきた 信州南佐久にはカナンバレ(家難払い 三月早々にくる行事は雛の節句である 川柳カレンダーに書きこんだスケジュ 雛の祭は桃の節句とて、旧の三月三 はや三月に入った。 川原にカマ

現在、難流しの行事の盛んに行われて 現在、難流しの行事の盛んに行われて は不思議と縁があって、三度もその前を は不思議と縁があって、三度もその前を は不思議と縁があって、三度もその前を は不思議と縁があって、三度もその前を は不思議と縁があって、三度もその前を は不思議と縁があって、 対応度な女性の神官が、おさげの黒髪に 金色の金具をつけた鉢巻をしめて、緋の をも華やかに行事にたずさわっていた。 三時頃だったか、寺の鐘の合図に各戸毎 がら女の子が、その日の着物に着飾って、から女の子が、その日の着物に着飾って、 から女の子が、その日の着物に着飾って、 手に手に棧俵に紙雛を乗せて、川原に下りて流すのであった。 和歌山県の淡島神社では、海へ流す習俗となって現在も行われている。

内裏雛は従来の通りであるが、初孫に大の子が出来ようものなら、嫁の里から立派な五段雛をもって来る。それで本家立派な五段雛をもちこまれて第二の雛段をで、変り雛をもちこまれて第二の雛段を作って、おばあちゃん達は喜んで白酒に酔うのである。

、皇太子と雅子さん雛に圧倒されるだ今年の変りびなのヒットは何と言うて

形店は口あんぐりである。い人形造りのあてがはずれて、全国の人い人形造りのあてがはずれて、全国の人に幻となって姿を消した。商魂たくましたり。しかし、貴・りえの二人雛は、竟

年寄がやかましい。

楽しみである。

べあかりをつけましょ雪洞に なった。

やんぬるかな。



11 柳 塔 三月号目次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

ひいな流し

西

尾

栞…(1

川柳塔 自選集 同人吟) 西 田 尾 柳 宏 栞 子: 選 4 2 40

川柳の群像 籠裏二篇研究 脇田 梅子 東 野 大 八 : 44 46

えて釣瓶を引き上げ、

■古川柳

水煙抄 小 川紫 出 香 子 :: 選 50 48

秀句鑑賞

新年おめでとう会 大空のこころ 水煙抄..... (27) 橘 神 夏磯 子 :: 風 39 71

典

......小 ……河 波多野 五楽庵・板尾岳人 出 内 智 天笑選 子 選 $\widehat{72}$ 86

:

てありあわせの金網籠に入れ、

茴香の花

河系

酉年に因んで そのこ

西 田 柳宏子

ッと出窓へ飛び込んで見届け、嘴で紐をくわ 竹製の釣瓶へ二三粒、餌を入れてやると、 げてこちらを見上げている。「よしよしチュ 命に鈴を振り、「チュピー」と啼き、 鈴の音が盛んに聞える。 って近づき、啄むようにして食べる。 につけてやると、チョンチョンと止り木を渡 ピー…そらやるぞ」と、麻の実の果肉を指先 入ると、出窓付の竹籠の中で一羽の小鳥が懸 を開くと、鈴の音が一層激しく鳴る。 一三度、食べさせ、 チリチリン」と可愛らし 出窓から吊した小さな 門を開け、 小首を傾 玄関の戸

返して釣瓶の餌を食べると、 嘴で紐を引き上げ、

二月本社句会 柳界展望..... 初步教室 ■編集後記 路集「人 地柳壇 小石さまを悼む 私 座右の句 「華やか」 0 好きですと書けずに花の切手はる 春愁の無より淋しき無限大 門谷たず子句集 新家完司川 佳句地十選/宮口克子) 笛 形」..... 望」..... 川崎ひかり・ 小谷美ッ千・ 柳集 『花ごよみ』………… 『平成五年』………河 松尾柳右子・青戸田鶴・藤村宏子 井上 丸 肥後和香子選 中 渡 山よし 内 薫 井 杏花選 P 風 津 女 :: 房 笑 : 82 109 108 89 84 83 110 103 102 104 90

く野性のヒワだったと思うが、人馴れが早く ただじっと丸くなっているだけだった。 習性を利用した釣瓶の引き上げのための竹製 わざわざ舞妓さんたちの小物を扱う京都の店 面白半分に鈴を止り木につけたら振るので、 ことが、懐かしく思い出される。 出窓付の鳥籠を苦労して自分で作ったりした で、小さくてよく鳴る鈴を買ったり、野鳥の った。飼育されている小鳥ではなく、 これが私たち家族とチュピーとの出逢いだ おそら

ひみこさろんワイド近ごろ、

細川稚代・石倉芙佐子・高杉千歩

感激したこと

がら、私の尺八には一度も唄わず、犬までが クスッとも言わぬのがおかしかった。残念な **啼き続けるが、初心のボテボテ三味線の時は** と、大きな声で「チューチュチュチィー」と はじめると、上手な人たちでよく揃っている った。面白いのは、母親たちが三味線を弾き いくら出入しても鈴も振らず、啼きもしなか んに鈴を振り、呼びたてていたが、他の人が る人がいた。その人が表の掛金を外す音で盛 ず来ていたが、中で一人、特に小鳥を可愛が 我が家では、母親の稽古仲間が絶え

鳥の話を二か月にわたり、 心通うものがあったと思う。川柳に関係ない 前回の鶏のシロと鶸のチュピー、 紙面をさいて頂



鳥 取県 新 完 司

冬だ冬だと日本海 都落ちどんどん落ちてふるさとへ かな粗品 まぎれもな の大太鼓 Vi 粗 品品

北の島の事より在庫処理のこと

女房も同じぐらいにぼけて来た 老人になりたくないがなって行く

松原市 小 池

しげお

真

実がい

くつあっ

てもいい

じゃない

儿

出

楓

楽

玉 置 重 人

松原市

ライ

ター 弁

が左右から出る実力者

河

内

丸出し演技力がある

猿股 二日酔

に流行がある阿呆ら

薄情

に見せたけれでも落着かず

福

は

六十点の妻と居る い黙って喧嘩しています

なんべんもめがねをさがす日のマン マイ 婦 唱 夫随こんな気楽なことはない 1 ス マイ 1 ースと階 段を上る ガ

> 残 高 きっつ ちり ゼロ する

グー 貸農園土の尊さあり チョキパーどっちが後 がたさ E 残るやら

竹原市

小

島

蘭

幸

しまい めしも食わずに遊んだことが父にある 白 0 世 界の鶴 0 夫婦 で見 習わ 2

のどがしきりにかわく都会のまん中で 湯で眠 0 たことがある詩人

負け癖がついて安心して負け とうさんとまだ旅をする十五歳 3 大阪市

物忘れわたしの長所とも思う ワンテンポ遅 れて歩く下ごころ

たいことがいっぱい溜まる小引出 ともな意見反発したくなる に来たとあとから気がつい た

儿 尾

栞 選

河口 夫婦旅必ず腹立つ事がある 伊良湖岬鳶を鷹やと思うとく 水槽の魚よノイロー あ 露天風呂世界がゆっくりまわってる 飲み込んだ言葉の骨もカルシウム 少しだけ天向く鼻から好きになり 友達はいっぱい預金はなくて 先ずは眼 友達という名で詐欺師やって来る 誰彼の計を蟹雑炊食べながら 背広という戦闘服にある野望 にっこりと席を譲 そこ きらめていても政治に腹を立て 料理溜息ついて箸を置く つきが誠を言うからたまらない た言 まで一気に走る水の乱 を割って今夜は魔女になる るりんごに歯型つけたまま がこんな奴まで守るの から初日は出ません二見浦 でゆっくり殺されゆく過程 われる年を寿ぎぬ ったのは少女 ゼになるな 豊中市 弘前 歌 一寺市 Ш 市 市 吉 安 肥 木 本 藤 後 寿美子 和 朱 美 香子 房 夏 ふるさとの山へ無冠の父詫びるかみ合わね歯車ひとつ左遷され一億初詣 性善説を疑わず 地球危機 嫁ぐ 莫迦になり切れば茶漬けが欲しくなり落日が疾くて明日の絵が描けぬ 蓮根 指折って企みでなしお年玉 礼服を着ても暴力団は暴力団 愛称で呼び合いクスクス笑い出す タイムスリッ 馬 呉越同舟もらった中味はしゃべらない 試供品もひとつもらえば傷なおる 頑張るぞ二〇〇 心の爪丸く切ってる日向ぼこ とらのこの お正月ゆっくり特選売場ぬけ ホウキの役得 動票集 鹿 0 でいいです長生き致します 娘に父が慰さめ励まされ 穴から二十一 かる釦 百 ロダンは何を考える プしてこたつで差し向 万円がはした金 賽 は押し 銭 〇年は年 、掃き集 世紀をのぞく してある 男 松 熊 出 堺 本市 江 Ш 市 県 市 V 柳 永 高 嘉

兆

田

俊

子

鶴

丸

橋

自分史にシベリア捕虜が入れてある精力も気力も峠にさしかかり人様の立場で話をするゆとりいッタリで自信をカバーして見せる人材はときとき錦を光らせる	大事無口な傘が開きま郷の山傾いて齢を知る	は満席みじめになる長力なくして鬼の粗大ゴの了解だった勘違いの髪白くなり角もとれのを白くなり角もとれる。	図を埋み火にして除夜の 新卵生むにわとりの涙知 精卵生むにわとりの涙知 大の坂軽い荷物に積み替 で石を磨いてる でない男で石を磨いてる のない男で石を磨いてる でない男で石を磨いてる	松江市 舟 木 与根一
T.			11.3	
一歩ずつ前へ	縮生え	五十年傷な七十年まだの分割の一番の一番の分割を表する。	性は 満員車長い 一人っきり によななく	
前へ地獄の道しるべう形に炬燵四畳半に限って可愛い母となるとよう背中が寒いから	慣れて健康とり戻し鳥取県過渡期論吉の出が多し鳥取県	五十年傷なめ合うてつつがなし七十年まだ人生を知らなすぎ 行き先の分からん列車に乗り合わせ 奈良県 風見鶏希望の見える方をむく 風りった まんがん しょう しょうしん しょう しょうしん しょうりん しょうしん しょうしん はらん しょうしん しょく しょうしん しょく しょうしん しょくしん しょくしん しょうしん しょくしん しん しょく しん しょく しょく しょく しょく しょく しんりん しょくしん しんしん しょくしん しんしん しん	焼き鳥の匂いと伏見初詣神様の前では俺も罪深い神様の前では俺も罪深い 一人っきりという贅沢に暮らしてる 一人っきりという贅沢に暮らしてる 一人っきりという贅沢に暮らしてる 奈良市	奈良県
地獄の道しに炬燵四畳いって可愛います年は新た	多し島取			奈良県 宮
地獄の道しに炬燵四畳いって可愛います年は新た	多し鳥取県	ら 奈良県	髪 奈してる 市	
地獄の道しに炬燵四畳いって可愛います年は新た	多し。	らぬ 奈良県 田	髪 奈良市 天	宮

.

に 馴 れ	足が決まり帝笑顔で国技館 尾崎市 春 城 年 公美のF4川ヒアのりも矢っている	でんごかのによるでは歌が上手と書いてなまな医を忘れた三ヶ日はぬ元日の空飛行雲	に影ぶと立ち止まる陶器市 を 城 武庫下げ髪着の魔雁の揺っていく	だがだようだんが 悪でなる界が増えて大きな耳となるの句碑はるかな向う虹を見けりげを語れば春の陽がや	市林	いて風 森は自分を語らない 米子市 林 荒
9	代		坊		枝	介
の る	人を恋う心に年齢などはない	良い友がいるのではずむ孤の手毬良い友がいるのではずむ孤の手毬アップダウンあって人生面白い	の小言と	命背負う尾長が濁す岩清水	大田市 また悪夢 枕裏返してみても ぶつかった壁に故郷が見えてくる がったり	成義国) レビに奄
	榎		赤		藤	江
3						10000
	本		Щ		田	

音追えば昔の音を戻す川 風のささやき耳の世界に春連れて 風のささやき耳の世界に春連れて 風のささやき耳の世界に春連れて を越しても男 意地捨てぬ	はにかみでムード高めるプリンセス年玉の客は子供が出迎える 無駄足を踏んで歓心買いに来る 無駄足を踏んで歓心買いに来る	都情す	伊丹市
堀	楊	都都	樫
江	井	倉 倉	谷
正	=	求	寿
朗	南	芽	馬
工主裏に減	貧しさに負けない 手を振って歩けば 子と肩を洗い合う	西年だプラン小さく羽ば 或る時は戦盲らしい正義 或る時は戦盲らしい正義 素容院こころも洗う大鏡 美容院こころも洗う大鏡 悪魔の笛素直に耳に入る 悪魔の笛素直に耳に入る 事儀から戻りあいつと同 中代で死ぬ人もいて生き	
締めて りれる がこる がっず	ない孫が優し過ぎるから言われて嬉しがり合うのも旅なるからかなるか	るてじ 撫打 た 持感 た 台 い 歳 で 算	島根県
締めていく ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	い孫が優し過ごわれて嬉しがいろが優し過ご	を 持てあました 持で を 合治市 を 合治市 を を を を を を を を を を を を を を を を を を を	根
締めていく 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市	い孫が優し過ぎっのも旅なるかっのも旅なるかりまなるかりませんがり	た日記 た日記 た日記 た日記 た日記 た日記 た日記 た日記 た日記	根具
を 大阪市 河 大阪市 河 大阪市 河 がて腹を見せ	い孫が優し過ぎかれて嬉しがりわれて嬉しがりおれて嬉しがり	た 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	根具 屈

おしゃべりにハラハラハラと宮内庁	ああ不況ご成婚で儲ける気	医者の瞳が呑みすぎたねと言っている	どんな理由つけてみようと怠けぐせ	目標は一日一句冬景色	八尾市	蛇口から漏れた噂はすぐ乾く	さよならへ振り返るのは未練かも	悟ってはいるが余生とは虚し	キッチンに男が立っている平和	脇役で一生終わる落とし蓋	高槻市	故郷まで続く線路に雪積る	露天風呂に女と見える夜目遠目	二者択一の演技一生繰返す	恋したら治りますよと医者が言う	残り火の眠気をさます春の雪	廿日市市	世を捨てて安らぎの顔吹き溜り	年の功忘れて詐欺にしてやられ	枯れ木に咲く そんな奇跡は信じない	十年よくも生	赤いシャツ纒うてみても老いは老い	名古屋市
					内						Щ						林						越
					海						島						野						村
					幸						諷云児						甦						枯
					生						児						光						梢
菜の花とカサ	戎さんへ	妥協する	片袖を	七草が		盗聴	三途	うな	子取	真っ		手	老	種	7	優		傷	小	П	あ	寒	
ップランカに胸ひらく	戎さんへ一万円を張る勇気	妥協することを覚えて肥えた悔い	片袖を濡らす相手は金の文字	が売切れ失速のまま二月	寝屋川市	の趣味がお前にあったのか	の川危く戻るしあわせか	うなじのホクロ一つ二つは知っている	取ろ子とろ鬼の勝手は許すまじ	白い皿にカラクリあったのか	富山市	の届くとこから逃げる姫リンゴ	いらくの恋もどかしいタイミング	火チロチロONに出来ずにいる輩	それなりに現実的で浪費家で	越感増長させる使い捨て	大阪市	のかぬように釦をかけ直す	少し距離おくと他人めく言葉	1紅をちょっと濃い目に気の疲れ	の日から殿下に春陽のさす笑顔	寒気団到来 列島 鍋ふつふつ	八尾市
リブランカに胸ひらく	一万円を張る勇気	ることを覚えて肥えた悔い	高らす相手は金の文字	売切れ失速のまま二月	屋川	趣味がお前にあったの	の川危く戻るしあわせ	ホクロ一つ二つは知っ	の勝手は許す	白い皿にカラクリあったの	Ш	届くとこから逃げる姫り	いらくの恋もどかしい	火チロチロONに出来ずにい	なりに現実的で浪費家	越感増長させる使い捨	大阪市 津	つかぬように釦をかけ直	人めく言	紅をちょっと濃い目に気の疲	の日から殿下に春陽のさす笑	到来 列島 鍋ふつふ	八尾市 宮
菜の花とカサブランカに胸ひらく	一万円を張る勇気	ることを覚えて肥えた悔い	高らす相手は金の文字	売切れ失速のまま二月	屋川市	趣味がお前にあったの	の川危く戻るしあわせ	ホクロ一つ二つは知ってい	の勝手は許す	白い皿にカラクリあったの	山市	届くとこから逃げる姫り	いらくの恋もどかしい	火チロチロONに出来ずにい	なりに現実的で浪費家	越感増長させる使い捨	市	つかぬように釦をかけ直	人めく言	紅をちょっと濃い目に気の疲	の日から殿下に春陽のさす笑	到来 列島 鍋ふつふ	
サブランカに胸ひらく	一万円を張る勇気	ることを覚えて肥えた悔い	高らす相手は金の文字		屋川市 柴	趣味がお前にあったの	の川危く戻るしあわせ	ホクロ一つ二つは知ってい	の勝手は許す	白い皿にカラクリあったの	山市 舟	届くとこから逃げる姫り	いらくの恋もどかしい	火チロチロONに出来ずにい	なりに現実的で浪費家	越感増長させる使い捨	市津	つかぬように釦をかけ直	人めく言	紅をちょっと濃い目に気の疲	の日から殿下に春陽のさす笑	到来 列島 鍋ふつふ	宮

ライバルの花輪は数えないようにつシフンと頷き後で辞書を引くの三回忌飲はぼくだけ兄の三回忌飲生とは僕は思ってない余生	きを続ける気ままも老いの日々 ではまた飲む口実の出来る友 できを続ける気ままも老いの日々 はまた飲む口実の出来る友 ばまた飲む口実の出来る友 じょうじゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう はずぐ本音でからむ悪い酒	東大阪市 森 下棚く耳を持たぬ男の自己過信 地の目を気にして書けぬ一行詩 神の目を気にして書けぬ一行詩 瀬騒の激しく愛が昇華する	私の陰口をインコがふっと聞き私の陰口をインコがふっと聞きないとしたを待ちないとしたを待ちないとしたを待ちないとしたが出合いないとしたのとを待ちないとしたのとのないとしたのとのが出合いないとしている。ないとしている。ないとしている。ないとしている。ないとしている。ないとしている。ないるのでは、ないるのといる。ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、ないるのでは、<	島根県西は
	中	下		村一
	E	愛	弘	早
	坊	論	道	苗
この嘘を妻は知ってるかもしれぬ一本の道を歩んで襟を立て一本の道を歩んで襟を立てまがいは許されよ	胎動の海で涯なき夢を追う子に托す夢は大きな虹となり子に托す夢は大きな虹となり一番騒へ津軽三味の音溶けてゆく虚と実の間にあった置き手紙いつまでも妻が黒子で居てくれる	健康よまずおめでとう有難う	も思う も思う	西宮市
	小	村	真喜内	奥
	寺	田	内	田
	花	善		みつ子

屋台酒たっぷり飲んでげんなおし、茶が気があるから親をにくんでる、素う気があるから親をにくんでる。ない人であるがら親をにない人であるがく銭渦巻いている永田町	十和田市 阿 部 ・	五所川原市 對 馬 三次会帰りのマッチ堰に捨て 三次会帰りのマッチ堰に捨て 三次会帰りのマッチ堰に捨て	黒石市 相 馬 類の目の位置で宇宙見ています 菊の白 友は柩の中におり っの花も己の丈に咲いて散り	十和田市 斉 藤
		-	-	
	進	閃	花	劦
台本の自分へ引いた赤い線はみ慣れて里の空気を忘れかけ住み慣れて里の空気を忘れかけがあるがあるがあるがあるがある。	京都市 松 川 芳 子 窓舎知しなかった悔いしてた悔いときめきも嫉妬もなくて早う老けをきめきも嫉妬もなくて早う老けときのほの風が嫌いな風見鶏	京高の針打つ場所もあと少し 京高の針打つ場所もあと少し 京高の針打つ場所もあと少し 京高の針打つ場所もあと少し 京高の針打つ場所もあと少し 宇部市 平 田 実 男	黒石市 千 葉 風 樹寒の雨 父に抱かれた日の記憶寒の雨 父に抱かれた日の記憶のおいっぱいの祈りなり	弘前市 佐 治 千加子

こみあげる涙蛇口は全開に	雪しきり夫婦の会話途絶えがち	風花の一片遠い人思う	曖昧な答えは書いてない聖書	白椿私を責めるどうしよう	今治市 野 村 京 子	悪女にもなれず凡凡と葱刻む	おどってる私は知らぬ裏の裏	これ着なはれ妻は相手を意識する	蕗の薹わたしに欲しいその苦さ	十日戎そろそろ元に戻らねば	大阪市 神夏磯 典 子	雑踏でときどきマナーに目を瞑る	ふところと時間ゆとりが行き違う	廃船へ静かに波の子守歌	長い指まるい手 心を込め握手	夢で見たとだけを長距離電話する	大阪市 本 間 満津子	込み合えば一入御利益ありそうな	落日と少女は鐘を聞いていた	一輪のばらに見られている挙動	鏡破れ千のわたしが現われる	椿姫一気に読んで炎えている	西宮市 西 口 いわゑ
嬉しさはまだ湧いて来る好奇心	忸怩たり飢えた子供の大きい目	宰相の泣き顔に似る福笑い	老害も諸悪の内と悟るべし	一瞬のときめき香水の贈りもの	大阪市 板 東 倫 子	いのちの灯まだまだ消えず退院す	無気力な一日だった雨止まず	傘寿すぎての入院子ら慌て	点滴を慰めあって今日終る	うらじろの裏の白さは企みか	大阪市 上 田 柳 影	店員の大阪弁と話し込む	その橋を渡り切るまで待っている	これも愛 老犬と住む余生かな	夜店のひよこ癸酉を待って鳴く	紙鳶と戯れていた三ヶ日	寝屋川市 稲 葉 冬 葉	ベレー帽がそろそろ似合う年になり	恋をする顔はどこから見てもよい	半分の言葉で足りる老眼鏡	茶柱が立ってゆっくりしておれぬ	嫁はんの話をすると笑われる	羽曳野市 田 中 透 太

傘寿なおシュプレヒコールの音頭とる	命と比べままがあっていた。	つい本音喋らされてた聞き上手	生半可 首突っ込んだツケが来る	和歌山市 堀 端 三 男	肝心な時痛みだす親しらず	握手した温み心に勇気わく	まだあった策に気がつく仕舞風呂	不況風うけてネオンの灯がゆれる	人の手もお金も足りぬ十二月	東大阪市 崎 山 美 子	三世代同居 家族に妥協をする起床	かくしゃくの遺墨を偲ぶ書道展(掬水を悼む)	鶏が化けてでる場末の鴨なんば	シャモの絵を入れ替え新春自画自賛	価値観を疑う老いの冬いちご	大阪市 北 勝 美	肺削り癌を克服十二年	今度こそ今度こそはと恥ばかり	人間のふれあい内に闘志湧く	万の敵怖れぬ根性今も抱き	日の丸に血湧き肉躍る僕である	大阪市 北 山 悟 郎
物思い環状線に遊ばれる	月書頁いっこませてが近えそうな気がして駅へき	猫抱いてしあわせなんて寂しいね	きっぱりと言うべきでした歯が疼く	和歌山市 内 田 結 実	人がひと裁き乾いた風が吹く	梅干の種 未来とは何だろう	点滴の遅さに負けたなと思う	握りこぶしの中でわたしが泣いている	大志など抱いてはいない定期券	和歌山市 西山 幸	もみじの手この娘の嫁ぐ日が怖い	寒い音たてて氏神さま暮れる	ロボットにこき使われる五日制	姑と意見が合うた味噌仕立て	猫歳で一生通すのもおんな	和歌山市 福 本 英 子	旅一夜 現世を越せぬ妻の声	読み終えて賢治の街へ帰りつく	男ひとり女もひとり北の風	過去形で私の罪を軽くする	虎落笛しきり喪中の案内状	和歌山市 牛 尾 緑 良

という川の流れは止められ	人間不信ああ鍵束が増えてゆく目の手術決意しましたおほろ月	人責めることほど易い	値段など気にしていない振りをする	海南市	プライドを捨てたら泣けるそこに胸	バランスが問題 恋の射程距離	寝返りをうっても壁に当るだけ	まだ若い証拠上司にたてついて	行間に入れたいセリフ溜めている	和歌山市	もう涙涸れて女の強い相	嫁の手に預けてからは振り向かぬ	客筋を医者も自慢の一つにし	ままごとの客両親の縮図かも	世の波に乗って福笹大を選る	和歌山市	約束を破ったように冬のバラ	羊羹を食べて腹だち治めてる	充電は酒に限ると祖父の髭	亡母の歳とっくに過ぎて母恋し	すくすくと育つ つくしへ春の唄	和歌山市
				Ξ						宮						垂						内
				宅						口						井						芝
				保						克						千寿						登志代
				州						子						寿子						代
げない仕草育ちのいい娘	ビザもなく鳥国境を越えてゆくあかんたれ一人旅など淋しすぎ	理チョコも待っててくれ	情念を抑えて雪を舞うはん女	和歌山市 細 川 稚 代	花が溢れて展開のない私小説	一つ悟って味方の数が減っていた	分け隔てなく育てた積り長女次女	ポストまで何度も走るダイエット	人の心は移ろいやすし冬の冷え	和歌山市 田 中 輝 子	真実は合せ鏡の中にある	流れ星が隕石という種明し	アダムとイブりんごに罪はないものを	懐古癖 乳白色の湯につかり	ジパングや金箔入りの酒を酌み	和歌山市 福 井 桂 香	わかりませんその一言を言い澱む	もう脱げぬ仮面へ続く不整脈	ずっこけた円にコンパス当ててみる	一点を凝視周りの音を聞く	退いた一歩で広い空に逢う	和歌山市 桜 井 千 秀

カーテンを開けると綺羅めく凪の朝	老い二人死ぬ順番を議論する	何もかも経験ずみです満はたち	拾うより見るのが餅撒き面白い	肩書がとれて人間丸くなり	岸和田市 福 浦 勝 晴	そやけんど二月に行くわ友が言う	孫が来てペースの狂った三ヶ日	自販機で燃料切れのワンカップ	酉年へ喉の調子が悪いチャボ	子に期待せぬ瓜のつるには茄子ならぬ	有田市 松 井 かなめ	折角の春が来たのにこの訃報	老梅の気品とわが身見くらべる	水仙の匂いへ消えたわだかまり	ご利益は望めそうないこの人出	酉どしの一度は見たい鷹の夢	和歌山市 若 宮 武 雄	外来の豆では逃げぬ鬼の意地	異動期へライバルの目を意識する	休んでも支障がないと聞く不安	退職を前に毒舌冴えている	北斎を我が先輩と知った旅	和歌山市 青 枝 鉄 治
入れては出し出しては入れる旅支度	七人家族煩わしくて楽しくて	裏話知っているからぼけておく	落款が気性どおりに押してある	七草が過ぎて戻って来たリズム	岸和田市 原 さよ	六十路半ばそろそろ物を整理する	目的を持ったは五十代の頃	老齢よ職を退こうか何しよか	上天気洗濯済ませただけの幸	倖せな一年でした日記閉ず	岸和田市 島 崎 冨志	雛まつり娘に子供まだ出来ぬ	無理解な言葉にプライドが折れる	控え目に言うたつもりが怒らせた	四面楚歌疑い出せばきりがない	CDにない温もりのレコード盤	岸和田市 高須賀 金	飛入りの楽しい客は八十歳	極楽の席を予約の数珠をくる	九十歳刺繡してると賀状来る	武さんが居らぬ句会の隣席(故植山武助さんを偲んで)	風塵抄じっくり読みます三ヶ日	岸和田市 芳 地 狸

子

太

村

愛と憎重ねて渡る冬銀河 お隣のバラの赤さは羨まぬ	7)示 I I I I I I I I I I I I I I I I I I	たこれである。 「はいかないでは、 ないでは、 は	おうまままでは、おうまでは、おうまでは、おうまでは、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが、これが	学和田市 古 野
				· ·
	た ず 子	豊平 次	! ダ グ と	で
もう欲も見栄もおまへん着ぶくれて退院へ花ある余生信じよう肩書きを捨てて身軽な春の雨	Table Ta	空し喋ればなせぬが諒承さい	面では過ぎ、「坪」の「日」の「日」の「日」の「日」の「日」の「日」の「日」の「日」の「日」の「日	遊路市 人 見 翠 記

つっかい棒だんだん頼りなくなって来た内裏雛 私と同じ酉年で内裏雛 私と同じ酉年で	い下知しんた悲らスの	供物の森で再会などしないと別に目刺しの味を恋うを嗇と別に目刺しの味を恋う名前負けしたと他人に言わせまい	精一ぱい生きて綺麗にさようなら精一ぱい生きて綺麗にさようなら個性美にあふれどの娘も皆きれい福袋役に立つのは二つ三つ 米子市 小	宝塚市 丸
	井	垣	西	Ш
		花	雄	
	と も 子	子	Z Z	よし津
思い出をスパイスにして皿満たすどこまでが限度歩幅をたしかめるどこまでが限度歩幅をたしかめる	考えぬいて霧晴れるまで待っているを楽を見てきたように人は言うを好きのあなたに似合う花言葉花好きのあなたに似合う花言葉	来子市 ロッパ では、	王子さまのお眼はやっぱり高かった(皇 成人式 二人の孫を両の手に 枕いごと初春の財布が伸びてゆく やり直し決めた今こそチャンスだな 大傘の影どこまでも従いてくる 大傘の影どこまでも従いてくる	米子市
	寺	田	事 一 一 一 一 一 一	野
	沢	中	戸 内定	坂
	み ど 里	亜	田	な
	里	弥	鶴	2

もういいよ影よお先にかえりなさいもういいよ影よお先にかえりなさいと夕ヒタと胸満たすもの夕映えるお正月笑い袋もゆるくなる	ホッホまだ通じる孫の疵の位置 甘酒は一本箸が似合いそう	もう少し酔うて及ばぬ夢を追う 一般かなる小言消えゆく柚子の湯気 悪かなる小言消えゆく柚子の湯気 一米子市 白	つき杖けし 章 そめて 章 それでの がながれて ないない ないない ないない ないない ないない ないない ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないない。 ないないない。 ないないない。 ないないない。 ないないない。 ないないない。 ないないない。 ないないないない。 ないないないない。 ないないないないない。 ないないないないないないないない。 ないないないないないないないないないないないないないないないないないないない	賑やかに暮しているも思いやり 米子市 政
	井	根	田	岡
	Ŵ	3.	千	日
	ŧ	み	春	枝子
心パ太日如				
心豊かに齢のことなど忘れようパントマイムで事が足る共白髪太陽と歩く気迫に満ちた背な日の丸まばら建国記念日遠くなる日の丸まばら建国記念日遠くなる	かみさんが包んで僕が持って行くひざ枕 妻は太めの方が良い	いいに	週一度もぐら叩きをやっている 叱られたわたしを包む寒ぼたん 本なたが捨てた夢を拾って上げる 大田 に で 進むはずだった 大田 で 進むはずだった 大田 で 進むはずだった 大田 で 進むはずだった 大田 で 進むはずだった 大田 で 単のでし当てて見る と前す気軽な人の横にゆく と前す気軽な人の横にゆく といる音にも冬は寒い音	子供はいいなどんどん入るお年玉米子市
心豊かに齢のことなど忘れような陽と歩く気迫に満ちた背ないと歩く気迫に満ちた背ないと歩く気迫に満ちた背ないの丸まばら建国記念日遠くなるの方に対している。	表は太めの方が良い 要は太めの方が良い 来子	人だな傘を持っているを煮込んで待っているのちとあなたの胸に今のちとあなれの胸に今	を を を を を を を を を を を を を を	供はいいなどんどん入るお年玉米子
心豊かに齢のことなど忘れような陽と歩く気迫に満ちた背ない人をよびの入まばら建国記念日遠くなるのが、	を を を を を を を を を を を を を を	人だな傘を持っているのですを煮込んで待っているのですのちとあなたの胸に今日も彫るのちとあなたの胸に今日も彫る	もぐら叩きをやっている たわたしを包む寒ぼたん たわたしを包む寒ぼたん の歩幅で進むはずだった 米子市 深さものさし当てて見る 深さものさし当てて見る 気軽な人の横にゆく 気軽な人の横にゆく	供はいいなどんどん入るお年玉米子市
心豊かに齢のことなど忘れような陽と歩く気迫に満ちた背ない人をはら建国記念日遠くなるの丸まばら建国記念日遠くなるののではある。	表は太めの方が良い 米子市 光	人だな傘を持っているのですを煮込んで待っているのですのちとあなたの胸に今日も彫るのちとあなたの胸に今日も彫る	もぐら叩きをやっている たわたしを包む寒ぼたん たわたしを包む寒ぼたん の歩幅で進むはずだった ※子市 茂 深さものさし当てて見る 深さものさし当てて見る 気軽な人の横にゆく る見送り少しロマンめく る見だりかれませぬ合いませぬ	供はいいなどんどん入るお年玉 米子市 金

リーガルの靴でスタート台に佇つ はたちの春 酒も煙草も知っている (長男 二句) 父親の気持いろいろ春近し 好き合うて親の出番がないのなり	で晴れて無人の駅にゴミガ無い 自分史に年毎増える句読点 自分史に年毎増える句読点 を晴れて無人の駅にゴミガ無い	新血車老いはすまなく通り過ぎ をが味積る話に夜が更ける が重さないはするおシャレ をが味積る話に夜が更ける	明 市 柿 花 紀美女りハビリの朝の一歩の運不運 関い事未だあり過ぎる余命表願い事未だあり過ぎる余命表願い事未だあり過ぎる余命表 しん旅心に咲かす花を見た コーヒー	堺市 黒 田 真 砂
影法師も途方にくれている寒さんも男だ古い思想を抱いて死ぬ俺も男だ古い思想を抱いて死ぬかるまいに行くなあ酒よ俺の心は分かるまいエリツィンの苦悩を渡り鳥も見た	反省の一年でした仕舞い風呂 短上げも羽子板も無く暮れにけり 不上げも羽子板も無く暮れにけり を表れたけり	年毎につい振り返りふり返り年毎につい振り返りみり返り七草粥踏襲する人知らぬ人七草粥踏襲する人知らぬ人	世縁の娘といる九官鳥の私語 が個ぐ孤老も塔のごとく佇ち を取る がの娘といる九官鳥の私語 がないないる九官鳥の私語	竹原市
	両	岩	岡	三
	JII	本	本	宅
	洋	笑	清	不

子

々

水

朽

鉄板の反りもソバ屋で押し通す一夜明け残った酒の棘を抜くかど番の酒にびびれていませんぞ	頁のこれば星手で事が足根布団着せて貰った初春	取ればここにも春があるけば影が助けてくれていたみのがむしゃら春を主張す	無雑作なメモ無雑作に男を殺す火の鳥が乙女の胸ではばたいた『耳見	取 た	耳と目の立場が主張して引かず パイと言う返事が無理と知っている 良心と相談をして俺は俺 北風に凜凜しく燃える寒椿	鳥取県
	五	Ġ	菜	茶	土	松
	田	I	Ц	Ц	橋	下
	肿	L	星	蓝	はる	たつみ
	雀	Ĩ.	杉	妥	るお	み
バラバラにすながら酒とは家系子枝孫枝	困 知らず	酒の安定剤が効いてくるへ近い五階へ鳩と住むまだあたためている果し状	西原豐	暖味な送りことばを真にうける ま町に女の好きな水飲み場 ま町に女の好きな水飲み場 再婚のそれからあとの雨霰	島取県 野 中 御 前 乗っても地獄の沙汰は離れない 展切りの羽から抜けてゆくようだ 風悩は繰越しにしてお目出とう	鳥取県 江 原 とみお

東京の種はいつでも芽を出さぬ 京田 多賀子 地食の皆を配ったソクラテス 地食の街で肥ったソクラテス が高い声がコーラスはずされる 安心して喋る実家の掛蒲団 もう少し独りで住むと老父が言う トレンディドラマの歌で孫眠り キ賀状真っ赤な酉が書いてある ダイエットお餅焼こうか焼くまいか を炬燵心迷わす桜餅 年賀状真っ赤な酉が書いてある が長にだんだんこげん言うてみる 悠長にだんだんこげん言うてみる 悠長にだんだんこげん言うてみる 悠長にだんだんこげん言うてみる 悠長にだんだんこげん言うてみる ちたで解いて出雲の神も複雑に はま市 石 倉 たんで解いて出雲の神も複雑に 日を想う娘の晴着	出雲市 金	山木	青	1	出雲市	5	名	まこと
おろし平成五年の貌つくる と近端が通る椿道 出雲市 園 山 多賀子 地食胸の高さに満ちるもの 地雲市 園 山 多賀子 地食りのではした知恵だから身につかぬ 出雲市 宮 山 多賀子 地食の音春には春の音符あり 出雲市 宮 岡 きみえ 大谷みにした知恵だから身につかぬ 知る柩が通る椿道 と世紀のよがりのベレー帽 と地ぶ柏手若やぐ日 出雲市 吉 岡 きみえ 打ちかけが京より届く式間近冬炬焼魚焦らず二十一世紀 大生独りよがりのベレー帽 と中で、大胆不敵という教い 出雲市 吉 岡 きみえ 打ちかけが京より届く式間近冬炬焼んまらずご大かい柄な女です 一羽もどって来ぬ日暮れ 出雲市 吉 岡 きみえ 打ちかけが京より届く式間近冬炬燵心迷わす桜餅 中賀状真っ赤な酉が書いてある はしたたか小柄な女です 一羽もどって来ぬ日暮れ 出雲市 古 岡 きみえ 打ちかけが京より届く式間近冬炬燵心迷わす桜餅 にしたたか小柄な女です 一羽もどって来ぬ日暮れ 出雲市 古 岡 きみえ が高い声がコーラスはずされる 安に屋心迷わす桜餅 中賀状真っ赤な酉が書いてある がイエットお餅焼こうか焼くまいか 一羽もどって来ぬ日暮れ 出雲市 古 岡 きみえ 打ちかけが京より届く式間近りの情気を隠すような服 と中質状真っ赤な酉が書いてある が長にだんだんこげん言うてみる と地ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女との戦で経ば雪の花との戦がたるいような春	春だ朝日				の種はい			
たいの情報を関するというな服というな服というな服というな服というな服というな服というな服というな服	連おろし平成五年の貌				の広さ白黒選り分け			
知る柩が通る椿道 出雲市 園 山 多賀子 と並ぶ柏手若やぐ日と北京がたらなたりの「大生独りよがりのでしてみたりして来ぬ日暮れ、出雲市 板 垣 草 丘と北が家を通過してみたりの「大生独りよがりの花りの「大生独りよがりの花りの「大生独りよがりので、上生って来ぬ日暮れ、出雲市 店 岡 きみえ だけるかもしれない 出雲市 吉 岡 きみえ だりの数点がだるいような春 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女と のが気を隠すような服 ちついだるいような春 はラップで包む鏡餅 「	石抱く胸の高さに満ちるも				はワンマンカ			
出雲市 園 山 多賀子 出雲市 伊 藤 出雲に消える絆か春の雪 出雲市 園 山 多賀子 出雲市 伊 藤 第主に消える絆か春の雪 出雲市 園 山 多賀子 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女とりの蹴爪がだるいような春 と立ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女とりの蹴爪がだるいような春 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 にの里に齢重ねる雪女 とが はんて解いて出雲の神も複雑にとが はんて解いて出雲の神も複雑にとが はんて解いて出雲の神も複雑にとからぬの晴着	見知る柩が通る椿				にした知恵だから身につか			
出雲市 園 山 多賀子 出雲市 伊 藤学に縋る子歳の果報哉 出雲市 園 山 多賀子 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女とりの晩気を隠すような服 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女とのの蹴爪がだるいような春 と地ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女とかが家を通過してみたり (大力ので包む鏡餅 (大力ので包む鏡餅)の、いっぱいで包む鏡餅 (大力ので包む鏡餅 (大力ので包む鏡餅)の、いっぱいで包む鏡餅 (大力ので包む鏡餅 (大力ので包む鏡)のまって来ぬ日暮れ (大力ので包む鏡)の一次で包む鏡 (大力ので包む鏡)の (大力の変)の (大力	のままに消える絆か春の				の音春には春の音符あ			
第2 (雲市			グ賀ス	雲	伊	藤	寿美
大生独りよがりのベレー帽 大生独りよがりのベレー帽 大生独りよがりのベレー帽 大生独りよがりのベレー帽 大中できな笑顔バラの花 大すてきな笑顔バラの花 大すこころに春も近くなる 出雲市 吉 岡 きみえ 大りの大かけが京より届く式間近 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 出雲市 吉 岡 きみえ 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 大中できな笑顔バラの花 出雲市 古 岡 きみえ 大口と近ば山迷わす桜餅 大口とが家を通過してみたり 大田で飼いて出雲の神も複雑に と中の、大いとない。 大田で飼いて出雲の神も複雑に と中の、大いとない。 大田で見いたがい柄な女です 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女 とかぶ柏手若やぐ日 とかぶ柏手若やぐ日 とのの情気を隠すような服 とのの情気を隠すような服 とのの情気を隠すような服 とのが家を通過してみたり 大田で見いたがないような春 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともぶ柏手若やぐ日 ともが家を通過してみたり 大田で解いて出雲の神も複雑に とりの、大田で見いたが、たこげん言うてみる な長にだんだんこげん言うてみる を長にだんだんこげん言うてみる な長にだんだんこげん言うでみる を長にだんだんこげん言うでみる	の掌に縋る子歳				の街で肥っ			
大生独りよがりのベレー帽 安心して喋る実家の掛浦団 とりの蹴爪がだるいような暦	心翼々大胆不敵という救				い声がコーラスはずされ			
は見からしれない というのは、いだるいような春 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 とがぶを通過してみたりの、いだるいような春 とがが家を通過してみたりの、いだるいような春 とがが家を通過してみたりの、いだるいような春 とがおりの体気を隠すような服 塩草 丘 この里に齢重ねる雪女と立ぶ柏手若やぐ日 はラップで包む鏡餅 塩雲市 板 垣 草 丘 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 は大たか小柄な女です は大たかい柄な女です 出雲市 板 垣 草 丘 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 はまってみる に乗りの跳爪がだるいような春 は、で解いて出雲の神も複雑にとりの跳爪がだるいような春 は、で解いて出雲の神も複雑にとりの跳爪がだるいような春 は、で解いて出雲の神も複雑にとりの跳爪がだるいような春 は、下解いて出雲の神も複雑にとりの跳爪がだるいような春 は、下解いて出雲の神も複雑にとりの跳爪がだるいような春 は、下解いて出雲の神も複雑にとりの歌爪がだるいような春 は、下解いて出雲の神も複雑にとりの歌爪がだるいような春 になんで解いて出雲の神も複雑にとりの歌爪がだるいような は、下解いて出雲の神も複雑にとりの歌爪がだるいような春 になんで解いて出雲の神も複雑にとりの歌爪がだるいような春 にないというなんだんこげん言うで良む はっぱい とりが はんで解いて出雲の神も複雑にとりの歌爪がたるいと、「ないというないと、「ないと、「ないと、「ないと、「ないと、「ないと、「ないと、「ないと、「	掛人生独りよがりのベレー				て喋る実家の掛蒲			
はラップで包む鏡餅 古	大器晩成焦らず二十一世紀				もう少し独りで住むと老父が言う			
はラップで包む鏡餅 おみえ 対ちかけが京より届く式間近へすてきな笑顔バラの花	しれ				レンディドラマの歌で孫眠			
はラップで包む鏡餅 りの職爪がだるいような春 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 と並ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 ちょうな服 りん はしたたか小柄な女です は 草 丘 だんだんこげん言うてみる と立ぶ柏手若やぐ日 は 草 丘 は 草 丘 は ちょうな は は で解いて出雲の神も複雑にとりの蹴爪がだるいような春 に は うっプで包む鏡餅 りんすてきな笑顔バラの花 特糸とく日を想う娘の晴着 は ファブで包む鏡餅	雲市		ATT - 1	ひみょ	出雲市	小	玉	満江
はラップで包む鏡餅 りの職爪がだるいような春 とりの職爪がだるいような春 とかの職爪がだるいような春 とかの職爪がだるいような春 とかの職爪がだるいような春 とかの職爪がだるいような春 とがぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 とがぶ柏手若やぐ日 とがぶ 神道などのでかせぬ出雲は雪の花 はんで解いて出雲の神も複雑にとりの職爪がだるいような春 結んで解いて出雲の神も複雑にとかってで包む鏡餅 りの はんで解いて出雲の神も複雑にとがぶんだんこげん言うてみる はんで解いて出雲の神も複雑にとかっている。 ちんで解いて出雲の神も複雑にとがないような春 はんで解いて出雲の神も複雑にとがないような春 はんで解いて出雲の神も複雑にとかっている。 ちんで解いて出雲の神も複雑にとから、 はいまいないというないまでは、 はいまいないというないというないというないというないというないというないというない	へすてきな笑顔バ				かけが京より届く式間			
はラップで包む鏡餅 塩草 丘 初詣老いたる父の手を引いて 出雲市 板 垣 草 丘 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女と並ぶ柏手若やぐ日 と立ぶ柏手若やぐ日 とかが家を通過してみたり はしたたか小柄な女です ちんで解いて出雲の花の穴かせぬ出雲は雪の花とかの怖気を隠すような服 悠長にだんだんこげん言うてみる とかがないような春 ちんで解いて出雲の神も複雑にとりの蹴爪がだるいような春 ちんで解いて出雲の神も複雑にとりの蹴爪がだるいような春 ちんで解いて出雲の神も複雑に 様糸とく日を想う娘の晴着	人許すこころに春も近くなる				わす桜			
はラップで包む鏡餅 塩草 丘 初詣老いたる父の手を引いて 一羽もどって来ぬ日暮れ 塩草 丘 この里に齢重ねる雪女と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女と並ぶ柏手若やぐ日 と並ぶ柏手若やぐ日 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 石 倉 は長にだんだんこげん言うてみる と は 草 丘 ちんで解いて出雲の神も複雑にとかっ、	賞味期間すぎた女はうるさすぎ				っ赤な酉が書いてあ			
はラップで包む鏡餅 塩草 丘 初詣老いたる父の手を引いて 出雲市 板 垣 草 丘 初詣老いたる父の手を引いて 出雲市 石 倉と並ぶ柏手若やぐ日 と並ぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女と並ぶ柏手若やぐ日 とがぶ柏手若やぐ日 とがぶ 相手	書は				トお餅焼こうか焼くまい			
はラップで包む鏡餅 りの蹴爪がだるいような春 とがぶ柏手若やぐ日 出雲市 板 垣 草 丘 この里に齢重ねる雪女と並ぶ柏手若やぐ日 この里に齢重ねる雪女 出雲市 石 倉	が一羽もどって来ぬ日暮				たる父の手を引い			
はラップで包む鏡餅 躾糸とく日を想うとりの蹴爪がだるいような春とりの蹴爪がだるいような服 悠長にだんだんこしてわが家を通過してみたり 雨傘の欠かせぬ出してわが家を通過してみたり この里に齢重ねると並ぶ柏手若やぐ日	雲市				出雲市	石	倉	芙佐子
はラップで包む鏡餅 躾糸とく日を想うとりの蹴爪がだるいような春 結んで解いて出雲りの怖気を隠すような服 悠長にだんだんこしてわが家を通過してみたり	腰と並				の里に齢重ね			
年はラップで包む鏡餅 躾糸とく日を想うわとりの蹴爪がだるいような春 結んで解いて出雲いりの怖気を隠すような服	してわが家を通過してみ				傘の欠かせぬ出雲は雪の			
年はラップで包む鏡餅 躾糸とく日を想う娘の晴着わとりの蹴爪がだるいような春 結んで解いて出雲の神も複雑	いりの				にだんだんこ			
年はラップで包む鏡餅	の蹴				んで解いて出雲の神も複雑			
	年はラッ				糸とく日を想う娘の晴			

振り返る暇もくれず喜寿の坂世の腰支えて共に喜寿に遇う戦友の屍越えて喜寿となり	波しぶきのり揺む磯の女を追う 大しぶりいい正月だった子が帰る 気関き私の道もひらかねば 炭火焼き昔の味と銘をうち 島根県 石	たいまた の店も電灯煌々客お の店も電灯煌々客お の店も電灯煌々客お	の国へ行との国へ行の国へ行の国へ行の国へ行のの人	島根県松
	田	原	砂	本
	清	秀	白	文
	泉	子	汀	子
解禁の約束日まで妻は鬼」という。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	暦子貼る小言に猫が近寄らず 対房の瞑想ただのひま潰し 対房の瞑想ただのひま潰し が過去れ不倫のパスポート	一スに七草たた一スに七草たた	唐津市 田 口 虹 汀自慢する何物もない笑い声 唐津市 田 口 虹 汀自慢する何物もない笑い声 出直せる若さが欲しい蕗の薹	島根県 高 野 律 子

カタツムリ軌跡は決して欺かぬ ボ道直下 難民達の黒い影 をの雨決して妥協などはない	唐津っ子御輿の時期は気もそぞろ をされて初めて解る荷の重さ をされて初めて解る荷の重さ をされて初めて解る荷の重さ		一日千秋三日逢わねば蛇になる 一日千秋三日逢わねば蛇になる で 一日千秋三日逢わねば蛇になる 一日千秋三日逢わねば蛇になる 一日千秋三日逢わねば蛇になる	i i
	葉	ち	義 高	j
	香	よ	美明	1
税務署へ少し難聴の振りで行くを寿まで生きてとれない角一つのかまで見える双眼鏡見てならぬ物まで見える双眼鏡の下である。	今だから言える夫婦の裏話 長生きをするならいっそ百歳百歳 長生きもそこそこでよい医者通い 善人の足跡がある遍路道 香川県	番川県 を を を 大の友の集いにはずむ胸 を 大の友の集いにはずむ胸 を 大の友の集いにはずむ胸 を 大の友の集いにはずむ胸 を 大の友の集いにはずむ胸	がいる がいる がいる がいる がいる がいる がいる がいる	各
	木	松	中	-
	村	村	塚	F
	1.7	1.1	-m	00

峰

お見合の話題はバラの咲いたこと お正月家族は多い方がいい お正月家族は多い方がいい ス尾市 宮 崎 シマ子 寝てるはずの魔女が見ていた盗み酒		八尾市 古 川 覚然坊うつむいて次の言い訳考える で見ろいつかは買ってやる言葉 かに見ろいつかは買ってやる言葉 ご近所の手前幸せごっこする	乗なこと丸く納めて年迎え がりも子供長者の三ヶ日 がの角を右へ回って三軒目 がなこと丸く納めて年迎え	香川県 成 重 放 任
百年の樹百年もの酸素吐く 超豪邸に心貧しき人の住む 超豪邸に心貧しき人の住む 大阪府 知	5 S	鳥占いで米自由化は凶と出る 鳥占いで米自由化は凶と出る サウナ風呂ずらりと並ぶ太鼓腹 サウナ風呂ずらりと並ぶ太鼓腹	でにをはを並べかえてる春の宵販売機 駅の名前が出てこない販売機 駅の名前が出てこない販売機 駅の名前が出てこない	八尾市
籾		吉		高
Ш		村		杉
77.6-2			津	干
隆		風	留	步

水かえて亡母にも梅の春を告げ	死火山の燻る訳を見付けたり	古希の画布広げて思案ばかりする	柏手を打ち静寂へ眼をつむり	妥協するだけの時間をくれないか	岡山県 小 林 妻	そんなこんなでわたしちょっぴり伸びました	オルゴール愛の証をくり返し	左の手あるがあきらめない右手	お話ってそんなことかとやや安堵	寝返りを打てば新年はずむ音	岡山市 川 端 柳	座席指定第二希望も没になり	洋食のマナー食べればいいんでしょ	惚けてくる誰のせいでもありません	ご主人の足音であり吠えません	うっかりの父ちゃんであり憎めない	笠岡市 松 本 忠	男一匹一か八かの賭だった	ふるさとへ積もる話を持つ土産	見てるのか見られてるのか海遊館	あっちこちきしみはじめたマイホーム	ちょっとしたきっかけだった赤い糸	八尾市 片 上 英
					子						子						三						
国際へ貢献九条軽んじる	遠い過去忘れず今のこと忘れ	この齢でこの身ご先祖感謝する	ご近所は嫌いな犬の包囲網	よく吠える向いへ悩む犬嫌い	岡山市	結び目の所で迷う人生譜	忘れたい過去の話がまた覗き	さようなら途端に腹が空になり	左利きだけを集めて年の暮れ	二枚舌まだまだ明日があると言う	岡山県	背水の陣にいて笑顔忘れない	水を得た魚のように泳いでる	ポケットベルに追われ定年走ってる	生かされ生きて女いまひとり	自己流にねじを巻いたり緩めたり	岡山県	少しずつ笑顔が戻る一周忌	山バトの叫びがつづく森の飢餓	長らえてひとつの点とひとつの灯	生きざまを問えば波紋が治まらず	福寿草 副えば老松若返る	岡山県
					井						荻						千						矢
					上						野						原						内
					柳五郎						鮫虎狼						理瑛						寿恵子

身につけた技を宝として余生均等法明治の女知りませんり等法明治の女知りませんりであったつけが追って来る。単の種蒔いて苦労の肥をやり	十の声かと拍手鳴り止まれの声かと拍手鳴り止ま	童心に還る引き算する歳に 質状書く筆は楽しい老いの鞭 写状書く筆は楽しい老いの鞭 変心を他人行儀で布告する 岡山県 二 宗 吟 平変心を他人行儀で布告する	オークマン掛け話りしばらく休まークマン掛けば答め、地間けば答ければらればられば答ければ答ける。	
これ以上齢はとれない万歩計手の鳴る方へ足が動かぬので困る野に乱れず楢山への象も若くはないな皺だらけ	はのじのととまた。はのじのととまた。まの荷をアルツハイマー軽くするひとりごと話せる人が居て淋しひとりごと話せる人が居て淋し	では、これであげよう尻尾の見えるにされてあげよう尻尾の見えるで来た七草本で確かめる。 一プロの質状へ筆で書く返事した。 一プロの質状へ筆で書く返事	株日がふえて人間倖せか 休日がふえて人間倖せか はが一人私の大事な宝物 娘が一人私の大事な宝物 はが一人私の大事な宝物	仙台市 川 村 映 輝

忙中をついふらふらと行く紋日おどけると案外うまくいく手品おどけると案外うまくいく手品などはると案外があたたかいまかまるく育って風があたたかいましたアタック!春の女神が言いました	版人数票ふえると胸算用 はいたチワワ美人を供につれ 単太子びなに沸き立つ松屋町 は次ちんと言われてあんたほどやない 成人数票ふえると胸算用	強丸運びくすねて隠す手榴弾 ニラ アカザくすりで精気甦り 岩塩を砕いた汁に春の草 岩塩を砕いた汁に春の草	県 る ケで	広島県
λ	П	田	村	解
	公	頂 留 子	新	静
	子		造	風
寒椿落ちて花芯の色冴えるとどいけど娘に我が轍はふまされぬくどいけど娘に我が轍はふまされぬくを腰に重ねた齢教えられ	数山河越えて未だに無位無冠数山河越えて未だに無位無冠数山河越えて未だに無位無冠	三角のバッジ山岳部と判り 三角のバッジ山岳部と判り	猿島の前を動かぬのは男 暦好きに笑い話が多すぎる 原叩く男も首がかかってる	大阪市
	茂	井	中	桝
	見	上	西	本
	見よ志子	上 白		本蕗

	吉 谷 田 川 本		あ ず え き 東		第面市 第面市	中北栗	嶋 川 谷	田 竹 春	実 子 萌 子
つもはなさぬ水仙亡母とね	Ï	J	₱	j	め言葉かみしめる程こわくなる力せず泳げるはずのない浮世のない浮世のない	ŧ	Т	照	子
はなさぬ					として、 自りを にかくなる には、 にかくなる				
別れ上手な男にバスがまだつかぬ三猿を守る奥歯を軋ませて					じてからは苦の世人僧の般若経				
小六法開いて隣の枝を剪る				72	た逢える願いをこめ				
田			希久		市	栗	谷	春	子
の奥のぞかれたくはない				2	L				
この先はどうあれ続く女道					十日戎もうトランプもしまいましょう				
はにかみも女らしさも持って祖母					不景気も得たりかしこし神の御意				
洗って洗って素直な耳になりました				42	書きたいな太郎花子の物語				
歯科予約ついでの用も二つ三つ				22	せた				
奈良県	長谷	1.5		IAV	知市	北	Ш	竹	萌
かし老いての幸を聞くは				21	針の如く刻みん八十路行く				
なき余生の一					の出待っ				
後もどり出来ぬ人生さわやかに					勲祝加え海				
亡友の妻の賀状も来ずなりぬ					舌のうまく回らぬ自己嫌				
り居の愚痴を吐き出す柿					タンドを灯し夜中の読書				
中			あず		面市	中	嶋	田実	子
めぐる生きてることの有難				ş	いと笑われている正				
ッキングチェアー時計はもうい					思案して過ぎた一日影がない				
能面の女になって行く嫉妬					時どきはみよう鏡へ等身大				
みんな夢しかし涙のあとがある					春になれば春になればと言うプラン				
明日こそは素直でいたい夕茜				21	つつましい姉とデートの店を撰る				

大物よ猿の反省見るがよいほしくない歳を正月置いて去に相槌で老いた姑の愚痴も聞き秀才の美女に似合わぬ漫画文字	そのことがあってか父の気が変わり でしてるそんな二人の春遠し 黒枠と祝いが続く春近し 川かなもじに書ききれないが男らの	反省はしてる政治家ポーズだけ 東の入り花屋の花は春の彩 寒の入り花屋の花は春の彩	豊中し張なり	富田林市
		小	辻	片
		澤	JII	岡
	イシ	幸	慶	智恵子
	ユン	泉	子	子
特晴の年始今年に期では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学	暖航談して医師を 駅が静かでよその 駅が静かでよその	新春の闘志箱根を新春の闘志箱根を動きの調を動きの調をがある。	切れ凧のような男 表友と生きくらべ 老友と生きくらべ	
今年に期するものて雑煮のおじいちゃんて雑煮のおじいちゃん	憩大ム張てわ事のれみ	一大ロマン ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	男が舞い戻り 寝ている冷雨降る を羨まれ であ野路菊や 茨木市	松山市
するものおじいちゃい	張れと書かぬ筆 大事故 おせ	の で 真 中 町 田	を野路菊や を野路菊や	Ш
するものおじいちゃい	張れと書かぬ筆 ムの響き小京都 大事故 静岡市	の で 真 中 町 田 市	が舞い戻り がな年賀状 を野路菊や 次木市	市
するものおじいちゃい	張れと書かぬ筆 大事故 静岡市 薗	の ど 真 中 町 田 市 竹	を野路菊や を野路菊や でいる冷雨降る でいる冷雨降る でいる冷雨降る	市

真夜中にゴトンと酒が売れているまう言うわ火の粉かからぬ位置に居てよう言うわ火の粉かからぬ位置に居てより言うわ火の粉かからぬ位置に居てより言うわ火の粉かからぬ位置に居て	i i	せ尾市 松 高 秀 物事の価値はたやすく言い切れぬ かかわりはないが溜息でてしまう がいて花咲く地球の住み心地	の夢に疲れた目覚めですとわたしの味はまだ出ないわたしの味はまだ出ないわたしの噂聞いているとれたしの噂聞いているとれたしの味はまだ出ない	鳥取県 羽津川 公
司	j	峰	美 智 子	乃
藤力ためにからだ壊している選手 最高の治療は生きかたの指導 カード破産暮らしの躾ない罰か があったが産れている選手	お袋の味が売り物束ね髪お袋の味が売り物束ね髪だかれて無口になった国訛り	藤井寺市 だちらにも転んで生きる寒い首 を消してからの自分が恐ろしい がき消してからの自分が恐ろしい があるしい。 を入になりゆく朝の 妬ましき雪	追い風を受ける背にある花芙蓉 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	静岡市
福		中	田	安
元		島	中	本
			1.	
みの		志		晃

年の明日へボーナスの声	炎の句うこ士事の貝	定年の明日を自適ともならず	白増える頭髪今を妥協する	和泉市	ゆっくりと一人の旅がしてみたい	何時までも咲いてたのしい胡蝶蘭	風邪もろておせちどころか熱が出る	帰省の孫東京の風邪連れて来た	貝塚市	一目を置く酒ぐせの悪い人	山形の顔は可愛いさくらんぼ	お人柄偲ばる焼香人の列(武助さんの死)	無謀なり風船おじさん消えたまま	岸和田市	生甲斐の台詞を知った詩とピアノ	老い二人朝の散歩で富士仰ぐ	厨から妻のハミング春うらら	満ち足りた朝なり妻と散歩する	富士宮市	夜の爪を切っても両親もういない	深酒を娘にやんわり止められる	くしゃみ一つ噂をされる覚えなし	屠蘇の膳次々孫が酌に来る	柳井市
				西					行					清					渥					弘
				岡					天					野					美					津
				洛					千					٢					弧					柳
				酔					代					う					秀					慶
入った帽子に夏も	お虱形か今明の童さえ	方広寺鳴らない鐘の守りばかり	シクラメン家族の顔で除夜の鐘	伊丹市 山 崎 君	エスカレーター裾切れジーパン見てしまう	田を肥やすごみも袋へ収集日	就業規則なくて畑にしゃべり込む	勉強の期待外され子供部屋	福岡県 横 地 正	渋滞車尻目に老いの万歩計	三文の功徳早起き鶏を飼う	日本一気高く止まる尾長鶏	一徹な親父清貧を貫きぬ	唐津市 筒 井 朴	経験をかわれ便利屋になっている	安産を拝む姑をまた拝み	歯車がかみ合いハートが合体し	初孫が吾が家の輝く顔になり	加賀市 細呂木 魯	輸入阻止ゼスチュアだけは威勢よい	冬の幸 能登いらんかねんとは言わず	鱈ナマコふんだんに食べ能登育ち	能登弁を聞いて安堵の七尾線	羽咋市 三 宅 ろ

竜

木

好

子

不仲でない隊列別れ飛んでいる 浮気の灯 近所の雀つけにくる 浮気の灯 近所の雀つけに行くがレンデに大きな穴を開けに行くがレンデに大きな穴を開けに行く	い帽子に子猫 一年 をの行列につく屠蘇 をの行列につく屠蘇 をの行列につく屠蘇 をの行列につく屠蘇 をの行列につく屠蘇	年こそ丈夫で翔びたまずけば支えてくれるこそ丈夫で翔びた	い膳どちら先やろ老いこいにっさんしいクラブ活いにっさんしいクラブ活いにったる
寺	松	秋	吉瀬
井	本	元	田尾
東	た が	て	笑 六郎
雲	た だ し	る	女太
金血質年頭 香が板神の 春だ春	プロキ月 の彼一ん ほくーの 世岸番ほ	将具い馬	無 気 デ プ 造 配 の ク 作 り の
を さいます できまれる さい また では は と で は り 切る で が 親 切 だ か ら 追 い や れ ぬ で が 親 切 だ か ら 追 い や れ ぬ で て 藁 一 本 に 縋 り 切る で し で で し で で し で し で で し か い か に じ で し か に じ で し か に が し か に か に か に か に か に か に か に か に か に か	にかわいい寝顔 孫にかわいい寝顔 孫にかわいい寝顔 孫に女性の笑い声 はくたち夫婦だった びロン嬉しい主婦で アロン嬉しい主婦で と味見 老眼鏡はずと味見 老眼鏡はず	では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	な欠伸で相槌するで疲れた上に自腹しわ負けず嫌いの
を を で を で で で で で で で で で で で で で	では では では では では では では では では では	れるくらしもいたに 葉もそばに妻がいる にまがいる	神で相槌する返事 れた上に自腹切る れた上に自腹切る が関すると楽な喉仏
るうちの命と思うまい 大阪市が親切だから追いやれぬが親切だから追いやれぬ 大阪市 はり切る	では では では では では では では では では では	れるくらしもいたにつく 豊中市 豊中市 豊中市	神で相槌する返事 伸で相槌する返事 かの根性が はないの根性が
るうちの命と思うまい 大阪市 稲が親切だから追いやれぬが親切だから追いやれぬ 計呆けないこと―に置く	がおいい寝顔 発も美女 夜は亡母の夢を見る くたち夫婦だったかも くたち夫婦だったかも 大阪市 渡 ロン嬉しい主婦であり ロン嬉しい主婦であり	れるくらしもいたにつく 豊中市 滝 地だんだんと細くなる	神で相槌する返事 作で相槌する返事 かりを表すると楽な喉仏 かりで相槌する返事 がりの長野市 井

を捨ててなお浮かぶ を捨ててなお浮かぶ を捨ててなお浮かぶ	三つ前とボタンきっちり留かこ人 不況には強い戦争体験者 不況には強い戦争体験者 はどほどの高さ保って凧の数	れプに	大阪市 長生きのおかげでとても忙しい いつの日も静かなしずかな人だった (家 が写のふりして驚く聞き上手 できる者がそこまでやって来た なります。
岩	堀	結	神岡温
津		城	保 品
ţ	良	君	神 保 田 ふ
ようじ	江	子	生み
なこと望まないから 大り静かに朝が来て 大り静かに朝が来て です妻の合図でしゃ ですまの合図でな をても死の合図でな をでも死の合図でな	では、 ででは、 ででは、 ででは、 をは、 ででは、		で母も来た湯治場温い夫婦酒 のど飴を持参の旅は雪見舟 のど飴を持参の旅は雪見舟 で母も来た湯治場温い夫婦酒
尚	植	小	堀 松
本	村	森	江 尾

喜

代

正

晴

光

子

柳右子

吉太郎

去は過去あしたの天成と言われ希望の灯	また四人仏になった同窓会さりげなくほめて点数上げてくる	鳥取市 美	いくて気のつく妻だ手	裁の中途半端はいけま	での解決うらみだけ残す	一方を悪いと決めていいですか	鳥取市 春	しゃれですか第九を歌う大工さん	ここだけの自慢であれば軽い刑	ごっつんこしてから解けた説明書	菜の花もあの児も伸びてひなあられ	寝屋川市 平	割勘へこまめに動く下戸の箸	だます気の涙へわざと乗ってやる	甘栗の袋半分みな空気	子の反応もう現れたお年玉	堺市一	世辞と美酒罠が待ってる奥座敷	遊びたい盛り重たい塾の足	少しだけ父の威厳がある台詞	恋人が出来た娘の下手な嘘	箕面市 椎
		田					木					松					瀬					江
		旋					圭一					かす					福					清
		風					郎					み					_					芳
バルがめ い	皇室のニュース		行列の出来る	ように	忘れ助	六十年もは		男傘身の	伝説の湖	海が好き	フィクシ		カナダ	貸す金	ほめら	生生流		責任は	さい銭	明日のこ	酉年かト	
き伸び	ス不況をぶっ飛ばすの嘘が聞きづらい	鳥取県	おいしいラーメン	なるさ楽しい方	れたり助けたり	使えば古くなりますわ	鳥取県	上ばなししたくなる	湖で毬藻は人を恋い	き青のクレパスよくちびる	ション実話通りで身に迫る	鳥取県	ダ産ソバも日本の味になる	す金は出せぬ酒だが酔ってくれ	れも殺されもせぬパートです	転 特攻基地に草繁る	鳥取県	課長の少し上がとり	は少な目願い山とする	ことラッキョウむいて考える	トサカにきたという男	鳥取県
めき伸びて来る不安	不況をぶ	取	おいしいラーメ	なるさ楽しい方がい	れたり助けたり	ば古くなりますわ	取	上ばなししたくなる	で毬藻は人を恋い	で青のクレパスよくちびる	ョン実話通りで身に迫る	鳥取県石	も日本の味に	ぬ酒だが酔ってく	も殺されもせぬパー	特攻基地に	鳥取県 上	の少し上	少な目願い山	+	サカにきたという	取
いらして困る	不況をぶ	取県	おいしいラーメ	なるさ楽しい方がい	れたり助けたり	ば古くなりますわ	取県	上ばなししたくなる	で毬藻は人を恋い	で青のクレパスよくちびる	ョン実話通りで身に迫る	県	も日本の味に	ぬ酒だが酔ってく	も殺されもせぬパー	特攻基地に	県	の少し上	少な目願い山	+	サカにきたという	取県
いらして困る	不況をぶ	取県幸	おいしいラーメ	なるさ楽しい方がい	れたり助けたり	ば古くなりますわ	取県西	上ばなししたくなる	で毬藻は人を恋い	で青のクレパスよくちびる	ョン実話通りで身に迫る	県石	も日本の味に	ぬ酒だが酔ってく	も殺されもせぬパー	特攻基地に草繁る	県上	の少し上	少な目願い山	+	サカにきたという男	取県谷

まれた牡丹よ春はもうそこれことを残そう先は短いぞのようと古いからから抜けっぱりと古いからから抜けっぱりと古いからから抜けっぱりと古いからから抜けっぱりと古いからから抜けっぱりと古いからから抜けっぱり	寡婦として母が示した道しるべ古里の道でやさしい風に逢う一ランク下げて気楽な灯を囲む我が人生の賞は子宝「孫ひ孫	真実に触れると弱い涙つぼ 鳥取県 黒 田 真実に触れると弱い涙つぼ	鬼のけぬ鶴が吹雪に溶けてゆく をろそろと僕の出番にまずトイレ はつけぬ鶴が吹雪に溶けてゆく はからの手紙に白い雪が降る	(4)	鳥取県石尾
八重		1	節	3	かつ
乳旦朝の手に日生生 おり	保険料払えば安心 うまい酒花の笑顔 税のない空気で味 壺の中 探ってみ	が が をの有る人は馬 が が が が が が が が が が が が が	子 しめ飾りつけ	股関節植える 東っ白いナー	乃
初きるが家のおり	心料くれる味がわかりかね味がわかりかねる	椿も枯れてい	りつけたレッカー車と走る 本で禁煙しようとは思う 本で禁煙しようとは思う せて家計簿を埋める妻	いたみを越えて春 ないたみを越えて春 りたみを越えて春	鳥取県
初日の出 初日の出 出雲市 小白 はい 出雲市 小白	料くれる とたわむれ がわかりか	権も枯れている 出雲市 板 出雲市 板	車と走る 鳥取県 太	いたみを越えて春 鳥取県 鈴が出る手術台	取
初日の出 ***	料くれる とたわむれ がわかりか	権も枯れている という をに目をそむけ という という という という という という という という という という	車と走る 鳥取県	いたみを越えて春 鳥取県 鈴 木が出る手術台	取県

葉にも本音を飾る日のこわさ	依立ちの唄もさらやか良が巣立つ	飲むために正月待ってた酔うもよし	摑めない女の心理待つ売場	島根県	郷土史の真実にやっとたどりつく	父の地図ゴールのテープ張ってない	不整脈冬の到来するきざし	白黒をきっぱり言った自尊心	出雲市	七転び八転びもある夢芝居	案の定 息子が突いたワンパターン	満天の星が見ていた隠れ宿	咲くことも無常 阿難よ舎利弗よ	島根県	髪染めて誰に見せようお月さま	沁み込んだ苦労いたわる羽ぶとん	商魂に徹した顔の春鏡	居直って唄と踊りで華やごう	島根県	末席に自分の席がある不満	賢愚の差 週休二日に試される	青虫の悩み忘れた蝶の羽根	だんだんと妻のしぐさが母に似る	出雲市
				石					島					佐					藤					竹
				飛										々木					原					治
				水					祥					芳					鈴					ち
				煙					庵					正					江					かし
お彼岸にカカサヌ伯母はもう来ない	っずか它よ关	身を立てた人古里の家を捨て	気兼ねなく一日過す寺詣り	香川県	螢籠少し疲れてぶら下る	彫り進む石は仏になって行く	会者定離彫りの深さが似てる人	酸欠の海に面舵ままならぬ	倉吉市	父にダイヤル回して母の今日終わる	追い越した鬼ずっこけてばかりいる	余命表手にして夢が遠ざかる	初夢の枕を高くして見よう	岡山県	嫁笑顔姑の人柄解ります	ソマリアの国には神も御座さぬか	日蓮宗団扇太鼓のリズミカル	お世辞でも歳より元気と言ってくれ	岡山県	その場所でまだ足踏をしてますか	障子張る亡母のようにはまだ張れぬ	夫と祝う一月十日の誕生日	嫁と娘にまかせて過ぎた三ヶ日	島根県
				工					最					山					池					槻
				藤					上					本					田					谷
				吟					和					玉					半					
									L.L.					735					11					-11-
				笑					枝					惠					仙					葉

ライバルの後ろ姿も悩んでるエイズも癌も伝説になるだろう(白兎神社に参詣)	門松が取れてようやく一月に睨み鯛 酉の一字や初芝居飽食の国を目指して万羽鶴	おみくじの大吉だけは信じよう 本泉市 岡 井 やすお 歴 単 専っ仕草哀しい脳病棟(松本すすむ氏を偲んで)	まだ飯が早いと勝手言うお酒取り替える部品が欲しい老い始め かいおいおい おおり おおしない おおい おいがん おおい おいおい おいおい おいかい おいかい かいがい かいがい かいがい	大までも売った田に来て吠えている新しい川たのしみに妻が耐え 傘の柄が取れて新居を持ちました	野仏が春のカスミの道しるべ 実年も負けてはならじチョコ贈る クセのある賀状一枚見付からぬ	香川県 池 内 かおり
ペンだこが褪せて血圧安定す 春風が内緒話をみなばらす 色眼鏡はずして見えた虹の橋	終役	大阪市 町 田 達 子ほろ苦い味がしている母小言 御の皮つっ張りすぎる願い掛け	いたみのわかるナースにやっとめぐり逢うさすが婦長 笑顔で物を言わせてる目の位置に子どもをおいて物を言う	いつの世になれば落ちつく世界地図税収減が身に沁む企業城下町	と と を を を を を を を の で は で の で は で の の で は で の の で は で の で の で の で の で の で の で の で の の で の の の の の の の の の の の の の	守口市 森 川 まさお

寒椿 亡父の約束果たさねば	エスカレーター初春の客汲み上げる	心電図 私の人生鼓動する	島根県加	反骨精神もった白髪が立ち上がる	年金の部屋に福祉の陽が当る	境内の梅を選んだ四十雀	倉敷市 井	成り行きにまかせてみよか白髪染	暮れかけてあわてた石にけつまずく	目盛りより手首確かな水加減	香川県新	妻の手に歩幅合わせて青信号	こうなればあなたに歩幅合わせます	酒呑ませちょっと聞きたいことがある	鳥取市	風切ってすこし声高車椅子	白寿祝う父にたしかな国訛り	思い出の日記に触れる冬の夜	豊中市	合カギが幾つも欲しいもの忘れ	赤ちゃんが出来て禁煙誓わされ	厳しさが足らぬと叱る冬の空	和歌山市
															前				三				北
			本				上				JI				田				宅				山
			義				富				マサ				_				つえ子				好
			良				子				工				枝				子				笑
注意力低下 煙草にすぐ頼る	酔いざめの水へ小言を添えて出し	青年の覇気に燃えてる主張買う	茨木市	初夢も同じでなかった老夫婦	誕生日生きているかと保険庁	誕生日暗誦番号で忘れない	豊中市	クモの子が早や啓蟄の空に舞う	左利き器用貧乏親譲り	銀婚式キツネとタヌキ共白髪	大和郡山市	初めから騙すつもりの兎飛び	故郷の山は誓いを破らない	早春へ誓い新たに髪をすく	倉吉市	七草をいただく今年この健康	松葉ガニ今日の暮らしと値をくらべ	今年こそなんて日本語美しい	出雲市	ワープロを手品のように打つ若さ	同じことニュアンス違え喋られる	美智子さま雅子妃にある時代相	吹田市
			藤				井				坊				米				富				瀬
			井				上				農				田				田				戸
			正				直				柳				幸				蘭				まさよ
			雄				次				弘				子				水				5

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころの

路郎は昭和4年1月号から三回に分けて、

橘高薫

風

これはあながち年の加減でもなさそうだ。これはあながち年の加減でもなさそうだ。これはあながち年の加減でもなさそうだ。これはあながち年の加減でもなさそうだ。これはあながち年の加減でもなさそうだ。

と、女性観察の子細に触れたあと、選者の要 ・川柳の作家もそうである。その作家の句風 ・川柳の作家もそうである。その作家の句風 を静かに見ていればどっかに長所を持ってい を静かに見ていればどっかに長所を持ってい を静かに見ていればどっかに長所を持ってい を前から豊してかからねばならぬ。 は、先ずその眠りから覚してかからねばならぬ。 模放作家には、その句が模放句であることを自ら悟るようにしむけなければならぬ。 とを自ら悟るようにしむけなければならぬ。 とを自ら悟るようにしむけな外に歩外に去ってしまっては、その作家は永久に埓外に去ってしまっては、その作家は永久に埓外に去ってしまっては、その作家は永久に埓外に去ってしまっては、その作家は永久に埓外に去ってしまっては、その作家は永久に埓外に去ってしまってしまっては、その作家は永久に埓外に去ってしまっている。

欠くならば、勢い作家を混沌たる世界へと追

しい。二句抜けた、嬉しい。二句抜けるよりいやってしまうものである。一句抜けた、嬉

の選句に定見がなく、作家の心を見るの明をい。作家の心すべき点もそこにあるが、選者いたならば、決していい収穫があろう筈がな

度で作句を続けて貰いたい。"と。
であるから、作家自身も、そうした真摯な態である。私自身は常にそう考えているのである。私自身はすべての女に美しさを発見、かる。私自身はすべての女に美しさを発見、かる。私自身はすべてのなに美しさを発見、かる。私自身はすべての作家に対して、その美点を発見することに努力を惜しまないのであるから、作家自身も、そうした真摯な態であるから、作家自身も、そうした真摯な態であるから、作家自身も、そうした真摯な態であるから、作家自身も、そうした真摯な態であるから、作家自身も、そうした真摯な態であるから、作家自身も、そうして

らぬことを強調する。また、川柳家は、芸術的進化を努めねばな

保守派のグループは、その作品において保守派のグループは、その作品において ない。(中略、保守革新ともに、自己の作品ない。(中略、保守革新ともに、自己の作品ない。(中略、保守革新ともに、自己の作品ない。(中略、保守革新ともに、自己の作品ない。(中略、保守革新ともに、自己の作品ない。をxpressの問題を全く忘れている作家がある。What to say の問題に煩わされ、属する人も、What to say の問題に煩わされ、属する人も、What to say の問題に煩わされ、属する人も、What to say と How to express の問題を全く忘れている作家がある。What to say の問題に煩わされ、成立ない所まで進展する作家が出現するとすればならない。

(この項、次号につづく)

がはじまる。これは川柳を学ばんとするもの

そうした選がいつまで作家自身の侮蔑を買わした投句家心理を私も知らぬではない。が、三句抜ける方が更に愉快であるという、そう

てしまう。先輩の句に憧憬するところに模放

八十路にも彩塗る自魚花の咲く夢を見ている流花の咲く夢を見ている流れの味の夢を古城に ってる渡 とん ぼ

藤

村

女

日負が生き 場に偲ぶ梅 の渡り鳥 生きて

V る

木

代

宝 証貧 人は 石 の店嘘 知 る大臣 0 練習

して

ます

が出てくれず

T.

藤

甲

元日 3 に入っ たことがない んじる

兄死 h を糖尿 の上の! 風 虚

(兄死去 + 本

月二十日 田 恵 行年八十八歲 朗

自画 帰 策 自 り列車 0 足 讃し合う D てつくり 乗り 継ぎ乗 車 とワ 座 ほ り継 ル 0 " ぼの 描 V ٤ To

大 矢

+

郎

— 40 −

Ŧ

紅歓 ス

白声

の餅とも

か 祝 8

康

to 63

ic

揉

休まれ

12 かい

餅 7

痛

1

17

チ

才

>

米

かい

餅

父は餅

0

重さに

飛 べくも

あきら 健 は お

to

けら

n

る

餅も

13

くら 翔

か

搗

いておく S

里猿口

真

似

\$

楽し

H

な

し合

数

て

勝

0

たつ しからずやいんつもりが

負

け

7

10 た

子

小

出

智

散

天堂で 情 求 ぶ億 書 雪 0 8 運 H より 42 3: た通 時 世 確 知に か 簿何 な 見 不 太子

せに来

る

足

0

Ħ

請遊

友だち

0

帽子

を被 \$

らせてもらう

n U

になって故里らしくなくなった

・チを黙ってくれ

た男の子

電山

車の

見える窓が無性

無性にほしくなる

る

1

は

何

時

堂で封を切られるポチ しくもて余し 袋

任強

いそぞうにい 八だと自 一つ三つ どっか 3 Ì 医 が助老 急 理 女 漬 買 0 0 を頼るし つって そり 歯餅 者 達 のに 12 # 物 妻 V る片 ざわ か 幸 0 0 時の 育 者で居るという安堵 界 かれ 好 白 のジ 々 責 む 7 と冬 きなな 師 K 7 ++ Va 0 よく 笑うの だ意 3 命 雪 か 埶 あ n " あ 走 たけでよ かなに 夫が b à は がふ近 がの 0 かい 0 皆にくる 座思 無理 頃 幸 が 家 た 街 させに お 酔 も恋 L II 1) 12 12 かい を 抜 た 込編て 12 あ とろえず 0 か はめ しせず 7 かか とて せ殺 n みむ n D V 3 波 金 遠 IF. 多 本 井 Ш 野

Ŧi.

楽 庵

連れ合は日も耳

援 \$

13

1

17

プ

人 1

鬼手

14

心

L

Va

小

フェ

才

赤 力

灯

1

一提

黒酢みお

t

ち

料

水

セわ追平根

10

80

3

代 せ

更とも

を今

b か

ta

ば な

FI.

17 蔵

来

ょ

だ

n

17

之

日 地

だ

まる

負 時 幸 0

目

枚い

脱がせる妻が居る日を背負う鍋が煮り

が煮え こえず

脱

7 か 0 な 春

休豆ごん

百黒ぼ

合

お

n

安堵 ボ D 用日 しに ボ 譲 D 3 野れ 0 五. 道 1 体 台 0) 草の と語 幕 風 1) げ 合う き上 包 3 ds. げ

ぼ木四足十

L

袋五

足

枯火

1

た

h

鍋

b 12 To 野 道 静 か野 に道 振の 1) 返る

勝 0 た 後 0 仕 元末がや が気忙 12 岩 本

雀

踊

文

秋

き晩の言ら酌んい 古 くさ U わの n 胡 n 男で るおや 5 식소 生 きる 孫 世 i が来 間 7 0 目 な 7 がい かわ 怖 と打 n 診 1 Vi

齡 度と来 X 今日 をう 0 む 10 7 は お n 水

腰 雑 負 と臑 煮餅 けは 惜 齡 数がふえたを 撫でてよしよしよし 命 み寝床 は 命 陽 で年を読 を浴 聞 き飽 U 2 直 か 嫌せ

児 島 5 呂

野 村 太 茂 津

山

住

粉

Ŧ

		10101010101010101	***********	***
罪意識など無い街の自己主義者、人工が面白がっている訛り、人民質堕落接ぎ目を誤魔化され、人正が面白がっている訛りである。	蕎麦食えばそこに池波正太郎 な治不信マスコミ不信自己不信 で治不信マスコミ不信自己不信 を対けれる衆愚と言う勿れ	湾岸の名はフセインのいる限り ローンと言う名の借金は悪びれず 頂点のやがては亡ぶ影を持つ を を を は の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に に に に に に に に に に に に に	青い空つくづく余命ありがたし 西年の鶏冠がまぶし年賀状 西年の鶏冠がまぶし年賀状	の可見の行べ目
恒		谷	月	松
松		垣	原	Ш
tıl,		史	宵	杜
紅		好	明	的
皇フ雪生白 太ィがか鳥 子ナ舞さが	三 面鏡の 双六も 松三日	船も朝エ初頭イシイ	一 お 性 あ お 年 陽 格 い 如	5
妃ーうれ恋 の み 華ラ八さ	闘う眉を描き分ける 顔が歪んでゆく文化 カルタもパソコン振り向かり嬉し涙を拾う頬	が一服つけて待つ三途が一服つけて待つ三途が一服つけて待つ三途がなお恐い	が決まりに、ほん賑やかいの違い反対向きたがりでいるに強い反対向きたがりのではいて対向きたがりのでいる場ではない。これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、	1
妃の決まる明るい春の宴ーレ華が舞うている舞台うドラマ別れの人を恋うれて八十路仕事を追うて恋のささやき舞いながら	闘う眉を描き分ける顔が歪んでゆく文化あルタもパソコン振り向かずり嬉し涙を拾う頼	一服つけて待つが死ねばと本音が死ねばと本音	次まりに、ほん販やかい 違い反対向きたがり の明るい顔に逆らえぬ の明るい顔に逆らえぬ	1
妃の決まる明るい春の宴ーレ華が舞うている舞台れて八十路仕事を追うて春恋のささやき舞いながら	関う眉を描き分ける顔が歪んでゆく文化かぶすり嬉し涙を拾う頼テレビへ丸い背が二つ	一服つけて待つ三途が死ねばと本音確かめるが死ねばと本音確かめる	次まりに、ほん賑やかい なを初詣に賭ける からまさにいつも騙される でのうまさにいつも騙される かんしゅう しゅうしゅう しゅうしゅうしゅうしゅうしゅうしゅう かんしょう かんしょう はんしゃ かいしょう はんしゃ かいしょう はんしゃ かいしょう はんしゃく かいまい はんしゃく かいしょう はんしゃく かいしゃく はんしゃく かいしゃく かいしゃく かいしゃく はんしゃく かいしゃく はんしゃく かいしゃく かいしゃく かいしょう はんしゃく かいしゃく かいしゅう はんしゃく かいしゃく かいりん はんしゃく かいしゃく かいりん はんしゃく かいしゃく かいしゅう はんしゃく かいしゃく かいりん しんしゃく かいしゃく かいしん しんしゃく かいしん しんしん しん しんしん しんしん しんしん しんしん しんしん し	小林
がいた。 があっている舞台 のでささやき舞いながら でのささやき舞いながら でのささやき舞いながら でのささやき舞いながら でのささやき舞いながら	関う眉を描き分ける顔が歪んでゆく文化り嬉し涙を拾う頼テレビへ丸い背が二つ	の波止で夕陽を掬いあげ より汚職の悪がなお恐い が死ねばと本音確かめる 一服つけて待つ三途 有	次まりに、ほん販やかい 違い反対向きたがり の明るい顔に逆らえぬ の明るい顔に逆らえぬ	小

なまこ 老和 孫 た お お春 花 勾 ば 8 玉 法をかえても 勘 ま 潰 茶 句 勝 邪 1 は 柄 咲 n 頰 n 席 Vi を 症 0 終 ~ + 尚 Vi 0 ち 0 Va 食 屋 と寝 \$ 之 寮 H 2 T U 引 0 ++ 4 0 H 0 Vi き合い う海 を探 亡 笑顔 な春 き 足 外 妻 母 2 な お 世 E Va 2 妻を重 んがうつ 旅 椀 \$2 X to h 7 は が 0 から べさんは な優 鼠 うほ す 重 12 占 人 み仏その が来たぞと虫 0 磨 0 ル か 戦 かい 世 前 る 舟 べぎは こころを掻 た 0 た Va 人 話 頃 祝 江 3: 涂 0 ta 湯 た孫の たい を食 する 茶を 0 12 賀 気 箸 な 寒 しんどそう t 10 10 ままに E 食 Ш 0 電 0 V 0 3 喫 鍋 話鳴 ば 櫂 0 10 娘 ほ 0 5 入 40 6 とり だよ もうつ n かり 嫁 如 料 1 から きたてる 寝 か 理 n 息 す (悼 3: せに 野 黒 松永すすむ氏 橘 高 H 杉 III 高 素 鬼 紫 薫 郎 香 風 遊 うま 縮 老け 空白 太子 耳 野 猿 鬼 お 10 パ源 お ラソ 茶を飲 1 良 石 0 荷 0 1) 車 あ こまる 峡 誕 爼 物 猫 は 底 きても n を越えると忘 0 D 才 亀 生地 歴 别 F 1 だけど明 こと貧乏ゆ ど力見えず不義 0 鳥路 石 目に たなあ 史 \$ 時 訳 な n to む 朝 は 間 時 打 間 視線を避 0 12 歷 散 1) た 廃 史を忘 を潰 あ 孤 化 てずだら 0 養 無 車 舞 た 曆 視さ る る 児 たことな < 子 b 0 台と言 Ł す は お Ш 10 0 す n " ń U け 6 + 空 14 面 to 0 南 n 10 n だら とり る年 発理する に う たも U チン れそうだ 7 n 変 う 石 10 急 飛 声い 弱 n 0 万 10 n ゲごと 棚に るわ 謎 0 歩 母 か L コ 0 身 ま か 鳥 ば 計 3 た余 頃 1 0 か あ n か 海れ げ n 生 3 SII 四 植 विर् H 村 萬 内 柳

萬

的

天

笑

遊



昭和二十四年度こそ、この整理反省のはじいがの柳誌が育っていったのが昨年度の川柳界でした。 しかしそれはそれき必要のものもあります。しかしそれはそれき必要のものもあります。しかしそれはそれき必要のものもあります。しかしてればそれもし成長すべき価値あるものは健全に発育もし成長すべきものは解消するでしょう。 いかの柳誌が育っていったのが昨年度の川柳界かの柳誌が育っていったのが昨年度の川柳界かの柳誌が育っていったのが昨年度の川柳界かの柳誌が育っていったのが昨年度の川柳界かの柳誌が育っていったのが昨年度の川柳界かの柳誌が育っていったのが明神を表している。

まる年ではないでしょうか。私の川柳生活三

は勝気で、ということは負けたくない火のよ

幸せです。 中立年間、川柳的生活の中に耐えるべき時に 大五年間、川柳的生活の中に耐えるべき時に 大五年間、川柳的生活の中に耐えるべき時に

失ってはじめて創造のよろこびを識り、建失ってはじめて創造のよろこびを識り、建から流気も生れました。句会へ出なくても、別の意欲も生れました。句会へ出なくても、設の意欲も生れました。句会へ出なくても、設の意欲も生れました。句会へ出なくても、設の意欲も生れました。句法ので、くみ上げる井戸水のつるべに句は生れめて、くみ上げる井戸水のつるべに句は生れめて、くみ上げる井戸水のつるべに句は生れました」(『無名子抄』脇田梅子) 脇田梅子は明治32年7月19日東京生れ。「石坂(旧姓)梅子の名は、当時(大正時間) 「石坂(旧姓)梅子の名は、当時(大正時間) 「石坂(旧姓)梅子の名は、当時(大正時間) 「田村の東京には、一大田の本のようには、一大田のようには、一大田の本のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のまりには、一大田のようには、一大田のは、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のようには、一大田のよりには、「田のま」」には、「田のようには、一大田のようには、「田のようには、一大田のよりには、「田のま」」には、「田のようには、「田のま」」には、「田のようには、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のようには、「田のま」」には、「田のまり」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のまりまりには、「田のま」」にはいまり、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」」には、「田のま」

うわけ。

がらない文学青年だった。
ぶらりひようたん」の高田保、現『宝石』

の匂いをふくらませて、庶民の間に注目されいれても、関西調の軽味になじまないで重いわれても、関西調の軽味になじまないで重な味を持ちつづけていること。(中略)厚な味を持ちつづけていること。(中略)厚な味を持ちつづけていること。(中略)の匂いをふくらませて、庶民の間に注目されているにながら脇田・大阪市の教育委員長の脇田勇といういまは大阪市の教育委員長の脇田勇という

・貧乏にこりてお金を情夫とする 梅子で、柳樽寺の句会などに出たころは、おんとし十六歳。だから現代の十代に劣らざるシュし十六歳。だから現代の十代に劣らざるシュし十六歳。だから現代の十代に劣らざるシュルランの誉れがあったというものだ。

(『無名子抄』寄稿小生夢坊) ないけわし苺無残につぶされる "」 貧乏にこりてお金を情夫とする 梅子

女史は近藤あめん坊を師とし、白鳥(神戸)きいて、早速に道頓堀の自宅を訪問する。

舌足らず披講に毒舌を浴びせた。 舌足らず披講に毒舌を浴びせた。 「川柳は活字からくる感慨だけでなく、披講 が川柳は活字からくる感慨だけでなく、披講 によって味わいが出るものである。と大阪の によって味わいが出るものである。と大阪の によって味わいが出るものである。と大阪の によって味わいが出るものである。と大阪の によって味わいが出るものである。と大阪の によって味わいが出るものである。と大阪の によって味わいが出るものである。と大阪の

とはどんなものかときくと、早速機関銃のようにまくしたててきた。 "大名の夜這いドサうにまくしたててきた。"大名の夜這いドサッドサリかな"を現在の川柳が数歩も出てなリドサリかな"を現在の川柳が数歩も出てなりがのは遺憾ザンスよ。 "就職につかれ鯨肉かいのは遺憾ザンスよ。"就職につかれ鯨肉かいのは遺憾ザンスよ。"就職につかれ鯨肉かいのは遺憾がンスよ。"が、

さて川柳作家としての腕前はわかるとしてで静かな暮らしに入りたい。と述懐しているとしてで静かな暮らしに入りたい。と述懐しているさに、女史は川柳そっちのけで師走をキリキけに、女史は川柳そっちのけで師走をキリキけに、女史は川柳そっちのけで師走をキリキけに、女史は川柳そっちのけで師走をキリキけに、女史は川柳そっちのけで師走をキリキけに、女史は川柳そっとしての腕前はわかるとしてで静かな暮らしに入りたい。と述懐しているさ、川柳作家としての腕前はわかるとしてで静かな暮らしに入りたい。と述懐しているさ、川柳作家としての腕前はわかるとしての煙草小売である。

この『無名子抄』なる紅布張二百余頁の瀟の川柳を思い出した」(『無名子抄』K生)。かかる時 男であればコップ酒』の女史らしいとみた。

も銀行屋さん五、

六行には殊の他信用がある

は加賀嘉行。昭和60年11月13日死去。 西な梅子句文集は、昭和61年の発刊で、編集 西の『無名子抄』なる紅布張二百余頁の瀟

和十年、脇田家が西区北堀江の頃のこと。た

「梅子は私の義母にあたり、川柳には私は「梅子が病気入院中に、川柳関連の各新素人。梅子が病気入院中に、川柳関連の各新理し、お世話になった方々に配ったものです」というのは、この人の筆者あての書簡。併せというのは、この人の筆者あての書簡。併せというのは、この人の筆者あての書簡。併せというのは、この人の筆者あての書簡。併せというのは、この人の筆者あての書簡。併せというのは、この人の筆者あての書言。併せというのは、この人の筆者あての書言。併せというのは、この人の筆者が表している。第一号には、一貫の長いのがみてとれた。

古柳誌に、梅子先生歓迎句会や寄稿のエッセ古柳誌に、梅子先生歓迎句会や寄稿のエッセ地帯』や古下俊作主宰の『番傘川柳富士』の地帯』や古下俊作主宰の『番傘川柳富士』の時話に、梅子のほ子はそのわが家を「無名居」とした。 ここはまたよい川柳の渡りぞめ 水 府

「脇田むめさんを知ったのは五十年前の昭います」との鋭い感覚をほのめかせている。け、やがてその時代が訪れることを確信してけ、やがては男性作家への句に新しい芽を植えつやがては男性作家へいりに新しいまを植えっ

てつけの悪い、しもたや風の家で、表に筆の下―スの見本を少し並べてあり、東郷平八郎か一大の見本を少し並べてあり、東郷平八郎書の『修静』の軸を掲げた小学生向きの塾があった。当時は、むめさんが家計をしきっていて、そのことでご主人の勇さんと、たえず口論をしていたのを昨日のように思い出す。 むめさんは感情の豊かな人で、文章表現もむめさんは感情の豊かな人で、文章表現もびみであった。そのことが、残された川柳に巧みであった。そのことが、残された川柳によくあらわれている。

が新婚は傘が待ってる雨の駅

「新婚の」というところを(は)にしているところが、心にくい表現であり、普通の人るところが、心にくい表現であり、普通の人の筆ではない。むめ夫人が元気なときに、川の筆ではない。むめ夫人が元気なときに、川が、それが果たせず、本人が病気になってかが、それが果たせず、本人が病気になってから、加賀君らの力でやっとこの本が出来ることになった」(『無名子抄』あとがき・山中林とになった」(『無名子抄』あとがき・山中林

▼次回は「原 独仙」

女性川柳家の育成に熱心で、それらの人々の

イなどがある。それらに目を通すと彼女は、

あたり、今年の師走は大変らしいが、それで

柳籠裏三篇研究(ナベーナリー)

佐 田 藤 秀行・紀 要人 ・八木 内 恒 敬 西 七 久 原 保 博 亮

野温干・青 木 迷 朗

鈴木倉之助 故 岡 田 甫

278 是ハめいわく文使しかられる

動く句とも言うべきか。 親とも、また遊び好きの亭主の女房ともとれ 家業。叱っているのはドラ息子の父親とも母 青木=「文使」は、吉原の手紙を客に届ける

物か新米のような匂もする。 て要領がいいだろうが、この文使いささか堅 文使もベテランともなれば、そらっとぼけ

文使御用にちょっとよび出させ 文使そらっとぼけが上手なり = 34 九 24

279 岡田 しまりの無ひ鐘の音池へひゞき

文使引っ裂く迄は見てかへり

れがしていたらしい。 の時の鐘で、諸書に見られるように、ひび割 青木=「しまりのない鐘」は、当時の東叡山

射してびりびりは、さぞ耳障りな事だったで 佐藤=賛。ただし、「しまりのない鐘」は、出 飛び上がらせるほどに響いたかも知れない。 しょう。特に出合茶屋で密会の男女の肝には 合茶屋にいる、しまりのない奴、に利かせて 池は不忍池で、割れ鐘の音が池の水面に反

かせるのはどうであろうか。 岩田―なるほど、しかし、出合茶屋までにき もいるだろう。

まで句のひびきであって、正面の意ではない。 には出合茶屋があろう。しかし、それはあく 西原=佐藤説に賛。不忍池に響くという発想

岡田=賛。やはり出合茶屋がきかせてある。

育王山おしひ旦那の跡がたへ

阿育寺。 青木―「育王山」は中国浙江省にある育王山

千両を栄朝へ献じたと伝えられている。 ってもらおうと、一千両をこの育王山へ、二 るとは限らない。むしろ他国で限りなく弔ら いても、子孫が永久に我が後生を弔ってくれ 平重盛、我が朝に如何なる善根を施してお

という穿ちを効かせた句 主題句は、寺側から見ればこうもあろうか 和の耳を揃へて取った育王山 1 1 0 33

岡田―同 あんのじやう日本で跡のといてなし 六28

十七丁

281

戻りには壱枚肩で四ッ手しよひ

場合は、三枚肩といって、余分の駕篭かきが 佐藤―駕篭は二枚肩が一般であるが、急ぎの

ためである。主題句は、客を目的地で空けて 一人だけで駕篭をひっかついで帰る情景の句 一人つく。これは途中で肩をかえてつっ走る

と見える であろう。 駕篭自体はそれほど重くなかった

ブラ歩いているのでしょうか。 人はどうしちゃったんでしょう。相棒はブラ 八木一替。そこまでは賛なんですが、もう一

岩田=賛。行きの威勢のよさに対するものと

考えたい。 音トさひしくそかえりける四ツ手かご

身であるく 西原=賛。弟分の方がかつぐ。兄貴分はカラ

と思う。 瀬川=礎稿・西原氏説賛。 鈴木―礎稿賛。四ツ手カゴは竹で編んだもの 単純に考えていい

岡田―佐藤・西原説賛。空身のほうはただ歩 で軽い。何かの挿絵にあったと思う。 いつ客がつくか分からぬから。

三芝居からも餞別船へつミ

三芝居は連座しなかったが、同業のよしみで 生島は山村座に出勤していたため、例の事件 で山村座は取り潰された。当時、江戸の歌舞 佐藤―生島島送りの時の句ではなかろうか。 これらは明治まであった。これらの 他に中村・市村・森田の三座

> たかも知れない。 るから、三座からの餞別もこの中に入ってい 両 新五郎の島送りは、正徳四年四月、金子三十 生島への餞別を送ったというのであろうか。 米八俵を持参して三宅島に流されたとあ

岩田一賛。 ぬれ事をまことにしたて鳴へ行 「辞彙」も「新五郎島流し」 と註 七38

岡田―賛

6

283 瓜リ坊をくさりでつなぎ五文とり

題句は、それを見世物に出し、木戸銭五文と その呼称の由来については記していない。主 佐藤―瓜リ坊は、甜瓜猪(まくわじし)とも いうことであるらしい。 いい、猪の子をいう由。俚言集覧にもあるが

ろう。入って見たら何だ瓜坊かと。なれども 西原一賛。 経た大猪ぐらいの口上がつけられたものであ 「五文」が気にかかる。 口がすべって瓜坊を孟母買ひ 山師の見世物で、不二山麓に百年

から、ご存知かと思うが書いておきます。イ 岡田―礎稿に、 鈴木=佐藤兄のお説でよいと思う。すなわち 「木戸銭五文」。 「瓜坊」の名称の説明がない

> かった。 時代にはイノシシは現代よりずっと多くいた どでも同様。五文出しても見る人は少なくな が、都会の江戸では珍しい。イノシシの子な タテに付いている。それで瓜坊という。江戸 ノシシの赤ん坊は、マクワ瓜のようなシマが

尼崎川柳協会

発足記念川柳大会

市立中央公民館3F小ホール 阪神尼崎・阪急武庫之荘からバス)

٢

き

3月21日(日)午後1時開場

ところ 題 (各題2句・午後2時締切) 色 尾畑

吉 友 進 H 達 念 む 田中 田淵 立谷勇次郎選 森安夢之助選 定人選 晴代選

広 生きる」 600円 (句会報郵送 北浦 黒川 紫香選 牧郎選

句 波町1-17-5 三好 62円5枚同封、 〒60尼崎市西難

投 会

費

同 人吟 ―2月号から 小 出 智 子

を少しだけハッ!とさせたり、共鳴したり、 頷かせるものがあればよいと思うのです。 て自分の思いを通して句にする時、無理に上 い格好の句を創ることもなく、ありふれた事 人は平凡な日々を営んでいるものです。従っ 誰でも生きている限り、心配事があったり 特別な生活をなさる方は別として、大抵の

だが、投句する作品の中で一句でも二句でも ではないかと考えています。 キラリッと光る句があれば、それが理想なの 句出来るものではありません。納得のゆく句 体調を崩したりして、毎月、佳い句ばかり投 の創れる月もあれば、低迷の月もあります。

冬の実が幸せそうに赤うなる

なる」よりもこの場合、「赤っなる」の言葉遣 いがとてもやさしく響く。 る作者のものを見る眼に愛情がある。「赤く った。ところが、幸せそうに赤うなったと見 南天がピラカンサスかの実が赤く美しくな 吉田 あずき

木枯しに仄かに思うひとの距離

枯しの音が一層距離を感じさせる。 かくの言葉を付け加えないほうが美しい。木 この句のような心象的な抒情句には、 、とや 夏

暴飲暴食楽しい正月だ

の句がとても新鮮に思える 健康な証拠である。何のテクニックもないこ 朴なお正月を迎えられる人が実に羨ましい。 しみのあるお正月であったらしい。こんな純 思い切り飲んで思い切り食べる、そんな楽 宮口

鶯が見ていて窓があけられぬ

比が実に美しい。 らこの鶯どうなったのでしょうか。鶯との対 瞬を一句に纏めるなんて素晴らしい。それか と驚いて飛んで行ってしまう。鶯とのこの一 てくれぬかと思い、窓を開けたいが鶯はきっ が見える。それを知った者はあわよくば鳴い 窓の外で鶯が家の中の様子を伺っているの 菅 井 とも子

楢山はいいとこですと嫁が言う

とても嫌味で意地の悪い言葉であるのに、あ い。そして、読む者に一瞬、 っけらかんと言ってのけたところに暗さがな のの言い方がおもしろい。じっくり読むと、 この頃のお嫁さんらしいさばさばとしたも 「いいところか

な?」とふっと思わせる。 卵酒 夫婦は風邪を移し合い

て年をとってからの愛情を実感している。そ に若い夫婦ではない。夫婦が互いに頼り合っ んな信頼感が窺える。 この句の風邪を移し合う夫婦とは、そんな

あしたはあした今はお酒を飲む時間

あることも知った。女にはそんな楽しみはな 知り、それが川柳を語り合う大事な時間でも い。羨ましい限りである 男にはお酒を飲む大切な時間のあることを

逆らえば妻の白髪が目立つなり

その一齣を見ることが出来る。口喧嘩をして いても、愛妻家であることが窺える レビなどで見るよりもより鮮明に表現されて 初老の一人の男性の微妙な心の動きが、テ

遮断機が上がると走る癖がある

年身に付いた習慣とはいえ笑えない。も、遮断機が上ると走ってしまうという。長も、遮断機が上ると走ってしまうという。長にしてせかせかと生きている。定年になって宮仕えとは哀しいもので、何時も時間を気宮仕えとは哀しいもので、何時も時間を気

お地蔵さんどんな願いもきき上手

く、「きき上手」によってこの句が生きた。 さんだから納得出来る。「聞いてくれ」でなさんだから納得出来る。「聞いてくれ」でなんだから納得出来る。「聞いてくれ」でなり、「きき上手」によってこの句が生きた。 せい 井 かなめ 松 井 かなめ

仕度完了あとは優しくするだけだ

政 岡 日枝子のところに作者の懐の大きさを見る。 ところに作者の懐の大きさを見る。 かりお祝の仕度が出来て帰宅を誕生日、すっかりお祝の仕度が出来て帰宅を はこの事に限らず、何でも世話する側に回れば同じこと、大きな会であったとしても 通い の 田 大きな のがある。「するだけだ」と言い切ったところに作者の懐の大きさを見る。

振り向いて下さい白いスーツです

句を創らせた。非常に清楚で爽やかな一句。白いスーツを着た日の気負いが一気にこの

校門を出ると風になる子供

学校が終って、校門を出てゆく子供たちを「風になる」と表現している。学校という枠「風になる」と表現している。学校という枠の中から開放された子供たちは暫くは風のように自由であってほしい。この句のように整黒川紫香先生の句に『校門を出ると一年生生る』と、入学して間もない子供の様子を非常にうまく捉えられた句があるが、似ているようで内容は全く違う。

竹を踏む竹に笑われまいとして

堀江芳子

「竹を踏む」というありふれた動作の一つ 「竹を踏む」というありふれた動作の一つ がよく川柳に引き合いに出される。ところが がよく川柳に引き合いに出される。ところが がよく川柳に引き合いに出される。ところが がよく川柳に引き合いに出される。ところが

心にはかかわりもなく一つ年を越す

若い頃と違って、年をとるに従って月日の だんどん歳月が経過してゆくように思われ にどんどん歳月が経過してゆくように思われ にだんどん歳月が経過してゆくように思われ でされた。 栗 谷 春 子

都会から微熱を抱いたまま帰り

保り」とはよい言葉選びをされた。 帰り」とはよい言葉選びをされた。

やっと父越えたは靴のサイズだけ

体格も立派になり、足も大きくなったが…。い人に対する軽い諷刺と受け取れる。確かに「今の若い者は」と言葉にする代りの、若

見詰め合う確かな今があるばかり

だと作品から感じられる。と思う。きっと幸福で素晴らしいご夫婦なのだなる時、その時が幸せを確かめ合う時なのだなる時、その時が幸せを確かめ合う時なのだだと作品から感じられる。

スカーフにこだわって見る嬉しい日

前の姿が想像出来る。



III 選

永 H 暁 風

相性が良くてなぜだか食い かなさは終着 駅を考えぬ

黒 散明 瞭 ってまで振り向 な線 が引けない かせるの かげろうよ んぼ

急がねば心変わりをするノラで喋り疲れて春の花壇は寝てしま

て春の花壇は寝てしまう

冷凍室で直立不動しています

たれれ

雨に打

たれ

帰路につく

塚市

地

図を拡げて恋人を探してる

のようと丹波 の豆をくれ ねえ椿

茶 花 0 小 路 かす かな予感抱 島 市

流

奈 美

子

歯切 っぱひらひら風に n 期へ ょ 徹夜の辞書といる灯り Va

葉

受

Ш

祈りが 退い違

のまま深追 めに守る二

浅

一度の いをしてし

雲市

原

章

峰

H

溜

10

妻のうしろから拝む

ぽんの顔が見えない成田発

n

0

はざまで揺 夫唱婦随のジョー

0)

にあ のせて飛ばし とビー 神通川に流したや なたと見てる蜃気楼 玉 0 た愛のメモ

E 玉

愛と憎 真冬日 春お

Ė

風

の温さに慣れてゆく

片えくぼ苦労承知でついて行く母の字に縛られ動き取れずいる

ゴロ寝と決める松の内

盃

を重ねて解けるわだかまり

歳児達者な口

は

もう女

临 市 野

瀬

昌

子.

広島 市 森

文

れる過去未来 L 任せて旅続く 娘 は嫁 ク玉 0 富山 た 芾 島 U

> か 3

顔色が変って負けたなと思うすらすらと言えは強つく余り風	幻を追うと亡母のふところに	厳しさの裏側にある なみだ	夢殿の辺りにあるターニングポイント	富田林市	猫もグルメで缶の銘柄読んでいる	口角の泡 正論が走り出す	春雲に乗り二つ三つ若返る	希望とは雪割る春の芽の力	春一番か風の強さに愛がある	名古屋市	玄関で神の教えを説く美人	結局は自慢がしたいだけのこと	暫くは繕うてみる母がいる	十言うて十の評価を受けられず	あちら様の顔で娘の里帰り	松山市	北風が挑戦状を突きつける	霜柱やさしい日差しに脆くなる	物忘れ互いに老いを見詰め合い	野良猫にいちべつされる裏通り	ある決意 女が髪を切りに行く	尼崎市
				池						藤						宮						山
										井						尾						本
				森						高						みの						す
				子						子						ŋ						2
寝正月だったか犬も肥満気味	告分いは見せ Q ての http://www.axxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx	酔った振りして誘惑にのるイヤリング	耳たぶを染めて告白聞いてる	尼崎市 長 浜 澄	一病とお手手つないで生きている	うしろから好きよと言ってみようかな	新調の服が出番を待ちあぐね	特に可も不可なく過している夫婦	カード一枚とっても軽い旅仕度	熊本県大川幸	神様を少し恨んだ喪の便り	降りつづきままごと遊びに似た夕餉	視力弱る夫と腕組むことに慣れ	ベッドから来た口答えうれしがり	子離れが下手で巣立ちに慌て出す	熊本市 字 野 照	刑務所に似た病院の自動ドア	小原庄助貧の哲学持っていた	夕やけ小やけ帰ってこない家出猫	船頭が多くて結論果でしない	眉をひく仏の顔とそっくりな	富山県高畠五

Ď ī	格原市 している はいからまだ出られない靴の音 とっときの笑い皺 は下余白鎧を脱いだ父になる はいからまだ出られない靴の音	大々発の普通電車が性に合う 次々発の普通電車が性に合う	授冬に我慢できない草の花 で母恋し味噌汁の味ままならず で母恋し味噌汁の味ままならず で母恋し味噌汁の味ままならず	本県	和歌山市
	大	大	木		辻
	峠	橋		切	22
	п]	政	13-13-13	10°.5.	翠
1	動	良	子	子	子
です	世く見た風邪に背中をたたかれる 寒い日につまらぬ事で腹が立つ 日の味すこしこわして見たくなる で景気に強い明治の姑がいる	要生のすき焼き 肉もあった筈 寄生のすき焼き 肉もあった筈 がなですまぬ借金してるうつ 西宮市	橋子一つ孤独な位置で印を押す 場焦がし妻に謝るのも楽し 低姿勢妻が反対通しきる	限帯が取れて視界がみな光り 知息が洩れるダイヤの桁違い おにぎりのおしゃれは海苔の帯を締め おにぎりのおしゃれは海苔の帯を締め	松山市
道の焼き芋ふわり故郷の味が余生極楽とんぼ飼ってますが余生極楽とんぼ飼ってます	西宮く見た風邪に背中をたたかれるい日につまらぬ事で腹が立つい日につまらぬ事で腹が立つの味すこしこわして見たくなる景気に強い明治の姑がいる	生のすき焼き 肉もあった筈 生のすき焼き 肉もあった筈 などく咳払い	と娘の内緒話に安堵する 枚方市 海生がし妻に謝るのも楽し 子一つ孤独な位置で印を押す	帯が取れて視界がみな光り にぎりのおしゃれは海苔の帯をは 見が洩れるダイヤの桁違い をが洩れるがある光が	Ш
道の焼き芋ふわり故郷の味が余生極楽とんぼ飼ってますが余生極楽とんぼ飼ってます	西宮市く見た風邪に背中をたたかれるい日につまらぬ事で腹が立つの味すこしこわして見たくなるの味すの強い明治の姑がいる	生のすき焼き 肉もあった筈 生のすき焼き 肉もあった筈 などく咳払い	と娘の内緒話に安堵する 生娘の内緒話に安堵する と娘の内緒話に安堵する を対し妻に謝るのも楽し	帯が取れて視界がみな光り にぎりのおしゃれは海苔の帯を締め にぎりのおしゃれは海苔の帯を締め	山市
道の焼き芋ふわり故郷の味が余生極楽とんぼ飼ってますが余生極楽とんぼ飼ってます	では、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	生のすき焼き 肉もあった筈 生のすき焼き 肉もあった筈 生のすき焼き 肉もあった筈	と娘の内緒話に安堵する 枚方市 海老子一つ孤独な位置で印を押す子一つ孤独な位置で印を押す	帯が取れて視界がみな光り にぎりのおしゃれは海苔の帯を締め にぎりのおしゃれは海苔の帯を締め	山市白
道の焼き芋ふわり故郷の味が余生極楽とんぼ飼ってますが余生極楽とんぼ飼ってます。	西宮市 山 本く見た風邪に背中をたたかれるい日につまらぬ事で腹が立つの味すこしこわして見たくなる景気に強い明治の姑がいる	金ですまぬ借金してるうつ 西宮市 牧 渕生のすき焼き 肉もあった筈	と娘の内緒話に安堵する 枚方市 海老子一つ孤独な位置で印を押す子一つ孤独な位置で印を押す	帯が取れて視界がみな光り にぎりのおしゃれは海苔の帯を締め 息が洩れるダイヤの桁違い	市 白 石

しあわせはラーメンの箸割る瞬間ひとつ鍋三日つついた妻の留守 質いた石ライバルが蹴っている 広辞苑積んで孤独な自尊心 島根県 小	される	まの他人がうちのじゃじゃ馬よく馴らしまの他人がうちのじゃじゃ馬よく馴らしまいがード下	八十の忍耐 餅をうまく焼く八十の忍耐 餅をうまく焼く	東様のすぐに崩れるにぎり飯 敷様のすぐに崩れるにぎり飯 をがった帽子の先のつくしんぼ のでに崩れるにぎり飯 のではがれるにぎり飯 のではれるにぎり飯
材	k	石	谷	本 岡
延	E	あす	U	道哲
子	-	なろ	ろ 子	子 子
ばあちゃんはやさしすぎるという叱言さよならをしてから風が凪いでゆく説教は半分残り花持たす。は路に立ち捨てられなかったのは母性	t 止 な る 」 月 春	信仰に縋れど心夜叉のまま 三体月仰ぐ峠の古代びと 三体男仰ぐ峠の古代びと 熊野路に神隠し聞く杉木立	和歌山市 野筆の芯削りすぎてる野心 が重な耳が度々だまされる の芯削りすぎでる野心	天を仰ぐ外人墓地に雪が降る 寒つばき雪の重さに耐えている 寒かがき煙にふせる芋さがし ながりが冷めてくる
榎	į	堀	岩	杉 平
原	(畑	本	Щ Л
原公		畑靖	本 美 智	山 用 幸

試験場みんな賢い顔に見え寒村にだって真っ赤な陽が昇る	線を引くから空気かたく	よく切れる男で敵もうんといる	今治市 渡 辺 南 奉	犬ふて寝ここの主人は外出中	猫に名をつけて呼んだら来なくなり	うまい物健康だからなおうまい	ステキな詩流れて来たらコマーシャル	福岡市 井 崎 ミサ子	春浅し娘は花の坂を越え	生きのびる丈に忙しい老眼鏡	春満開孫合格の祝い膳	発奮をしたのに甘い電話来る	酒田市 永 澤 裕 子	幸福な靴を迎えている玄関	強住む川を昔に返さねば	私の意見を包み持ち歩く	暗闇にやっと螢を見つけたよ	米子市 足 立 由美子	影の薄い美人になりたがるおんな	言い負けて良かった月が笑ってる	現実と夢の狭間へ青い鳥	慢心も妬みも知らぬ丸い鼻	八尾市 秦 正 子
眠そうな目ばかり見てる日記帳鼻欠けたお地蔵さんに早春譜	まざまな人それぞれに街	胃の薬飲みつつ飢餓の国おもう	熊本県 高 野 宵 草	四捨五入しても解けない夫婦の輪	愛憎のはざまで揺れる騙し舟	注がれた愛が未完の絵の中に	厭だとは言えぬ鋭い目に出会う	岡山市 中 鳴 千恵子	運勢欄見て出発を明日にする	聞き流すことにも馴れて老いを生き	長生きで孫がいい夢見せてくれ	立板に水証言が掘る墓穴	佐賀市 古川 かずのり	毛筆でさらり自慢の便り来る	捻挫した足へも一つ物落とし	自由にして差し上げたいな雅子さん	親しくて無いとは言えず二万円	和歌山市田中みね	驚いてあと嬉しさがひしひしと(一月号巻頭を載いて)	貰われて行く日と知らず仔犬じゃれ	沢山の鳥とんできたお正月	床の中一句が夢路を辿らせる	枚方市 森 本 節 子

当 代 出雲市 岸 性 当 代 出雲市 岸 代 出雲市 岸 代 出雲市 岸 代 と	7 7 7 1	デジタルが夜毎私を監視する	惰性かも知れぬ余生へ点を打つ	鍋がいいとおせちあっさり袖にされ	こだわってゴマメ数の子豆なます	羽曳野市 芦	たまご酒胸のしこりが解けはじめ	ボケ防止の本を夫婦で読むコタツ	七草つむ母の匂いをかぐように	まぼろしのお酒息子のお年玉	松山市 丹	頂点に立つと五億ははした金	追って来た孫に近道教えられ	初春に鶏のとさかが燃えている	軽がると重い荷物の里帰り	尼崎市 中	鯛焼きの温もり乗せてバス発車	灯を消した車を覗く夜半の月	赤紙がきた日の風は忘れない	掛時計外すと亡父の釘に会う	尼崎市 吉	行く末は悠々自適の笛を吹く	木枯しが吹いて焼き芋旨くなる	愛情に包まれ一歩ずつ進む	一年の計も立てずに寝正月	和歌山市 玉
三郎 出雲市 岸 株						田					下					澤					永					置
代代 出雲市 岸 性 代代 出雲市 岸 性 代代 出雲市 岸 単						絢										向					伊=					当
世界の場合のでは、 中のでは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、						子					子					西										代
	1 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	輩が司人となり名刺く	望の眼鏡に叶ったプリンセ	らない子にある温み思いや	十路すぎ心機一転カルチャー	川県田	い目の嫁でいいから連れてこ	る里へ行けばみんなの喉自	笛を吹いて小鳥の森へ行	下りのハガキに肩が凝りだし	県土	が迫	れぬ子沢	父の着たラクダのシャツが捨て切れ	師の軽いお世辞に自惚れ	取県山	談と軽く流して気にかか	会うたび白いものが増	の月だけ通帳開けてみ	もしどろもどろの	本市 北	が達者になったら海を見に行	分粥になったとよろこぶ母の	典から拾う手持ちにない言	味一つ増やし質状の数もふ	雲市
																					_					*
																江					進					任子

1	田の申も身のふりかたを考える	減反のたんぼへ米を売りにくる	プリンセス不況ムードを吹っとばし	尼崎市 湊 修 水	紅梅が冬の陽をのせ笑いかけ	手作りの小鉢に匂う母の味	トランプを切る手華麗な夢を盛る	静岡市 宇佐美 寿 美	誘われてドキッと胸打つ嬉しい日	手も足も動いて朝の般若経	春一番陽気に転ぶジュース缶	静岡市 永 倉 柳 華	お前には負けたと遺影に褒められる	マンションの子とお手玉をしてひと日	シャボン玉幸せ抱いて消えました	兵庫県 森 脇 和 子	良い知らせ待つ電話機を拭きながら	座ってる夫に頼む事多し	思わざる夫に肩貸す残り旅	大阪市 勢理客 トミ子	駄菓子屋は昔話が大好きで	森を出るそのときぼくは詩人なり	青春をとりもどしてる寮歌祭	富田林市 山 原 昭 水
1 2 2 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	すこし自由こなったか母が旅に出る	婦唱夫随ギャグの夫婦で仲が良い	計算の上で同居を決めてくる	鳥取県 武	はりあげる早朝寒行鉦の音	ダイアナ妃帽子の陰に愁いの眼	夕焼ける三井の晩鐘遠く聞く	西宮市 菊	おすし屋の親父うどんをすすってる	左遷地に慣れて吹雪に一人酒	裏話知ってる壁を塗り替える	河内長野市 大	紋付袴晴着をポチに吠えられる	さりげない結城に出会う男下駄	雪つりに耐えて人恋う五葉松	高槻市 芦	ふるさとに愉しいエール風見鶏	観覧車淋しい風に孤立する	受皿をたしかめておくあすの風	貝塚市 池	孫とする指切りばかりふえていく	一人では行けぬ誘いを待っている	母と娘の人形並ぶちがい棚	芦屋市 黒
				田				池				西				田				田				田
				照				1				文				静				寿				能
				女				H				次				江				美子				子
				0.00								-				G-14-2537				27				5.50

他人ごと返事のピントずれているお正月スタートに居る気持ちですお正月スタートに居る気持ちでするくびった蜂一匹に慌てだし和歌山県 吉 田壁みでまか 利等 のか 医者に いる	九心の乾く音がするための東京である。これで着地失敗に不慣れで着地失敗に不慣れで着地失敗	東京都 山 口娘に持たす包みにそっと知恵の輪もまだ親の出番もらえる幸せよ 島根県 武 島	らりくらり誠意が両手すり抜ける 日にこだわる父の足の音 も声も炭もはぜてる久しぶり 鳥取市 上	秋雨は淋し何故だか人恋し 東大阪市 指 宿
武治	知 華 子	新 よ 子 え	宣	千枝子
交際が上手なわりに出世せず 変際が上手なわりに出世せず 寝屋川市 北 寝屋川市 北	緊 山均あ	・ 一	すぐ本音出すから人が寄ってくるままごとのような膳です老い二人眼覚ましのラジオ聞いてる冬の床門満の二字には無理のない歩幅円満の二字には無理のない歩幅	チンすればいいだけにして留守にする・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
岡	林	谷谷		増
波		昭彩	505	純
留				

立て板の水には乗らぬことにする一合でこと足り凡夫凡婦たり骨壺に入るくらいの嘘にする	妻の友余計な知恵を置いてゆく	には見せぬ顔もつパ	一本の藁を見捨てぬ波がある	島育ち潮の流れに逆らわず目の位置を変えると心見えてくる	今治市 渡	カトレアと一日こもる風邪抱いてまかせてとまかせられない人が言う	何思案するかとトーストはじき出る	今治市 越	休肝日 食事があっけなく終る	自転車の孫追う先に夕日落つ	大州市 横	雨風に義理が履かせる高い下駄紅白歌合戦慈姑の皮を取ってます	初釜に足袋の白さや年新た	寝屋川市 井
	田		村		邊			智			田			上
	芳		親		伊			青			放			
	郎		路		津志			煮			人			すみれ
最消美	L													
大限の我慢を呑んだ喉仏と大限の我慢を呑んだ喉仏のが困る	たり顔のこけしにいつも嗤われる	えくぼやっぱり男悩ませるつからか妻に飼い馴らされてい	鍋釜を磨いて厨も事納め 京都市	肩書がとれたら酒がよくまわるどのメガネ掛けても政界黒い色	香川県	冬木立 一期一会を大切にお金では時どきいじめに逢っている	気を抜くと横から石が飛んで来る	米子市	結び目が緩むと顔を出す打算覗いても分からぬカルテじっと見る	条件が良すぎて少し怖くなる	和歌山県	垣根作ると遠ざかるおつきあい金の要る話すんなりきまらない	心だけリッチに持とう誕生日	静岡市
我慢を呑んだ喉仏口が軽くて手に余る	たり顔のこけしにいつも嗤われ	ぼやっぱり男悩ませるらか妻に飼い馴らされてい	釜を磨いて厨も事納め 京都	がとれたら酒がよくまわくガネ掛けても政界黒い	香川	一期一会を大切には時どきいじめに逢ってい	くと横から石が飛ん	米子市 木	び目が緩むと顔を出す打算いても分からぬカルテじっ	が良すぎて少し怖	歌山	根作ると遠ざかるおつきあの要る話すんなりきまらな	心だけリッチに持とう誕生日	岡
我慢を呑んだ喉仏口が軽くて手に余る	たり顔のこけしにいつも嗤われる	ぼやっぱり男悩ませるらか妻に飼い馴らされてい	釜を磨いて厨も事納め 京都市	がとれたら酒がよくまわくガネ掛けても政界黒い	香川県	一期一会を大切には時どきいじめに逢ってい	くと横から石が飛ん	市	び目が緩むと顔を出す打算いても分からぬカルテじっ	が良すぎて少し怖	歌山県	根作ると遠ざかるおつきあの要る話すんなりきまらな	心だけリッチに持とう誕生日	尚市
我慢を呑んだ喉仏口が軽くて手に余る	たり顔のこけしにいつも嗤われる	ぼやっぱり男悩ませるらか妻に飼い馴らされてい	金を磨いて厨も事納め 京都市 小	がとれたら酒がよくまわくガネ掛けても政界黒い	香川県山	一期一会を大切には時どきいじめに逢ってい	くと横から石が飛ん	市木	び目が緩むと顔を出す打算いても分からぬカルテじっ	が良すぎて少し怖	歌山県藤	根作ると遠ざかるおつきあの要る話すんなりきまらな	心だけリッチに持とう誕生日	岡市 小

ライバルと肩をよせ合う冬の陣 襟足にほのかに匂い出す不倫	車の強さ欲しいな胡蝶ラン 関 市 桜 井	コが不況よそ目によく流行るして生きるこの世に疲れ果てつ家風をかえるできた嫁	種が儲け儲けを持って行く 人にもなって母さん儲けさせ	さわやかなニュース皇太子妃決まる 当る気がしそう福引底を選る	真直ぐな気分でおれるよい日和何気なく置いて捜すに大わらわ嬉しそうな顔で一座を笑わせる	岡山県 江 口
	 次	み さ 江	喜 久 江	ひでの	静 子	有一朗
干すコップ重なり何時か夜を徹す御年始に満艦飾の娘達	恵給があっておのれは桜かな 恵給があっておのれは桜かな	ない証 瞳が澄んでない証 瞳が澄んで	知恵の輪が誰にも解けずほっとする やの蠅話したいのか動かないせめて松茸入りの佃煮購うてきた	 黄	七草も過ぎてストレス動き出す 祖 田 悦 子 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	羽曳野市 徳 山 みつこ

孫が来て我が家も嬉しい初笑い言い過ぎた言葉重たくなる荷物どれど小餅が旨いふくれ面	刑務所にとかげの尻尾蠢いて「お若い」は「お歳ですよ」の裏がえし遺影だけ紅顔のまま半世紀	遺言を書く程はない預金帳 明日立つ旅へ楽しい夢を見る	鍋囲む会話なくても家族だな 八つ手の葉数えたくなる心持ち お駄賃がないと動かぬ子に育ち	原風機ハテナの顔で冬を越し 重要な書類OL軽く持つ どこまでを線引き神も迷い出す	公園のベンチに増えた日なたぼこ ポスターに浮気している旅心	岐阜市 渡
	田	山	野	渕	崎	辺
		舞	不	光	菜	杏
	と し 子	鳥影		子	月	村
おんな三人積もる話がまだやまぬうぬぼれの列からときどき抜けるのも真剣な顔でカンナもノミも研ぎ	過去という重い鎖にしばられる 警官と話していると皆んな見る	選挙ボス恩赦復権またあばれと別分の夢がふくらむ年始め	ボクタイを締めて決った顔になりボール・ボール・ボール・ボール・ボール・ボール・ボール・ボール・ボール・ボール・	台縁奇縁その後ろには鬼も居る を果たし別離の宴を張る が焦れる北の島	気にかかる質状今年も二つ三つ 気にかかる質状今年も二つ三つ この旅で子離れしようと胸に決め	
€.	倉	遠	増	中	八	小
	垣	Щ	田	村	木	林
	恵	夏	-	三	芳	紀美子
	美	生	乗	良	水	子

咳をして咳こだまするワンルーム幸せが欲しくて星の砂拾う		路地裏の菊を訪ねてくれた人	縄のれんくぐっただけで愚痴が消え	にらめっこよそうよ指をからめよう	相生市 中	レントゲンあなたのこころを写します	俯いて火鉢に火照る厚化粧	火が灯り出るに出られぬ露天風呂	弘前市 花	ていさいは悪いが気楽なかっぽう着	喫茶店やっぱり二人で来るところ	若水をいただき心も若がえり	島根県 菅	茶昆に付す冷たい人の脚絆巻く	冬中をたっぷり使う名湯薬	重病人が見舞金額問うている	姫路市 福	つむじ風俺をキリキリ舞いさせる	私もあなたも大気汚している	冗談に触った人の手の温み	米子市 鹿
	行				塚				松				田				島				島
	稲				礎				朱				かつ				姫				松
	子				石				圃				子				女				子
保健婦がやせた分だけほめてくれ目標を持って居るからがんばれる	鳥取県 権 代	ワンテンポ遅れて笑う老い夫婦	気まぐれに曲った路地は行きづまり	旅先で知った人から質状くる	鳥取県 山 本	会えば出る年の話は七がけに	桧風呂やっぱり疲れがとれました	南国のプールサイドでクリスマス	川西市 田 中	朝風呂に据え膳並ぶ雪の宿	遊ぶ子に終点のない縄電車	子離れにまだ悟れない愚痴がでる	東大阪市 安 永	ダンディが屠蘇を祝って黄泉へ立ち(松永すすむさ	若やいでイチゴ大福食べてます	注連飾り年始に来たか雀たち	奈良市 米 田	孫が来る一足速い宅急便	夢の夢もしかしたらと宝くじ	見栄はらぬ妻の手許に電算機	寝屋川市 後 藤
														4							
	康				正				喜				暁	むさんを想う)			芳				黎之

思い切り声を高めて亡妻を呼ぶ	洗濯に精出すパパと共稼ぎ	独り居の窓から這入る隙間風	唐津市	凧の糸しっかり持ってる人が居る	切れ過ぎるナイフは持たぬ方がいい	黒豆と今年も妻は知恵くらべ	唐津市	クラス会幹事した人もう居ない	舞い込んだ賀状に名前書いてなし	人声も物音もないお元日	唐津市	知らぬ間に近くの他人と助け合い	給食を待つ老人に笑顔あり	夫病みて師走の風ももの淋し	唐津市	風向きをゆっくり待った倦怠期	野地蔵に冬の寒さを聞く子猫	弱点は見せたくはない爪を研ぐ	兵庫県	結論に水を注すから凍らせる	医者に聞き病い三つも隠してる	凍らせた言葉温ため諭す母	兵庫県
			入				福				Щ				江				北				玉
			江				島				П				Щ				JIĮ				田
			喜力				紀				2				青				とみ				Ξ
			久亭				_				さ子				琴				子				重
数字なら読める大正琴習う	冬木立縫うて通園バスの赤	八十の暇な電話の大晦日	吹田市	当り年亡母の色紙の筆の冴え	退院の夫を励ます除夜の鐘	快気内祝一件落着十二月	大阪市	血圧を不安がらせて風が鳴る	生きる世の別れ重ねて冬の雨(友人の群に)	離農者のビルが次々富士を消す	静岡市	買ってきて行くあてもない履かぬ靴	カレンダーあと一枚にあるドラマ	師走月財布の口は開けたまま	静岡市	ミニスカート春の風切る足さばき	冬物を叩くチラシが春を呼び	来年もまた会いましょうお正月	鳥取県	子沢山面舵一杯父の舟	連休を先ず確かめるカレンダー	皇太子拾った恋を育てられ	安来市
			岩				清		0		増				柳				中				木
			鼻				水				田				沢				西				村
			啓				絹				扶				た				智由				まさ子
			\equiv				子				美				ま				恵子				Z.

伝説を残して消えた平家村ネクタイをはずしてお茶漬すすり込む	た日本の夜明け	ビーエの豆用ナビス音を打ち込む屠蘇の酔機嫌になると雨降る意地悪し	し時計朝の神経いら立たせ	春雨がみぞれに変り友の訃報礼服を着ると息子も見違える	松江市	目配せが出来る斜めの席を取るトップの子住所不明のクラス会	トップの名より参謀が気にかかる	めば手数はかからない	建て増しへ暮れの大工がまた休むゆるやかに実って老いの万歩計	高松市 #	長男の嫁が決って急に老け検札に肩をたたかれ目を覚まし	南市
			森		佐野		金	À		都		坂
	田		Ш		木		7			狂		根
	信		抜		2		<i>‡</i>			四		流
	義		智		之		· t	ž		郎		水
蛇口出た水は一途で帰らない寺の門何時でも来いと開けてある	チャンネルを任されたまま高	, イ 覗	消える	雪吊りが少し過保護の松の庭菊枯れる金賞の札そのままに		フットボールのような月です走りた境目がはっきりしてる地平線	顔色で判断してるインターン	田作のロマン育てた坂	開発という名のいじの野鳥こ軍鶏の疵古武士の姿見る思い		合格に愁眉開き春うらら酔う程につい人柄が見え隠	
たある	鳥取県伊	ず愛い目	松江市浦		高	す走りたい	沙 胶计		こ い も	寝屋川市 瀧 本	ħ	東大阪市 大 平
で ある	鳥駅	愛い	松江市			走 り た	ナ 阪 オ		C Vi	屋川市	7L	大阪市

都会風吹かす女は厚化粧 と言うてる趣味多彩 取りを考えあぐんでいる炬燵 羽曳野市 山	特ダネが売き振やかな引島 日本一素晴らしい母親に持つ 老人に学ぶ生き抜くたくましさ 鳥取県 へ		気ですかと十二月気ですかと十二月	止まる私にだってある都合 寝屋川市	計今日の健康占って 鳥止まってくれる腕をだす 鳥取県	、半日	島根県
	今		坂	籠	植		=
本	本		上	島	谷		代
たけ	早		高	恵	前	1	朝
L	苗		栄	子	江		子
を を を を を を を を を を を を を を	思っきり立てと笑える真になるカウンターでも嫌われるねちっこさをせ我慢へっぴり腰で灸据える	寒月に肩を寄せ合う老い二人松江市	人柄が良過ぎ出世に乗りおくれ 手打そばふる里のこと母のこと	安らぎは空気のような人が居て安らぎは空気のような人が居て	自然界冬には冬の花が咲く 自然界冬には冬の花が咲く	裸婦像にひけをとらない風呂上がり	広島市
山	村	安	田	植	西	浜	中
П	上	食	中	田	村	本	村
博	久	友	孝	-	和	治	
章	美子	子	子	京	成	幸	要

喝釆の中で返事を忘れてる物差しではかれぬ命を長らえて		いじめにも昔は助ける友もいた	元旦の舟に日の丸あげて釣る	福岡県 本 田 忠 男	老いの耳内緒話はよく聞こえ	雨期の部屋干し物の下潜りぬけ	尼崎市 向 井 末貞一	煮〆持ち行けば娘の家パーティ中	ふっくらと暮れをしずかに白い菊	八尾市 向 井 しづ子	笛吹いて会議踊らす黒い影	赤提灯師走の雨は淋しそう	池田市 木 村 一 笛	口裏を合わした夫も泣いている	辞め辞めと言われ辞めない人格者	鳥取県 美 浦 美代子	月並な祝辞ばかりの披露宴	子に遠慮ばかりして居る親である	海南市 谷 口 義 男	半分は負ける力士が土俵入り	若返る三年連記の初日記	寝屋川市 土 井 英 明
冬の虹小雨の中にあざやかに手を叩くだけの新年会に行き	岡山県 富 坂 志	添書きが心にしみる年賀状	亡夫の念願孫二人共医師になり	岡山県 牧 野 秀	階段を昇る途中で用わすれ	招かざる客が突然来て困る	鳥取県 小 西 五	三十分ぐらいは平気娘の電話	奥の間で考えてから顔を出す	今治市 和 田	柚子風呂を惜しみつ落す終いの湯	絵馬掛けて賭ける受験の灯が明い	大阪市 川 原 章	磨いたらもっと光るかも知れぬ	胸の内覗ける眼鏡が欲しいです	香川県辻上よ	ほがらかで貧乏神は遠慮する	胃カメラが朝食抜きで来いと言う	佐賀市 江 口 万	気の弱い男が愚痴る縄のれん	もつ鍋が若返らせた客の層	枚方市 濱 田 良
	心重			香			十鈴			宏			个			よしみ			万亀子			知

5、牛汽作工	匈長って寺急電車通過する 納得をせぬ唇がとがってる	藤井寺市川端たかし	クタイを締めると父は生き	頑固一徹明るい夫でぼけられぬ	鳥取県 橋 本 孝 由	平凡な生活へ爪も丸く切り	妻の愚痴しみたまな板削り取る	姫路市 丸 尾 はる子	ラジオ講座テキストだけは買ってある	年の瀬に正月映画を見る余裕	東京都 小 寺 九	元日の新聞広告だけ読ませ	口げんかしながら二人元気です	島根県松本聖子	目覚ましは野鳥の声と言う住処	突き当たりななめ横町とややこしい	青森県荒田つる	道草が好きで山茶花冬がきた	親子さえ専門畑のゆずれない	東大阪市 松 山 隆
1	切指 太裝の音に望えられ出不精の旅先ず服が気にかかり	岡山県 杉 本 伊久栄	をつまらせないよう努	初春の音のせて誘いの文がくる	兵庫県 西 井 つや子	今年こそ妻と旅行をしてみせる	もう切るといいつつ妻の長電話	和歌山県 村 中 悦 男	ローマの休日がある私のアルバム	それぞれの思いのカップル旅の空	広島市 元 林 光 子	運は天 私福耳信じます	夫より二枚年賀が多くくる	米子市 小 塩 智加恵	大筋は合意し細部が折り合わず	婚家より里を気にするお嫁さん	(前月分) 鳥取市 田 賀 のりゆき	一病で予定狂わす旅心	寒の入り鳩丸々と屋根の上	静岡市 中 西 雅

小さいくせ大きな方をとりたがり		売れ残る宅地に冬の草茂る	口減らし娘は江戸へ出て行った	鳥取市 谷	三つ指に迎えられてのお茶の味	ほめ殺し誰の作とも書いてない	大阪市 乾	歳甲斐もないと笑われ好奇心	好奇心 他人は若いとお世辞言う	静岡市 青	病む身にはどうも弱気が付いて来る	年金で夢を描いて暮らす老い	静岡市 浅	見える罪見えない罪も持って生き	羨まし長寿でぽっくり死んだ人	静岡市 三	新装の目玉へ欲が無駄を買う	雨の音静かに聞いて昼寝する	静岡市 片	表札が増えて過疎にも明るい灯	聖職に命炎えつき車椅子	岡山県 国
	Ш			П						柳			子			浦			平			米
	希久代			侑里			哲静			金吾			まつゑ			つね			静代			きくゑ
嫁いでも気になるらしい父に母輪の中に調子はずれが一人いる	和歌山県	柚子の香で肩までつかり冬至の湯	初雪をふみしめ急ぐ朝の道	島根県	十八番とび出しました旅の宿	共稼ぎ夕餉の仕度鍋が待つ	兵庫県	忘れ物宅急便が追いかける	みんな留守風呂飛び出して電話きく	泉佐野市	良妻より少し抜けてる方がよい	紙風船 屋内犬も喜ばぬ	橿原市	家事育児仕事に疲れた妻を揉む	どん底に落ちて聞こえる人の声	鳥取市	発想を転換すれば知恵がでる	病窓の視界に入る鳩の群	明石市	僕はただ好きなあの娘を見てるだけ	新しい長ぐつ雨の日にはかぬ	鳥取市
	上			児			中			大			西			田			小			岩
																1313						
	岡			玉			野			工			本			賀の			Щ			田
	岡正			玉幸			野 とよ子			工静			本保			貝のりゆ			川酔			田浩

妃内定止めどを知らぬ好奇心工作もセット空箱など要らぬ		散歩道百円拾い募金箱	茶屋町も私が顔だと阪急ビル	吹田市 吉 川	ひた走る箱根の山に陰と陽	想い出は母が元気な日々にあり	十和田市 小笠原	賽銭の音たしかめて願いごと	何用か忘れ妻の名呼んでいる	静岡市 大 村	鏡開き即席ぜんざいは百円の味	新妻もしきたり習う初雑煮	岸和田市 藪 野	からっぽの首が並んだ湯原の湯	辻褄のあわぬ話ですねる妻	吹田市 西 岡	新聞を伏せて事無き小市民	お情けの拍手もらって次の番	泉南市問屋	どの太鼓叩いて踊ろか永田町	故里恋し独りで唐津へ来たこけし	唐津市 山 門
	さや						敏			正			けい						啓一			幸
	か			涉			夫			雄			子			豊			郎			夫
立札と並んだゴミの山となり村を呼ぶ僕の青空竹トンボ	岡山田	ぼたん雪の友達みんなかるく舞う	ふるさとをはしゃぎ回ってヨモギ踏	島根県	建つまでを高い家賃の仮住居	石切さん守る巨木の神を知り	大阪士	荷造りへ遙かな孫を偲びつつ	盗人が休養したいと警察へ	島根県	せめてもの救い川柳趣味がある	大阪市史揃えて棚にそのまんま	箕面+	三ヶ日お節食べ過ぎ消化剤	下の句の五字が決まらず夜が白む	唐津士	海外できれいな日本語聞かされた	単身赴任妻は逢いには行かぬもの	姫路十	雨三日雪のかわりと諦める	商魂のいん石饅頭売れに売れ	島根原
	県		踏む	県			市			県			市			市			市			県
	福			岩			平			福			木			木			服			今
	原			田			井			間			村			内			部			Ш
	辰			Ξ			露路			博			天			ミチコ			_			三津
	江			和			芳			利			弘			\supset			典			江

津 市 Ш F 剛

に歩き出 したる可愛い 孫

呂好きのチビさん入れて湯にあた

近

藤

秋

星

ふる里 里 B だん 0 Ш だん は 13 つ来て見ても笑み 知 った人が 減 取 市

故

ジュニアの部

虫

80

息吐きつつおばさん朝の掃

除

香川県 小 Ŧi. 中 な 2

がね大きく見えてもその まま 子.

第 16 取

2 ところ \$ 3 月 28 国民宿舍 日 水 日 明 4 莊 前 9 時 開

JR山陰線松崎駅から徒歩3分

題 各題2句

絵 ・よみがえる・ 船 ·響く 別に特別 開 < 席題 笑顔 1 考える 題

3 月 10 出席者20 日必着で左記 0 円 投句 者1 0 0 0 四

投 会

句

689 -25 鳥取県東伯郡赤碕 16 回鳥取県川柳大会実行委員会 町花見 里 か 0 み方

₹

尼 緑之助句碑建立20周年記念川柳大会

ところ ٢ 日

> 碕 H

荘

午

前

11

開

話

H

ス

JR出雲市駅からバ

米題と選 全題 事 前 句

H

各2句

朗

展

太茂津

由 多香 選選

惜しむ

道

紅

建

代仕 親 男

3 00円 欠席投句拝 発表誌 辞 記念品 懇

前投句は各題別紙で2句連記、 住

所·氏

◎事

題

を明記 出雲市松寄下町284 して4月20日までに左記 ずも川柳会大会委員会宛 吉岡きみえ方

₹ 693

月22日(土 0)午後6 0 0 0 時 円 から (宿 泊費とも 眺 瀾荘

前夜祭

◎希望者は3月 31 日 青

主 ずも川 柳

選

水 煙 抄

一二月号から

神夏磯 典

子

引っ越しの肩に追い風

向い風

こまがよく出ている ドラマを向い風に。風で表現された人生の一 けてくる。そして新しい土地に馴染むまでの 近所との確執、友のやさしい目などが追いか 何年か暮した我が家を離れねばならぬ。ご П 新 子.

許そうと思えば迷い深くなる

完全に許すまでの嫉妬心、猜疑心。迷いは 政 良

着る人が着れば木綿も洒落て見え

愛の深さです。

木綿の似合う人こそ本当のお洒落です。 遠山夏

お互いに冬が越せたね蕗の薹

持つ身が、いのちのありがたさをしみじみ語 蕗のとうは早春そのもの。老いの身、 病い 代

> りかける。ほのぼのと哀歓ただよう句 手の届くところの幸は逃すまい

か捉えられないもの。人生を達観された作者 の目が逃さない 幸せって案外すぐそばにあるのに、なかな 今西静子

冬を深く吸い込んでいる旅枕

とにされたことでしょう。 れた枕。きっと誰もがすっきりとして宿をあ ストレス。失恋の悲しみなど吸い込んでく

難聴で皆の話の外にいる

ことと思う。 う時もあるが、やはり話の外にいるのは辛い いやな話題がいっぱい。難聴の方がいいと思 バブル崩壊、イラク空爆、エイズ、巷には 森本節子

脱線をするといきいきする個性

たん目立ってくる。川柳の目が動きをよく捉 輪の中で静かだった人が、本筋をそれたと 宮尾 みのり

赤とんぼわたしを抜こうとはしない

き続ける私に赤とんぼは励ますように従いて 少し老いてきて歩幅も狭くなった。だが歩

> 来てくれる。赤とんぼにやすらぎを覚える。 あしたへと今をのがしてばかりいる

付かれたからこそこの句が生れたのであろう。 者。だが少し立ち止って自分を確かめたらチ ャンスがあったかも知れない。そのことに気 今日よりは明日と、ひたむきに走られる作 十二月八日か夫ポツリと言っている

生き延びて十二月八日しあわせに

牧 渕 富喜子

戦争は人生と切り離して考えることは出来な い。どちらの句も幸せに感謝しておられる。 なぎ倒すほどに風切る才女の目 大正、昭和初期生れの者にとって、太平洋

若い世代の男性方、強くなって頂きたい。 最後に冬の風景を頂きました。

冬支度 老いの甲羅はやや厚め

散り終えてひとり遊びがうまくなる 高 子

味方など無いよと冷たい冬の月

子

木枯しに小枝がポキリ折れて行く 丸尾はる子

文

チャルメラの音で始まる僕のお祭 紅の色に惑うて来たようだ

白

峰

借りに来る嘘へ断る方もうそ

寝屋川市

ちな財布も浮かれだす

海亀

の孵化をはげます波の音

枚方市

海 老池

洋

縁起物け

河

内天

笑

選

不況風たっぷり株で吸いました

風吹いて儲け話が動き出す # イレンを耳で測って夜の火事

鳥取県 原

驚いた振りしてくれる友がいる

先走りすぎて崖からおちました 西宮市

教会の鐘が背中を通りすぎ

譲り合いして 奪われたバスの席 自惚れが少しあるから生きられる

暗号を忘れ読めない古日記

損得を言うては妻の名がすたる

広島市

村

要

頭下げることが私の護身術

一滴も血を流さずに馘を斬る

三ヶ日おこたがあって酒がある

西宮市

14

13 わる

一つ返せぬままの柩かな

海南市 二

宅

保

州

歯車

0

一つにもある自尊心

爆弾をひとつ抱えて初詣

後戻りし

こそうで後ろ振り向か

ぬ

富田林市

H

泰

子.

哲学者飲み屋のつけが難 法善寺ちょっと拝んで飲み直し

こい

40 黑石市

花

ルパー

最初からインクの出ないボー ほど信 頼される痩せ薬 ルペ

高

居

直

梅

0 蕾

に触れて来る

藤井寺市

H

美代子

一ってからの今昔物語

大阪市

自己主張秘めて流れに添っている

度

吉兆の笹から春が動き出す

倉敷市 辺 灸

六

ミス日本富士は初日の紅をさし

和歌山市 古久保 和 子

とみお

H みつ子

木 久

静岡市

7

>

に乗るエリートを射る冷た

省

紅をさしチョッピリ女に近づこか 和歌山市 H い目 中 2

ta

本

ち

4

以心伝心相手も好かん思ては る

程 大役にすんなり挑む肝っ玉 々と言う一線をどこへ引く 高知県 JII

菊

野

転 勤へニックネームが先に着き 米子市

IF.

子

小耳から刺は心臓まで届

カートを狙って春が駆けて来る 宝塚市 Ш よし津

ス

残る画布だんだん派手に塗って行く 人ピアノ広いホールで低く鳴る 高 橋 千万子

愛情と別に男は浮気する ごみ箱は世帯ゆずった事を知る

池 しげ お

仁王さんちょっと座って見たかろう 美しい月を駐在持てあまし 子

凡妻にテレビドラマが知恵をつけ の機転に心動き出す 和歌山県 井 春

木戸御免自由自在に猫は生き けるといんだきり 寝屋川市 江 光

子

いうち席設

冬銀河 多喜二が逝きて六十年	豊市 田 中 正 坊	娘も母もずいぶんがまんためている	和歌山市森口恵子	人形の動かぬ瞳何を恋う	有田市 生 馬 芙美子	自分史を他人になって読み返す	静岡市沢田きん	数字には弱く銭勘定は速い	宝塚市 永 田 暁 風	夜叉の面女は一つ持っている	鳥取市 谷 口 侑 里	花時計戻らぬ恋と知っている	岡山県 矢 内 寿恵子	老父の掌もきれいになった三ヶ日	岡山県 小 林 妻 子	警棒が退屈そうにゆれている	米子市 田 中 亜 弥	桐の木を植える伝えもダムの底	唐津市 仁 部 四 郎	二流校勧める勇気いる教師	熊本市 遠 山 夏 生	百点を貰い柩の中にいる	鳥取県 新 家 完 司	ドラフトで野党も補強しませんか	兵庫県 遠 山 可 住	神様に笑われそうな悩み事	藤井寺市川端たかし
暇と金出来て五体が病んで来る	静岡市 青 柳 金 吾	女がいる	鳥取県 土 橋 螢		鳥取県土橋はるお	焼とりを三本食って哲学者	鳥取県 西 浦 小 鹿	スマートに赤着こなして老いを撥ね	鳥取県 石 谷 美恵子	人形と施設慰問の腹話術	唐津市 筒 井 朴 竜	飽食に麦飯の味恋しがる	岐阜市 渡 辺 杏 村	苦労した分だけ笑い多くなる	和歌山県 福 田 和 子	二度と来ぬ刻を今更歎いても	和歌山市 桜 井 千 秀	拝まれる方へだんだん近くなる	青森市 工 藤 甲 吉	表札の裏で暮らしが吐息する	出雲市 板 垣 夢 酔	心得て子らのみやげは酒ばかり	広島県 田 村 新 造	湯豆腐に不況話はよしましょう	十和田市 斉 藤	医学書に無い方法を娘に教え	和泉市中川楓
匿名で偽善押し売り寒の風	尼崎市 春 城 武庫坊	i Ž	福岡県本田忠男	入	吹田市 栗 谷 春 子	. <	鳥取市美田旋風	らす	羽曳野市 吉 川 寿 美		唐津市 田 口 虹 汀	, ,	唐津市 山 門 夕 ミ		鳥取市 田賀 のりゆき	柔らかく胸に包んでおく噂	岡山県 江 口 有一朗	٤	町田市竹内紫錆		兵庫県中野とよ子	める	兵庫県 酒 井 靖 子		唐津市 浜 本 治 幸		唐津市 浜 本 義 美

そんな日はシャワーで今日を消すことに 森の香に惹かれて危険犯しそう 呆けそうだメリハリぐっと利かせよう 水に浮く一円玉にある人気 つき合いの永かりポチの安楽死 近すぎて愛の深さに気付かない 経済的理由で愛は破局する ペチャパイもずん胴もいるレオタード まっすぐに見られてウソが出てこない 萠えて出 深刻なことをときどき忘れている バス旅行ガイド少々うるさいぞ ふるさとの匂い嗅ぎたし象の鼻 線を引いておもちゃの兵になる ぬ種もひとつの業だろう 和歌山市 羽曳野市 岡山県 大阪市 弘前市 砂川市 岡山県 大阪市 堀 福 原 田 原 畑 田 Ŀ 田 城 絢 高 辰 さと美 政 善 靖 頂留子 寿美子 悦 年 英 子 文 江 子 保 子 良 子 子 代 靴下のつくろい民話めいて来る 初詣 年賀状書 小六の銃剣術も還暦に 枯蟷螂が枯蟷螂を喰っている どの笛で踊るかきめている打算 真心をもらい心が毬になる すり切れた草鞋のようなギャグに飽き 百歳でピントの合った返事する 涙をお拭き助ける王子きっと来る 餓鬼大将好きなあの子へ雪つぶて これ以上の幸せ探すのは止そう お出掛けの仕上げ鏡に笑いかけ 静けさを引き裂いて行く暴走車 善人ばかりとは言えぬ V た日に来る喪のハガキ 鹿児島県 大阪市 今治市 大阪市 阪南市 大阪市 香川県 鳥取界 鳥取県 姬路市 大 Ш 野 福 本 西 崎 本 原 内 Ш マツ 留 舞鳥影 蕗 白光子 美代子 兼治郎 佳 ひかり 孝 Œ 葉 かおり 吉 雲 児 I 由 子 香 文 熟年のプライド本が増えただけ 哲学をひとつ持とうと本を読む 足腰に老いが迫って来る怖さ 根性のない孫祖父が喝を入れ プルトニウム反対のマイクにも電気 愛犬も嫁に一目おいている ドリルがさけび病院は解体進む ともだちの手からヒントを受けている 吉備団子みんな貰って黙ってる 立ち入ったことまで聞いて年の暮れ チャンネルはどこもお妃プロフィール 喜びも中くらいなり不戦勝 年の早さ白髪が増えました 1 マ代いらぬ程よいくせ毛です 東大阪市 寝屋川市 鳥取県 有田市 鳥取県 守口市 枚方市 米子市 米子市 大阪市

城

君

子

Ш

内

芳

江

井

かなめ

辺

南

奉

次

男

かすみ

隆

尾

黄

紅

島

志

洋

-

う

子

子

金

5

子

鹿

島

孫の守り段々重く腰に来る 手の内が透けて一人去り二人去り 気分転換ボリューム上げて聞く演歌 呱々の声過疎でラッパの音になる 食卓の上に疲れた顔を置く 私をまだ責めている無言劇 無視されていないだけでもいいと言う わからないファッションお尻まる出しで 横町に浪速が残る法善寺 冬枯れの庭慰める寒椿 銚子三本もう盃に浮く本音 法の下平等口先ばかりです 健康はやっぱり自分で守るもの 手紙なら本当の事が書けそうだ 和歌山県 和歌山市 和歌山市 岸和田市 岸和田市 香川県 池田市 問 Ш 本 屋 輪 地 放 圭 啓二郎 精 倫 剛 Œ 奈美子 英 狸 通 吉太郎 郎 子 彦 子 任 代 好 司 村 平熱になって恋から遠ざかる 百八つ背負いきれなくなった欲 貧乏をしていてヒマが多過ぎる 街並みが崩れめし屋もレストラン 三世代住んでこわすに一時間 目ん球が動きすぎます竹下さん 好きなこと言うてストレスほおり投げ 豆撒きで積もる不運よ逃げてくれ 総ざんげ自責の念に除夜の鐘 初詣スリも稼いだ手を合わせ 自信作出来て猫にも見せている 息とめて返事を聞いたプロポーズ \Box フロントに盛り場マップ置いてある 説かれたむかしの話好きな妻 羽曳野市 川西市 鳥取市 H Ш 塚 みつこ 恭 秋 は 遊 笛 拓 ただし īE. マサエ 星 な 水 昌 枝 子 水 雄 峰 生 生 信号を走れば硬貨はしゃぐなり 世話になる辞書を枕にしています 二次会は手柄話の花ざかり 親切そうに根ほり葉ほり聞いただけ ダイエット心ばっかりやせてゆく やわらちゃん一本勝ちのVサイン お世辞言う証券マンに寒気する 怒るより飲もうと余命表が言う 喧騒な児らから逃げてパチンコ屋 嫁と娘どちらに頼も朝のお茶 いなければいぬで気になる老夫婦 時々は正論も吐くへそ曲がり お雑煮は穴子のすまし亡母の味 オーロラの夢見るつもり寝酒飲み 寝屋川市 米子市 米子市 倉吉市 Ŀ

W

3

旭

恒

美津留

雄

17

柳右子

黎之助

宵

草

延

子

和

枝

まつゑ

哲

7

姬

女

ふき子

柳五郎

女性コーナーととととととととととととと

かけ

広げたまでの春着

かな

堀

在在在在在在在在在在在在在在在在在在在 何号のむ 11 出 子 選

富田 林市 藤 泰子

の卵そろそろ孵るころ

何も彼もすててわたしに抱かれてる 喪主席 冬もよし小さい部屋に寄り合うて へ思い直して紅をひく

母心恋心いつも譲らない

どの船も傷負うて来る船だまり 少しずつ白を汚してゆく月日

雨漏りがする私の 負けて勝 つには少し眠っ 脳細胞 た方が 12

ゆずり 凝り性を知ってる影が足を引く 顔色が良いと安心してく 葉が芽吹く 確かな後継者 n

数之明 やさしい 飾りもう一 、皆したたかに毬をつく 花活けて 本はこころにも 銀行妥協せず

傘をたたんで足りない言葉整える 一菜がうまく漬かって人恋し 'n の怖さを知ら だこ見れ ば見るほどい ぬ鳩が寄る とお

> rti 本 銭

弘前市 并寺市 肥後 石垣 和香子 美代子 花子

和歌山 大阪市 大阪市 木本 政岡 渡部さと美 本間満津子 日枝子 朱夏

熊本市 歌山 大阪市 西山 北川 永田 弘子

の前でまたもあわてて口ごもる

岡山

矢内

一寿恵子

寝屋川市 金山 中

> 贅沢 雑念の 避けられぬなら肩 暖かくなるまで石 掘り下げて出ら まだ少し振 なことばばかりの旅 中でどんどは燃え終る れば小 n の力を抜いておく 槌が響きそう を握 ぬ穴にしてし りし 帰 80

数の子を貰いごまめをあげ 谷底 トンネルを抜けて夫婦の広い から蟻が這い上ろうとする 3

書き出 子の帽子探しに谷 点滴に似た水音に眠れ 大きめの傘でわたしを守り しに躓くさむ へ降りてみ い見舞 ない 状

X

<

軽い 日を重 帰るはずない足音をずっと待 みかんひとつ味を褒めたりくさしたり 退屈をねぎらわれては不本意な 靴頼れぬもの ね婚家に馴染む の無いままに 娘が 淋 ち

池田

一寿美子

数珠 ボタン雪私の恋のように 番 を繰る今幸せな掌で 父 の平手 がなつ 降る か L Vi

変りばえせぬおせちでも喜ばれ 火も水も潜った母 0) 太い

WD

大阪市 白根 後藤 Ш 高 西 T 方子 楓 楽

和歌山 島根県 米子市 守口市 林 結城 野坂 小西 瑞枝 君子 なみ

和歌山 和歌山市 吹田 歌山 栗谷 田中 寺沢 森 桜井 松本 みど里 春子 干秀 h 茜

兵庫県 尼崎 春城 鹿島 倉垣 年代

名古屋 川崎 藤井 U か 高子

和歌山 枚方市 岡山 Ш Ш 本 節 玉

見送っ 堪えるも 潮満つるようにお寺の鐘が鳴る 原色を足さね エステティ の蓄えてい ックで磨き足りない がば春 もあ かい る百 0 返 通 りし ケ日 分眠

和

泉市

宮市

西 中

10

柏

市

田

2 木

子育てに一喜一憂した日記 木パ 茶柱 しに 1 を信 じて服も赤にする 便りを託す遠き人 へ花壇の水を忘れてた

和

歌山

田

中

輝子

H

生島

两芙美子

小 前田

西五十鈴

まだ少し仕残しがある診察券

和歌山

福本 小野 大阪

市

克枝

尾

西 П JII

弥 b

鳥取

輪が微笑む亡母

0

文机

夕焼 春の雨 賑やかな通り抜けたら一人ボ 草書体せめて余生を楽しまん ままごとのお客になって花むしろ けがきれい 葉牡丹の 今日のこと忘れよう 類ゆるみだす +

ピツがいねむりをして困ります 大阪 辻川 H 町 園 Ш 田 坂

> ウ 良 ン先が遠い il を閉じて グアイランド ゲンに有るだけ持っ 埋 出りよが 話を弾ま め たい 舌 りを 今 が 6 ++ H 5 3 7 0 聞 n 翔んでゆ 初 日記 てやる て困ります

好き勝手させて貰って威張ってる それぞれの想いで春を待つつらさ 肥えた人笑い すこしだけ遠慮し い袋を持 しながら 0 ている 孫 叱

餅をとる役を今年は姑がくれ 四季のない花仏さんあきれてる いて運命線はピンク色

水をためらう雪が

河内長野 和 和 羽曳野市 歌山市 歌山市 大阪市 堺 क्त 稲本 植村 近藤 吉川 古久保和子 内芝登志代 寿美 石

寝屋川市 大阪市 足立由 津守 籠島 一賀子 美子

日曜

は予定があると言ってお

<

落し蓋位 豪邸に住

の姑 上んで

に甘んじる 出入りがままなら

ように心

梅がほころ

3:

H

八分時計の捻子も心得る

生きざまを包んだ顔が美し

和歌山 松江 松江 兵庫県 佐野 光井 北川 安食 浦辺 和 さえきやえ 田 川とみ子 三美寿子 木みえ 静 玲子

松山 市 羽津 竹田 松井かなめ さや JII 公乃

香川県

辻川よしみ

鳥取県 有田 尾 क्तं IE. 77

着き場の風景が見えてくる。帰港する船はみな傷を負っている 表現ながら心の奥深くを詠われた。 そのうち心の白を少しずつ穢しながら人は生きてゆく。 ……と涙を誘われる。三句目―汚れては濯ぎ汚れては濯ぎして 大切なものを心に温めている。その日が近づいてくる期待。 iのこのときめきを多く言うことはない。二旬目―夫婦愛の窮(切なものを心に温めている。その日が近づいてくる期待。作ゴシックの一旬目―人が卵を抱くわけではないけれどそれ程 ではないかとさえ思う。 素晴らし ゴシックの一句目―人が卵を抱くわけではないけれどそれ 言えないという。 しい男の世界が生々しく詠まれている。 13 母としての心と、人を恋う心とはどちらが強 若い人の句には覇気がある。 何 度も読んでいるうちに、 四句目 一この句に漁港の船 五句目 夫婦とは 平易な

〒 大阪· 市 生 野区勝山 南 1 18 T 10 小 出 子

投句先

ひみこさろん

近ごろ、感激したこと

あの日の感激

JII

崎

ひかり

えって来ました。 うちに、またまたあの日の感激が胸によみが とです。一枚一枚感謝しながら拝見している 諸先生諸先輩方から頂いた賀状を拝見したこ 今年最初の感激、それは元旦に配達された

三人は、徳島のホテルでの懇親夕食会に招か 準備完了。大会前日、明人氏、放任氏、私の ら少しずつ形となって、なんとか大会当日に 中の中から会員一丸となっての準備。 の大会、何から手をつけていいのか、五里霧 からの慌ただしい毎日。会が発足して初めて 社との合同句会が、開催される事が決定して 昨年の九月十一日、 川柳塔社とおっぱこ吟 どうや

> す。再会だけでなく、初対面の感激をも含め げて、出来る限り大会に参加しようと思いま

出会いの感激。今年は再会の感激を目標に掲 事閉会する事が出来ました。川柳を通じての

て、諸先生諸先輩、私を大会に是非誘って下

ない反面、光栄でまたまた感激でした。 聞き、緊張で食事ものどに通らなかったのが 来ました。私のような者が話題になり申し訳 肩の力が抜けて本来の自分を取り戻す事が出 崎ひかりは男性か?女性かと一。そのお話を 私の事がバスの車中で話題になったとか、川 絆に、強く結ばれているからだと思いました。 な感じがしましたのも、川柳と言う一本の 見している諸先生諸先輩にお逢いした時の感 れ出かけました。柳誌ではいつもお名前を拝 激は、筆舌に表わす事が出来ないくらいでし 大会も多数のご出席を得、大盛会の内、 初対面なのに、以前から知り合いのよう

花山温泉で

細 JII 稚 代

ると、神経痛、リューマチから内臓疾患など つい行きそびれておりました。 分なので「遠くの神様ありがたい」とやらで 山温泉があります。私の家から歩いて約二十 あらゆる病気に霊験あらたかなと言われる花 麓に、冷泉を沸かして適温、高温、冷泉の三 つの浴槽へ五分位ずつ交互に、三回繰返し入 和歌山駅から車で十分ぐらい、花山古墳

とれ、痛みもなくなり、這っていた階段もト するとこれこの通り、手足の硬直もすっかり 毎日、ここの玄関に車をつけてくれました。 で一年通ったらと言って、雨の日も風の日も をえないと宣告され、痛みと薬の副作用に苦 お医者様から、ゆくゆくは車椅子生活はやむ 年目です。二、三年前からリューマチに罹り 話です。「ここへ通い出して今日は満願の一 のことを聞き主人に話すと、騙されたつもり しんでいました。ある時、人からここのお湯 後半位のお年の方から、お湯の中で聞いたお 昨年秋、誘われて友達三人と行き、五十代

無

発しました。
発しました。どこの誰かもわからぬままにてくれました。どこの誰かもわからぬままにてくれました。どこの誰かもわからぬままにてくれました。どこの誰かもわからぬままにてくれました。どこの誰かもで

た。 た。沈む夕陽を浴び「夕焼空が真赤っか」 トンビがくるりと輪を描いた、ホーイのホイ」 と口ずさみながら、軽い足どりで家路へ急ぎ と口ずさみながら、軽い足どりで家路へ急ぎ といる。

形

石 倉 芙佐子

皇太子様の御婚約がお決まりになった今日、皇太子様の御婚約がお決まりになった今日、だ冬の底、一晩に銀世界になるのも屢のことが冬の底、一晩に銀世界になるのも屢のことが冬の底、一晩に銀世界になるのも屢のことが冬の底、一晩に銀世界になるのも屢のことが多少し青空が覗き、螢のようにきらきらと風花が舞う。長い山陰の冬籠りに、テレビは欠花が舞う。長い山陰の冬籠りに、テレビは欠れが舞う。長い山陰の冬籠りに、テレビは欠れが舞う。長い山陰の冬籠りに、からにして堪能出来る。少女の頃を戦の中でがらにして堪能出来る。少女の頃を戦の中でがらにして堪能出来る。少女の頃を戦の中でがらにして堪能出来る。少女の頃を戦の中で

過した私には、平和も文化も有難く感じま

統められ、先生の手によって桃割れになり島 ・大変付けになるほどの感動を受けました。人 く釘付けになるほどの感動を受けました。人 とするなく がないな美しさ、明治文学のヒロ がながな美しさ、明治文学のヒロ がながな美しさ、明治文学のヒロ がながな美しさ、明治文学のヒロ がながない。人

下積みの苦難時代も通った、との言葉が信いれる。紫の紋づくし麻の葉霰模様に銀の帯、たれる。紫の紋づくし麻の葉霰模様に銀の帯、それら総では絹の縮緬地だと仰る。絹は人形をれら総では絹の縮緬地だと仰る。絹は人形をれら総では絹の縮緬地だと仰る。

水の鳥火の鳥も飼い生きてゆく 芙佐子度あの人形達に逢いたいと思う私です。

る。人形が創れなくなった時、ジュサブロー

をかけずに、死に甲斐のある生き方をと、思

自分らしく、与えられた生命を大切に、迷惑

い耽けるうちに、ふと久しぶりに、渡辺和子

形が自分を生かし、自分は人形のために生き抜かれた華が開いたのかもしれません。「人

の死である」と結ばれた。かつて服装を学び

じられないほどの作品。きっとそこから磨き

心に花を

高杉千歩

平成五年成人の日、ひみこさろんの原稿を平成五年成人の日、ひみこさろんの原稿を書き始めた。新成人の割合は総人口の一・六書き始めた。新成人の割合は総人口の一・六書き始めた。新成人の割合は総人口の一・六書を始めた。新成人の割合は総人口の一・六十人と発表されている。早や、六十路もなかばをすぎ、今日までの早や、六十路もなかばをすぎ、今日までの早や、六十路もなかばをすぎ、今日までの中にも、生活の充実感がありました。当十歳を経て、子供も一家を構え、親を見が、そして現在、老いに向って心静かに、送り、そして現在、老いに向って心静かに、

買われていく花、ひっそりと路傍で一生を終佐子 大きい花、早咲き、遅咲き、店頭に飾られ、「人間は一人ひとり花である。小さい花、

うけました花の人生の一部を紹介します。 著「心」を読み返し、改めて共感し、感銘を

であることが生き方なのだ。 がせられない花を一番美しく咲かせることにある。 であることが生き方なのだ。』(概略)な、花であることが生き方なのだ。』(概略)な、花であることが生き方なのだ。』(概略)な、花であることが生き方なのだ。」(概略)な、花であることが生き方なのだ。」(概略)な、花であることが生き方なのだ。」(概略)な、花であることが生き方なのだ。

爽やかな風に

小 谷 美ッチ

私が昨年、移籍入会した川柳会(会員数二十数名)は類例の少ない特徴を有しています。その一は午前九時開会ということ、その二は小学生も参加しているということです。爽やかな時間帯に爽やかな老若男女が、清々しく「おはよう」を重ね合わせるとき、会場いっぱいに陽光が漲るのです。ぱいに陽光が漲るのです。ぱいに陽光が漲るのです。ぱいに陽光が漲るのです。なんがわで父さんいつも昼寝する 久美子えんがわで父さんいつも昼寝する 久美子

公 弘 (会長)

東北ぶらり旅

松 尾 柳右子

事、生活の違いを実感。作並のゆずしの宿り十一日大阪空港を期待と不安の混じる中飛り十一日大阪空港を期待と不安の混じる中飛り十一日大阪空港を期待と不安の混じる中飛りでも今年は雪が少なく助かっているとの

わたしには大人に勝てる夢がある

「一の坊」は小さな露天風呂がいくつもあり

翌朝雪がちらちら舞っている中、白鳥や鴨のユーモラスな事。次に最上川の猊鼻渓で舟のユーモラスな事。次に最上川の猊鼻渓で舟頭さんの渋い唄声で、年代を偲ばせる壮大な頭さんの渋い唄声で、年代を偲ばせる壮大な頭さんの渋い唄声で、年代を偲ばせる壮大な頭さんの渋い唄声で、年代を偲ばせる壮大な頭さんの渋い唄声で、年代を偲ばせる壮大な頭さんの渋い唄声で、年代を偲ばせる壮大な明道には一度よい山歩きとなり、皇太子様のお腹には丁度よい山歩きとなり、皇太子様のお腹には丁度よい山歩きとなり、皇太子様のお腹には丁度よい山歩きとなり、皇太子様のお腹には丁度よい山歩きとなり、皇太子様のお腹には丁度よいは歩きとなり、皇太子様の温を見いる中で、白鳥や鴨のユーモースを表している中で、白鳥や鴨のエースを表している。

鳴呼温泉ではお湯が硫黄の成分で、お肌が鳴呼温泉ではお湯が硫黄の成分で、おいて、ちょっぴり若返ったような気分ですべすべ、ちょっぴり若返ったような気分でも有様です。

何と言っても旅の醍醐味は、家庭から解放です。

みちのくの芭蕉も乗った雪見舟 柳右

羽搏く鳥

青戸田鶴

子育でも終り少しずつゆとりが出来で、好きな本をやっと買える時がきました。時々本きなんの棚を覗いたり、新刊の書評を読んで屋さんの棚を覗いたり、新刊の書評を読んでは文したり、私なりの好みの本を読むようになりました。昔のように貪り読むような元気はなくなりましたが、女流作家の本が好きではなくなりましたが、女流作家の本が好きではなくなりましたが、女流作家の本が好きでなりましたが、女流作家の本が出るたびに読みあさってしまいます。

その中で画家の三岸節子さんをモデルにした「羽搏く鳥」をよんだ感激を忘れることはありません。三岸さんの絵は以前からグラビアなどで、色彩がほとばしり情感が溢れる花の絵などに、心うたれていましたが、フランスに渡られたと何かで知ったときから、いつとはなしに遠ざかっていた私でした。一時帰国されて東京・大阪で個展を開かれていると聞き、見に行きたいと何度も思いながら果たせず、どんな境地に変られどんな構図のどんな彩かと、思いを馳せていたのですが、そのな彩かと、思いを馳せていたのですが、その頃にこの本に出逢ったのです。厚い本を一気

に読んでしまいました。そしてその感動に長けられた情熱、子育ての中の戦中戦後の苦難けられた情熱、子育ての中の戦中戦後の苦難の道、又若い画家とのかかわりあいなど、興の道、又若い画家とのかかわりあいなど、興いは尽きませんでした。芝木さんのフィクションも多いとは思いますが「一日描かないと一日技が落ちる」と烈しく絵に打ちこんだ一人の女性の生き方に、夢中になってしまいました。

著者の芝木好子さんも良い作品を数々残され、幽明境を異にされてしまわれました。私れ、幽明境を異にされてしまわれました。私でした。

藤白坂で

藤

村

宏

子

万葉集でよく知られている「磐代の浜松が万葉集でよく知られている「磐代の浜松が地社(和歌山県海南市)から旧熊野街道をた神社(和歌山県海南市)から旧熊野街道をたかる。

先日、この熊野古道をたどるチャンスに恵幸、江戸時代には蟻の熊野詣というほど庶民幸、江戸時代には蟻の熊野詣というほど庶民が通ったという古道。一度は歩いてみたいとが通ったという古道。一度は歩いてみたいと

竹林の間をぬうごつごつした石の急坂は、竹林の間をぬうごつごつした石の急坂は、水鳥のさえずりが聞か落葉が敷きつめられ、小鳥のさえずりが聞かる葉が敷きつめられ、小鳥のさえずりが聞かる葉が敷きつめられ、小鳥のさえずりが聞か

下に広がる。
下に広がる。

一時間ほど登りつめた、行幸の一行も休息

が開けてまぶしい。遠く四国がうすく見え、

が開けてまぶしい。遠く四国がうすく見え、

昭和三十年頃までは海だったという湾内はいまや火力発電所や石油コンビナートに埋めたてられ、赤白の鉄塔がたち並び煙もみえる。近代産業の地と化した、黒牛潟・玉津島・若近代産業の地と化した、黒牛潟・玉津島・若った。開発の名のもとに景観が失われてゆまった。開発の名のもとに景観が失われてゆまった。開発の名のもとに景観が失われてゆまった。開発の名のもとに景観が失われてゆまった。

舟

笛

渡 杏 花 選

出稼ぎにテープで届く祭笛 ときどきは兄の形見の笛を吹 ライバルを抜いて口笛軽く吹く 弁慶に聞かせる笛を吹いている 笛吹くと演技過剰になる尻尾 口笛が女の芯に火をつける 草笛を吹くと広がる草千里 オカリナは春を迎えに峰走る 面の私は笛によく踊る

> しげお あづま

公

ようじ かり

課

男一匹素直に踊る妻の笛 愁いふくんでまだ鳴り止まぬ雪の笛 美しい笛の音だった雪だった 笛の音に狂女となりし薪能 木枯しの笛鳴り止まぬ耳の底 ホルンの音聴いて駈け寄る奈良の 笛吹きに帰る切符は日に二便 鹿 n 通 芳

つえ子 俊 武 玉 史 惠

口笛

子

うれしくて悲しくて吹いた口 晩年は笛を袂に持ち歩く がとどいたらしい春灯 地 笛

帆

還暦から笛は半音さげて吹く

土橋

もがり笛ひゅるる地を這う流人塚 古里創生笛も一役買ってでる 父の笛鳴りっ放しの冬の夜 吹く笛の正体見届けてから踊る

> 時々は音色の違う笛を吹く 汽笛一声故郷は遠い山の中 どの笛について舞おうか永田 草笛の主が見えない川の土手 笛の音で踊るピエロで切なかろ 横笛が聞えてきそう嵯峨野ゆく HI

チャルメラが都会の夜を深くする 埋蔵品の中に一管笛が出る 草笛の父に男の貌を見た 草笛が昔話を聞きたがり オカリナが遠い昔を呼び寄せる 笛吹きのうまい男に近よらぬ 笛の音の冴えに平静取り戻す 音痴でも夫の笛なら踊ります

鳩笛を吹く子の父が戻らない 咽び泣くようにも取れる虎落笛 百点を取っても止まぬママの笛 私にだけ聞える笛が呼んでいる 笛吹けば源氏絵巻きの血が騒ぎ 南 水

草笛が城趾の風をつれてくる 鎮魂の笛飄々と須磨の浦

善 章 忠

男

ピッピッピ違反許さぬ婦警の目

重

嫁がせた後の佗しさ雛の宵 松の内早やひなさまの澄ましおり 目が母に似た人形を手ばなさず 人形と寝て居た娘が二児の母 人形でないと怒っている社長

人形とベッドで遊ぶほどに癒え

朗

諷云児 希久子 雀踊子 降 文楽の人形が生きる指使い 母に似たこけしを買った旅みやげ まっすぐな人形の目から逃げられず 人形を飾るあの子に似てるから 春を待つ棚のこけしの思案顔 人形のような顔してきつい女 玉の輿にのる人形の無表情

雀 螢 午前二時オモチャの兵隊動き出す この顔のやさしさ目の無い和紙人形 雛人形町一杯に松屋町 類ずりをする人形の無表情 人形を並べたような乳児室 人形になれずに降りる縄電車

寿恵子 森高勝 村 子生栄

的

シマ子

形

年金で孫に買うてる雛人形 照 子 選

井 Ŀ

きんさん ぎんさんの人形にあやかろう 兼治郎 あやめ はるお 艷 友 雄 竜 峰

富喜子

杏

多賀子

美智子 寿恵子 よし津 ちかし

人形と仲好く鍵っ娘お留守番

あずき

鉄

しげお

敏

路

眼の鱗落とし人形神へ問

雄

淋しくて姉様人形折ってます

人形で泣かぬ明治の母でした マリオネットの糸がもつれた無言劇 もう親の人形でない反抗期 土へ還らず土より出土した埴輪 奥に居る人形自立考慮中

人形のように病母をそっと抱く 紙人形薄い情けを恨むまい

手垢染むリカちゃんの箱持って嫁く

よし津

恍惚の老母人形を離さない

人形はいじめっ子の名知っている

母折った雛だよ葱の匂いする

風

樹

華やかなお店を裏でみたバイト 華やかな過去覗かせた車椅子

ただし

人形を飾って部屋を温める

奥山美智子

指人形

民話の温さ語り継ぐ

華

IE.

か

肥後和香子選

人形が総理の椅子でくたびれる

人形を叱りつけてるママの真似

刷毛の眉で人形生きてくる

杜 英 可 柳五郎

的

華やかに飾って行った嫁き遅れ シャンデリア華やかすぎます独

明

人間になりたい人形の私語を聞

裏方の腕競い合う菊人形

見つめればもの言いたげな市松さん 特別な友達だった抱き人形 湯煙に里恋うこけし瞳が潤み お土産の人形の顔にも好ききらい

正忠 シマ子 寿 佳 隆 長島が巨人監督華やかだ 華やいでいても所詮はシャボン玉 着飾って智恵子が笑う水鏡 華やかな茸は食べぬ方が良い 華やかな場所に意外な人がいて 握手千回ラストシーンの薔薇のいろ チンコの人気や永遠に華やかに

希久子 云児 大安日駅が華やぐ酔っている 華やかに着飾ったとて同じ顔 華やかな舞台の袖で語る手話 老人会華やかな過去皆言わず 華やかなマラソンブームに古希も入り

吉太郎

雄

由

倫

出直していのちを炎やす華やかさ 華やかなネオンで起きる夜行性

華やかなドレスを脱いでラーメン屋 軍服が華やかな世はもう御免 華やかな幻想崩れ成田

華やかに血を凍らせてプリンセス

華やかな世界は画面で見ています

華やかなライトはたちのG

ようじ

りには 千加子 千恵子 敬 4 華やかにいつかなりたい靴の裏 華やかに酔うと私が消えてゆく 華やかにせめて桜と遊ぶ間は 華やかな裏で苦労の会計士 捨てられる身の華やかな包装紙 華やかに猫族が舞うドレスショ 華やかな嫁が家風を変えて行く 土曜日の夜は濃い目にひくルージュ 華やかに生きて長寿は欲でしょう 華やかに八百長祝辞読んでいる 華やかな賛辞味方と間違える 自分史にひといろ足りぬ華やかさ

よし津郎

啓 郎 しげお 帆

雀

善

杏

保州 御 敏 前

舞鳥影 あづま 雲

華やかな秘密ボタンが目撃者

華やかな美学桜のいさぎよし 華やかに着地決めこむ天下り 華やかな街に情けが薄くなる 華やかな人の手の指太かった 華やかな生涯だった鬼だった 華やかな造花が蝶のこと知らず 披露宴あほらしいほど華やかで 華やかに生きられそうなコマーシャル あやめ 清 俊 俊

芳

渡辺南 鉄

奉

たつみ あずき

83

が步数室

出

美 房

の「希望」の句を拝見しております。 時節柄、 新年の気持ちが未だ抜け切らぬ中で、 「新年の中の希望」「皇太子妃の 皆様

決定」「絵馬にかける入学の願い」の句が大

きく片寄って寄せられました。これも課題吟

願っております。 る「説明の句」「報告の句」で終らぬよう、 句にするようにしてほしいものです。いわゆ ら見るのではなく、あらゆる方向から捉えて そのような場合も、現象面のみを同一方向か の場合、止むを得ない現象でしょう。 人間の想いを表現するものであってほしいと 八間の喜怒哀楽を表現するもの、 人間の心、

百度石母の再起に望みかけ それでは添削句から発表します。 赤提灯希望の捨て場照らしてる 希望かけ病母の再起百度ふむ 美恵子

赤提灯しばらく希望預け飲む

九

いもの蔓たべても希望持っていた ソマリアに豊作あれと希望する

いもの蔓たべて希望のあった頃

みつこ

希求する世界の平和なぜ遠い

(プリンスの希望通した初春の空 希望持つ裏にちょっぴりある不安

春霞みビッグなニュースに妃が決まる 暁 子

御立派に希望通した皇太子 プロセスと縁を大事に皇太子

(日本中希望に沸いたプリンセス) 浩宮 希望の新春雅子さん

結婚へ親子で希望ふくらます 良い年だ娘結婚希望ふえ

偏差値が希望の門を狭くする 偏差値が門せまくする希望校

(家中の希望背負った子の受験 春へ向け大きな希望合格通知

(児のピアノ希望の星という我が家 児のピアノに一家の希望の演奏会 姬

父を越せ母を越えろと荷が重い 父を越せ母を越えろと名が重い

進路決定親の思惑先走る 薫

進学の希望親子で違い過ぎ

松 子

プリンスのハートに希望の虹光る

画幸 子

とし子

どこまでも若い希望をふくらます

(皇太子希望の人を射止められ 隆 雄

幸 夫

孝 曲

方 子

3 2

女

芳 郎

生

神様を考え込ます絵馬をあげ 望みかけ天神様に絵馬あげる

節

子

希望校通って絵馬は忘れられ 希望校叶えば絵馬の吹き曝し

隆

ランドセル親の希望が詰め込まれ あづま

ランドセル親の希望につぶれそう 孫二人亡夫が希望の医師となり

秀 香

頑張りが祖父の希望を叶えさせ 春 風

社長の座希望なくした二日酔い

希望したポストに遠い二日酔い **人脈に希望の職を頼む父** 重

四人目は男児を望むマタニティ 希望する職へ人脈掘り起こす 春 枝

四人目は男児に賭けたマタニティ)

書き初めに今年も希望大書する 書き初めに希望を書いた筆の先 松幸 子

肝移植生きる希望をくれた母 肝移植希望をくれた母微笑 杏

村

金 吾

究極の希望に置いた尊厳死 アンケート希望に丸の尊厳死

程々の希望で今年夢を見る 老いなりの希望ちょっぴり新春迎う

志華子

一日ずつ元気で暮す希望持

日々重ね元気で暮す希望持つ

S 2

忠

晴れ渡る阿蘇の五岳に湧く希望

曇晴れた阿蘇の五岳に湧く希望

男

in.		(新世紀希望を託す万歩計)		(百一歳夢も希望もある若さ)
宛先 〒83 藤井寺市道明	ひろ子	新世紀生きる希望の万歩計	ふる子	まだ希望捨てはしません果てるまで
題「姿勢」―3月15日統		(悉く望み叶ってから空し)		(心機一転希望ふくらむ初仕事)
◇	亚目	悉くのぞみを遂げて何故空し	君江	エンジン全開希望ふくらむ初仕事
終章はせめても雪で飾り		(鳶の子とわかっているが鷹になれ)		(闘病に負けぬ希望の初春が来る)
あそこまでならばと望む	黎之助	トンビの子タカになれよと胸の内	辰男	長く病む身にも希望の初日の出
希望から着弾点は遙かな		(風船に希望を詰めて初春となる)		(寝ていても望みは捨てぬ冬ごたつ)
私の句	よしえ	風船が彩とりどりの希望描く	敬	まだ捨てぬ望みと眠る冬ごたつ
書き初めの希望の文字が		(優勝の希望長嶋ジャイアンツ)		(生きている限りの希望持ちつづけ)
今日の無事謝して明日へ	ますみ	立ち直ってほしいと望むジャイヤンツ	志重	散る日まで小さい希望を持って見る
ポケットに銭はなくても		(年金の暮しに合わす希望持つ)		(晩酌の許可で希望の年が明け)
希望したように育たず倫	保夫	年金の暮しで希望大きすぎ	忠治	晩酌が許され希望の年が明け
まだ少し希望がもてるア		(成就せぬ希望もあってへこたれず)		(余生なお希望の毬を弾ませる)
不景気に希望をくれた雅	きぬ	希望には見放されても生きてます	義子	希望という毬追いかけて余生ゆく
考えを変えれば希望湧い		(どん底に生きても希望だけ捨てず)		(年毎に希望掲げて泡と消え)
趣味一つ大樹になれと育	涉	どん底で希望を捨てず今日がある	高栄	年毎の希望はいつも夢と消え
希望には遠いが不足ない		(余生なお若くありたい老いの坂)		(子供らに希望をくれた毛利さん)
希望まだ捨ててはいない	美寿子	余生尚若く老いたく希望する	はる子	子供らに大きな希望毛利さん
土俵こそ希望を果せ貴花		(ささやかな希望の種を播いておく)		(妻という月日に希望埋めてある)
大それた望みは持たぬ茄	延子	ささやかな希望の中で種を播く	幸枝	手のつかぬ月日希望が埋めてある
飛翔する年にさせたい子		(生きている限り尽きない希望湧く)		(大空へ羽ばたく鶴に託す夢)
志望校保証は出来ぬ絵馬	彩子	尽きぬ希望湧くから今日も生きられる	タミ	大空へ希望羽ばたく鶴の群
生きて行く希望捨てずに一		(塾通い親の希望につぶれそう)		(元旦の希望暮れには見失う)
着想・表現ともに立派な句	友熙	塾通い重く背負った父母の希望	幸雄	元旦の希望暮れには夢となり
(齢のこと忘れ希望に燃え		(来年に期待希望の根を分ける)		(卒寿まで元気に作句するつもり)

齢忘れ希望に燃えて生きてます がえて生き)

卒寿まで作句がしたい後七年

乗

来年を思う希望の根を分ける しづ子

茄子の花 ろが二人 六十路翔ぶ い紅をひく 大 大 の ま 華子 大 一郎

りたし む冬の天

明寺2丁目11-4 締切(5月号発表) 岡 美 房

平成 《五年

新春おめでとう会

1月15日・大成 閣

氏が息せき切ってかけつけて下さった。 が原因らしい。しんがりに岡山から寺尾俊平 かかった、流行にさとい人たちが多かったの を盛り上げた。昨年よりも人数が少ないのは 全国から同人・誌友八十六名が参加して会場 気が伝わってくるのではなかろうか。 とう会」は、随所の成人式会場から熱い雰囲 「乗り遅れてはならじ」とインフルエンザに 年のことだ か 川柳塔社 一新年 十おめで

力強い自己紹介があった。 武田帆雀氏は、はるばる鳥取からの出席で、 で導こう」との挨拶が心に響いた。新同人の かりにし、名実共にいい年になるよう、各自 っためでたい年にちなんで、 に開会される。西尾栞主幹の「皇太子妃の決 一部は河内天笑氏の司会で、午後一時過ぎ 、今年はいい事ば

宏子氏から品物が渡されるのを、 のプレゼントの交換である。 選を待つ間に、今年は趣向を変えた楽しみ 参加者全員が持参した五百円程度 世話役の西田柳 一同わくわ

> の絵、 が当ったのには、 して耳を傾ける。 ん(中一・竹原市)にぴったりのミニバッグ くと待つ。そこここでの歓声が一段落の いに、全員の手が上った。金粉入お茶、力作「素晴らしいものをもらった人は?」との問 続いての披講に、 二部に入り、遠来の波多野五楽庵氏の幹杯 室内ブーツなどで、中でも小島史子さ 大きな拍手が送られた。 しばらく背筋をシャンと

間が迫り、本日のとりはゲストの田中好啓氏年期入りの芸にお腹をかかえる。いよいよ時 凝りに凝った扮装の踊り、小林トメ子さんの しいただくとしよう。 そこは美事な「高砂や」に免じて、お目こぼ 人とも年齢的に少し問題点があるようだが、 でいるのは岩佐ダン吉氏と森田華子さん。一 の謡である。新郎新婦に選ばれ、すまし込ん たまた会場が沸いた。おなじみ寺井東雲氏の 正解者に文房具が贈られるという寸法で、ま グアイ」と素早く答えた、知性と教養のある しむ。例えば、売買、と書いてあれば「ウル 天笑氏用意の「国、都市名あてクイズ」を楽 の音頭で会食が始まる。かくし芸の準備の間 これにて予定時間終了。お腹も心も満ち足

11 幸

選

万歳三唱してお開きとなった。

(楓楽)

大空をバックに奴凧踊る 故郷の空の青まだ目の奥に

形太郎

風見鶏 空いっぱい広がる雲にあこがれる 青い空から笑い話が落ちてくる 哀しみを集めて空は鉛色 快晴の野麦峠をバスでゆく 星空に妻をいたわる語が浮かぶ 空を翔ぶ夢だがベッドから落ちる 凧揚げて子は大空の高さ知る 裸木のあっけらかんと空を指す 陽が沈み海は無限な空を抱く 夕映えの空から主婦の顔になる 大阪の空に物言いつけに来た 白いシーツうれしく青い空に舞う ハチローの詩にやすらぐ空がある お葬式の青空いい人だったから すこしずつ空を汚して生きている 風船で行く空の怖さを知らぬのか 空がありお日様がいる園児の絵 満天の星ふる里は裏切らぬ 紙ひこうきよ大志を抱け空がある 大空に翔びたくなって森を出る 仙人も空から覗くよい眺 娘住む空ばかり見る

青空とたのしい話しています 竹トンボ父に逢いたい空がある 星空と話し上手に生きてきた 空にかざす手に青春の血がたぎる 元旦という空があり明日を抱く 青空へもう酒樽を干さぬ街

中1史 松文 艷 好 吐 子 啓 子

はるお

司

中1史

子

み凡透て朱東 子子太る夏雲 射月芳 敏 子

86

光

華好鬼

兎小屋ながら窓には青い空 竹とんぼ飛ぶ空がある塾がある まだ本が漁れる広い空の下 空はまだ壊れていない気もするが 物干しの空を味方に付けている 全力を尽くして空は夕焼ける 日本の空には敵は現れぬ ニワトリもわたしも空に憧れる 立たされてひとり見ていた青い空 つまずいた頃には空がよく見えた

> 智子 射月芳

女

しげお

司

何千何万の夜を重ねて青い空 灰色の空 北国冬の真ん中に 新しい絵具を買って空を描く マイホームパパの低空飛行です

疑問符のある筈がない

ピノキオの童話に青い空がある

森笛

子

もぐらだって夜には空を見たくなる 五楽庵

コップの中の喧嘩を笑う青い空

杯ほしくなった鉛色の空

鶴

丸

御長男御経営のホテル「ジパング日本海」行 さる嬉しさの饒舌にひたる私があった。 住む田舎柳人の私を、 五周年大会で御来弘いただいたお礼を申し上 玄関には、栞先生の奥様がお出迎え下さり、 きのバスに乗った。約一時間でホテル到着 に私の歓迎会を開催して下さるという栞先生 で下さった智子さん、楓楽さんら皆様御一緒 をいただいている私は、本当に昨日まで弘前 に居た私と同じ私なのであろうか。きっと、 の小島蘭幸さんがお持ちになった銘酒 「幻」をいただいているせいなのだろう。 午後四時半、川柳塔あおもり五周年におい こんなに大事にして下 竹原

るのだろうか。路郎先生・生々庵先生・栞先

このあたた

柳塔のあたたかさって、どこから来てい

波多野

五楽庵

たたた

き

な川柳塔 か

Ш

かみを培われて来たのだろう。 生と脈々と息づいてきた伝統が、

私が上阪すると言うので、薫風さんが私の

希久子

ふるさとの成人式に出る空よ

星へ来て上りすぎたと思う鳥 ライバルの鶏冠の赤が目にしみる 酉年で焼きとりを見て考える 宮殿へ祝電を打つ伊勢の鶏 老夫婦に青い鳥追う露地がある とんび悠々わたしも羽根がほしくなる 青い鳥の卵を一個抱いている 翔ぶ鳥ヘロマンの行方目で追うて おしどりの飽きぬ飽かせぬ五十年 一番鶏鳴いて父の貨車うごく 春城 武庫坊 松文 五楽庵 太茂津 いわる きみえ

吐

来

北国の白鳥想う春こたつ 鶏鳴を子とともに聞く初詣 母さんの背なで覚えた鳩ポッポ 領海のことは知らない渡り鳥 パスポートいらない鳥の北帰行 しんがりは母鳥だろう北帰行 空翔る夢を鶏持っている 伐採に助けてくれと鳥が鳴く 醜さを逃れる羽根のない駝鳥 コウノトリ笑い袋を開けにくる

二十一世紀に飛ばせる鳩を飼っている 電線の小鳥うれしい話する 美食家も銀座のカラスには負ける めん鳥のかしまし我が家平和です

般若経覚えた鳩が寺に住む

じめ皆様が笑顔で握りしめて下さる。弘前に

日があるのだろうか。

人々、いつの日かこの御恩情にお返しできる

げる。岳人さんの司会で楽しく進行した歓迎

会。そしてあたたかい人情あふれる川柳塔の

大事にして下さる皆様のお心づかいに違いな

ただけたのも、そのあたたかい気配りと和を に御連絡、御一緒におめでとう会に御出席い 尊敬申し上げる田中好啓さん、寺尾俊平さん

い。大成閣に入っていった私の手を栞先生は

希久子 美代子

87

風見鶏 風と契ってから無口 鴛鴦の春をみんなで待っている おみくじを運ぶ小鳥を見てあかず おしどりのいる風景はあたたかし 酉年へとさかの色が冴えている ハングライダー鳥のこころがよくわかる 日本の地図を知っている 多賀子 艷

島の鶏いっせいに鳴く上天気 どの画布の鳥にも翔べる羽根を描く また一つ森がなくなる渡り鳥 茶番劇許さぬ軍鶏が爪を研ぐ 鳥たちの話聞こえて来る平和 次の世紀を見ているか

胸に棲む火の鳥すぐに飛ぶ構え 美しい空だいっしょに翔び立とう とちの実を鳥と分けあい村おこし 羽ばたいて鳥は宇宙をあこがれる ひよこたち大きくなれば食べられる

凡 子

司

ジャンプしてみてもニワトリほど飛べず 妻に似てインコの声も春の彩 鶴もわたしも上昇気流待っている

シマ子

白鳥のロシア訛りがいたましい

五楽庵

火の鳥になって今夜も逢いに行く 明珍の火箸が聴こえ鳥啼かず 明けガラス生ゴミの日を告げにくる

好

みつ子

七年をかけてつかんだ青い鳥

楓楽)

りの人もあって賑やかなうちに終宴した。 柳も上手、カラオケも美声という羨ましい限 くマイクを握り、カラオケ大会が始まる。川 五楽庵氏歓迎会

岳 人

になった。車中で緊急席題「宴会」と発表さ 乗れない四名はやむなくタクシーということ まれ、おめでとう会会場の大成閣発も三十分 って行った。 れ、たちまち車内は作句への格闘の世界へ入 遅れの発車。バスは補助席も通路も満員で、 海」差し向けのマイクロバスも渋滞に巻き込 日』の御堂筋は車の洪水で、「ジパング日本 も表情もどことなくかすんでいる。 が成人の 小雨は心を淋しくさせるのか、人々の装い

川柳に耽溺することができるのだろう。 める雰囲気を持っている。だから私たちは、 れる。新春にふさわしい楽しい名句が続出す して波多野五楽庵氏選「宴会」の披講が行わ 遠来の客、寺尾俊平氏の発声で乾杯してコン 広間へ案内される。女将のあいさつに続いて 口に点火、寄せ鍋が煮えるまでの時間を利用 宴も盛り上がったところで、誰からともな 「ジパング日本海」に到着、すぐ四階の大 川柳は不思議なほど明るく、親しさを深

> で寝つかれたことだろう。私は冷たい風に酔 出雲の女性軍は波の音が聞えぬ日本海の座敷 いをさましながら帰路に着いた。

然温泉に入る者、麻雀を始める者、

宿泊する

宴会へきっとあなたも来るだろう 宴会に裏も表もないわたし 宴会が終ってからの白い闇 宴会でうけているのは妻の方 宴会の十八番です高鼾 ツインビル宴会場はまたはるか 宴会の主役になった三枚目 宴会のあとの車が拾えない 宴会を盛り上げるのは酒嫌 宴会が終りそば屋へ流れつく 宴会はおそくなるよと電話する 宴会で会うてはならぬ人と会う きみえ 美津留 射月芳

何か期待する宴会へついてゆく 招かざる客が宴会盛り上げる 宴会の心を栞植えつける

宴会で出世を計る奴がいる

宴会に行くので胃散のんでいる

岳

人

吐

雨の宴会へ替え足袋用意する

戦友会涙を飲んでいる如し

五楽庵

好

88

빞

編集部

★93播磨文芸祭川柳大会は から覗く

或る日ふとわたしを聖書 傍観者になりきっている

県)両氏が秀句賞を受賞 姫路市長の賞状・記念品を (竹原市) 小林妻子 (岡山 大賞に藤沢三春(相模原市) 岡)の両氏 めやなぎ賞に小林正枝 ★『川柳公論』 は91年度の

かれ、本社同人の時広一路 1月31日、姫路文学館で開

都)、三席は大場可公

なお、二席は山本礫

★川柳噴煙吟社は第21回涛 路市)、双塔賞に加藤久子

授与された。

H III

協が写真名鑑刊行

和歌山市)さんの次の句。 した。一席は西山幸(同人 明賞A賞の入賞作品を発表

(岩沼市) を決定した。

県)を決定した。 柳都賞に熊谷岳朗氏 ★柳都川柳社は平成4年度 ★川柳塔あおもり代表の波

(京 多野五楽庵氏はこのほど結 会長に就任した。また、 成された青森県川柳協会の

(福 柳塔あおもりは近府県から 改称することとなった。 名を「川柳塔みちのく」と の参加者もあるため、 結社

う後任会長として川島諷云 は辻白渓子会長の辞任に伴 ★高槻川柳サークル卯の花

月7日午前10時半から岐阜 児副会長を選任、同副会長 加要領で行われる。課題と 記念誌上川柳大会が次の参 市文化センターで開かれる 顕彰受賞記念川柳大会は3 に芦田静江さんを選んだ。 ★柳樽寺川柳会創立88周年 ★野口初枝岐阜県芸術文化 記念―渡辺蓮夫▽

麦彦▽道―白川夜船▽天―

に各題2句を連記、 参加は400字詰原稿用紙 郎▽感謝―大石鶴子謝選。 西沢比恵呂▽光=松尾柳思 小為替

会係へ。各題三光作品に盾 松尾柳思郎方・誌上川柳大 台14-2『川柳人』編集部 でに北九州市八幡西区大平 に入院・療養している。 ■神谷凡九郎氏(常任理事 1月18日から多根総合病院

大阪市)は肺炎のため、

晶子▽島―須田尚美▽満ち る─木野由紀子▽着る─か 選者で行われる。 誌上川柳大会が次の課題と ★新京都社創立15周年記念 ・記念メダル贈呈 塔 秦野

料千円、 ★川柳塔わかやま吟社では 姉小路上ルの同社 句先は京都市中京区柳馬場 子共選(各題2句)、投句 雑詠―奥田誠二・村井見也 はじめ▽姫=外山あきら▽ なもりかず枝▽階段―若草 5月31日締切、投 ▽ご芳志△

▽同人消息△

千円を同封して4月30日ま 筆している。 28号の"川柳・初心のころ" ・大阪市) は『川柳春秋 「牛の歩み」と題して執 小出智子さん(常任理事

黒川紫香副主幹ら本社役員 弥陀池の和光寺で行われ、 月22日、老衰のため死去、 島生々庵前主幹夫人) は1 が参列した。 87歳。告別式は同24日、 ■中島小石さん(同人・中

記念として金一封を拝受。 県)から『平成五年』出版 ら供養として金一封拝受。 ■川柳たけはらから金一 ■新家完司氏(同人・鳥取 ■中島小石さんのご遺族か

を拝受しました。川柳塔社

月日·職業·所属柳社·

されている。

歳月―斎藤大雄▽進―田口

して牛尾緑良氏を決定。 野村太茂津氏の後任主幹と 柳社一覧を収録しており

日本秀句集、日川協加盟

画期的な名鑑として注目

芸大会における受賞句 川柳大会・国民文化祭文

名の氏名(柳号)・生年 紙・ケース入で2613 判520頁・本文コート を刊行した。 同書はA5 真名鑑』

(平成5年版)

1日付で『全日本柳人写 法人設立を記念して2月 全日本川柳協会は社団

> よび自選句(3句)のほ 住所・電話番号・写真お

か、第1回以来の全日本



貸した金だけは忘れぬ健忘症

稿用紙に清記をお願いします。 毎月25日締切・30句以内厳守。 原稿は川柳塔社事務所 へお送りくださ 所定の原 編集部 V

井上 照子報

さと美

ばたばたと朝かき回す姑達者 玉石混交石だった日を忘れない JR忘れものまで商いし 床の間に財布忘れた有頂天 死んでいる私今まで忘れてた 過疎の里夕陽の色はそのままに 指切りの約束忘れとおせんぼ げんまんの友を忘れぬとんどの炎 束の前日までは覚えていた

友久東

蚌

ひろ子 登志子

雲 美峰

テーブルマナー忘れ真似する右左 拓春照正宣佳 生子子雄 司秋

誕生日忘れてくぐる縄のれん 忘れてるわけではないが金が無

Va

釦かけ違いそのまま夫婦です 大阪弁そのままがいい情がある ばたばたと式挙げさせる岩田帯 忘れてた借金がある十二月 ばたばたと片付いてゆくお重箱

理想の女性それはえくぼのあった頃

キク子

年賀状思い出せない女文字 初春を独り手酌の祝い酒

元旦

のおせち料理も孫好み

そのままじゃ寒かろコート掛けてくれ そのままにしとけと書斎触らせず 忘れてはならない人の名を忘れ 家出の娘部屋そのままに帰り待つ 忘恩に梅の白さが目に沁みる そのままで真直ぐ進めスイカ割り 春うらら忘れた頃に市民税 忘れたか忘れないかにまたイラク 楢山で忘れ上手になってゆく 母の部屋そのままにして三回忌

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

門松が邪魔し通れぬ問屋筋 新婚とわかる可愛い松飾り もめている家とも知らぬ塀の松 立枯れの松が何かを訴える 松剪定植木屋の手に足を止 盆栽の松それぞれにある個性 国道整備由緒の松は道路曲げ めでたさを寿ぎて舞う松づくし

その昔まぶしかったなえくぼの子 乱気流えくぼがやけに恐く見え 初恋の痛い想い出片えくぼ 片えくぼ苦労承知でついて行く 子を叱る母はえくぼに愛をこめ 大正のえくぼを連れてフルムーン を聞けば決意が鈍り出す 園 佳 勇 次郎 昌 伊 三郎 行正園佳 白渓子 す 英福鹿

> くもの糸一本降りてきた決意 灰皿の底で眠っている決意 叱られたあとのえくぼにほっとする てっちりへ決意したようついてゆく ばたもえくぼ愛し通した男あり 紫い年 香ゑ代

み 綾 絹 英 楓 正 光 恭 つ 子子子 一 楽 坊 子 旦 舟 三が日こっちも行かず誰も来ず 針小棒大よくまあ続く週刊誌 ゴミの日とへそくり教え入院す

みち子

諷云児

杜萬

女的的

- ×

笛

秋からのもつれが解けず冬の章 大連れて運動不足のない老後 煮上げれば上戸も下戸も箸が出る 雑踏の駅で一人の顔を待ち

兼治郎

石

デパートでペットのおせち買うて来る たこ焼きへ顎突き出している晴れ着 石 尚

柳塔唐津支部 正敏報

武庫坊

はずむ胸押さえ婚姻届する 家事せぬ子ボランティアには励みおり 太陽は紅一円を拾う朝 和田湖の燃える紅葉に巌の松 夫のありて嬉しや通夜帰り 郎

子一太

2

体世間が何をしてくれた 去年の積雪踏み締めて 正朴虹 111 汀 明恒

腐っても鯛かと鰤の苦笑い 地方紙は広告ばかり幅きか 今日も又同じ定食差し向

敏

北の海エリツィン丸の波高し 集金がまだ済んでない除夜の鐘 移りゆく世につれ人も移りゆ 去る年の猿をねぎらう鶏の声 若者の希望と夢が晴着着る ミチ子 義 ふさ子 治

> どなってる方が迷子になった父 理屈では渡れぬ橋が多すぎる

柳後楽吟社 從野

紫

浅い眠りが書かす懺悔録 質状書く筆は楽しい老い ケセラセラ青虫もやがて蝶になる 0 むち

たけ志

食材と話して料理の手が進む 美智子

へ駅のコーヒーがやめられず 高槻川柳サークル卯の花

JII

島諷云児報

季節感八百屋の色で迷わされ ポンコツの車に頼る年の暮れ スイスイと市街地バイクじじは乗り 奈落の果てで吉祥天にめぐり逢う 義

親 友

柳五郎

遊ぶ子に終点のない縄電車

終点といわれ夢さめ酔いも醒め 終点で目にした富士の偉大なり

波留吉

志

女

稲

風

銅

桃

引っ張りだこのボーナス寄り道ばかりする 百歳まで生きるつもりの服を選る

7

クシーのほかなし鬼の待つわが家

ひと安心終点までの船を漕ぐ 鹿児島の終点にあるわが故郷

好奇心三歳にある迷子札 右の手がわたしに謀反訴える もぐる海女夫に託すいのちづな 手際よく根回し済んだ棒グラフ よく騙すママに呆れる招き猫 究極の味はマニアのアメリカン

茶 瀧 静 佳 子 小 江 秋

椅子取りゲーム勝って過労の歩を早め 古希悲し辞書を見ている虫眼鏡 リーダーになって無口になってくる 血がさわぐ最前線を去る未練 照健 吟

柳クラブわたの花 片上 英一報

寝たきりヘテレビの紅葉見せてやり

シマ子

美津留

咲くはずのいのち摘まれたあとがある

おまわりさんを連れて帰ってきた迷子

スミ子 節

芳

迷子札忘れて行った亡母の旅

ときどきは妻の財布も開けてみる

しげお

燕

捨てる気の雑誌がぼくを離さない

根回しは効かない父の懐手 根回しと知ってつき合う縄のれん それからは命を大事にして生きる ほんわかといのちが日向ぼっこする

やる気ある顔汗の価値知っている 錦絵のようにふたりは紅葉狩り 意地悪い風にさそわれ散る紅葉 紅葉愛で人の思いもそれぞれに 紅葉の庭へ大根干している

武庫坊

雪のない河内で唄う佐渡おけさ 息の合う夫婦やる気で切りぬける ますみ

言う程の事でないがと良い意見 凝り性な男でどこか抜けている

竹割った気性利口に振舞えず

雪月花香りに酔うは鼻のとく

点滴がいのちの音で落ちてくる 生き生きとした子はいない塾帰り グループの馴染みでコーヒー店は沸く 火葬場の煙ながめているいのち 京人形にいのちを入れる眼をえがく

> 諷 云児

> > の終点にたつ孤独

残業のつかれ終点起こされる 終点で棚のみやげが重く見え 終点で毛虫は蝶の夢をみる 終点に向ってみんな駈けてい 青い鳥へ終止符を打ち暦剝ぐ

トシエの

迷いつつ終り無き道楽しもう

ほろ酔いで終点わすれ客あわて

み明道 き子子子

句地 十選 (2月号から)

墓石の基礎はしっかりしておこう D 克 子

園のバス声から先に降りてくる 夢を盛る皿にはお金惜しまない 近所から椅子も出てくる日向ぼこ 雨の音耳に入ればホラー句 小菜実子 とよ子

私なら此処に居ります咳払い 誕生日もっと飲むかと聞いてくれ 本当のことしか言わぬ話下手

白渓子

91

寝ていても起こしてくれる駅に住み 鬼 遊

手際よくずるさも混じる計り売り

川柳東大阪 森下

女形いま男に返る楽屋風呂 ロッカーへ拳銃入れて投書する の母へ拳銃うなだれる

自販機の釣銭寒い音で落ち 勘の良い母に内緒を感づかれ 結び目がほぐれ夫婦の内緒ごと バラ活けて誰にも言えぬ人を待つ 女にはまだ成りきれぬのど仏 道行きの女形をせかす傘の雪

真信

朝寝坊妻の反乱かもしれぬ

柳 治秋

霧の町内緒ばなしを一つもつ 女舞い女形が磨く芸の艶

村芝居老母一役芸の幅

ここだけの話オウムに聞かれてた

頂留子

度

喜

風

隆

波風がたつから内緒にしておこう しんどい話屋台に捨てて少し楽 しんどいと思えば何も出来ぬもの 落ちぶれて初めて味わう生きる道 たそがれて身にしみじみと枯落葉

猪太郎

マサ子

覚然坊

一幸川柳教室 三宅 保州報

甘い罠しかけて匂う虫媒花 託卵のずるさも鳥の処世術 ずる人間ふと幻覚に溺れてる 風雪に耐えて掴んだこのゆとり 人並みの幸せ摑み秋刀魚焼く 摑み米洗い足す不意の客 よし子 かなめ 初 由 昭

> ずるいこと出来ぬロボットこき使い 旅立ちの娘等を気遣う乱気流 真実はどうあれ噂乱れ飛び 周り見ておんなじ色の旗上げる どっちにも転ぶずるさを持つ他人 町

赴任先男盛りが乱れ出す 足跡の乱れを隠す雪の舞い

#11-

作文に酒乱の父が裁かれる 衣々の別れがつらい乱れ髪 握られた手から乱れてきたドラマ 大役を受けて昂ぶる不整脈

たどり着くヒントがほしい余命表 宝くじ列の長さで買うてみる 乱気流真っ只中で振る小旗 戦乱の焦土で涸れてゆく乳房 宿敵に息の乱れは見せられぬ

湖風

ぐい呑みの中からヒントこぼれ出す ちょっとしたヒントで若い樹が伸びる ぎりぎりのヒント屑かごから拾っ 歯応えをそっと試しているヒント 民話からヒント貰った恩返し 突き当たる壁にヒントが書いてある 松幸 **芙美子** 高 保

城北川柳会

静 歩

雲海を抜けて釣橋ゆれている 当せんは賞品発送と逃げ

玉の毛糸の先にある思案

子供より親が笑顔の七五三 求人広告不景気風が人減らす 老父には言うまい血圧あがるから 筋の光たよりに道を行く

久留美

美智子 住宅の広告自分の部屋を決め

子代 家計簿を宥めすかして旅支度 連休に老いを案じて鉢合せ 波が引く中で明暗顔を出し 清貧に生きてころころ変れない

路

雄

法くぐる勉強したのか法科卒 花野来て花の律義を眩しがる 賽の目がころころ回る正念場 高砂や金波の前に尉と姥

博正

子

公一報

老いる母愚痴も命のかてとなる 病む身には友のやさしさ沁みる日々

八重子 寿美礼 行

ただし 史 登美子 昭政 典

円玉コロコロ私なら拾う

行楽地酒もだんごも手をたたき 波風を立てない母の気の配り 頂留子 倫

家中の足音わかる母の耳 潮騒が歴史の詩を繰り返す 大輪が威圧している菊花展

尼崎小園川柳会 立谷勇次郎報

スパイスのような広告一行詩

公

七五三晴着の子より目立つ親 晴着ぬぎ急に生きいき孫娘 成人の晴着隣へ見せに行く 娘の晴着新車で彼が迎えに来 つけ糸抜いて成人式に出

夢之助 石 舟

いわお

春

あい子

祈り空しくプルトニウムが着 祈る娘の願 西歳が三人ケーキ党 おばあさんのいる駄菓子屋にある昔 親はただ祈る事しか手伝えぬ お茶席に生菓子一つ座を正 菓子鉢に遠慮が一つだけ残 い知 りたい親二人 く港 キク子 定 弘 鹿 澄

これ位は聞いとくなはれえべっさん

キク子

てのひらに若いと書いている余生

お妃の話がはずむ年が明

はつ絵報 勇次郎 十四郎 治 記念日を忘れて妻に拗ねられる 年金をもらえる春の初詣 人文字の人をおもちゃにせぬように 職退いた夫と妻の均等法 めでたい話不況ムードを吹っ飛ばす

角が取れ存在感がまるでない 寒行僧青い目の人もおいでてる 句碑の前四季折りおりに和む胸

五平餅木曽路の雪はまだ消えず

萬

的子

春英

子蘭子代

わだかまりみんな流して雑煮餅

西宮北口川柳会

林

苦い茶と菓子が溶け合う裏干家

助手席で免許取り立てはらはらと 落胆は試練ジャンプをこころみる 灯を消して今日をゆっくり巻き戻す はらはらとさせる言葉は若さから 雛流しの袖をはらはら見てる母 愛すべき酒吞童子ですぐ眠る 落ち込んだ時には美味しいもの食べる 珈琲館のランプわらべの影法師 はしゃぎすぎパパの涙を見てしまう 洋 作一郎 柳宏子 寿恒友冬文直柳智 干萬 度 葉秋子伸子里的 子

赤と黒

螢のように胸に棲む

勝正宣澄み佳いわる 紀坊子子子秋ゑ

産声の真っ赤な命泣いている 終の坂登るポルシェの赤選ぶ 冬のあさ朝日に赤き稚児の耳 埋み火をそっと誘った憎い風 ポストから赤い吐息が漏れている

富喜子

もともとが捨て石落胆などはない 落胆の色は隠せぬインタビュー 童唄母の背中で聞いて寝る 正月へわたくしなりの捻子を巻く 小中高 親は落胆ばかりす 落胆の底で仏の手を探す 度童子とてもいい顔しています

> シマ子 シメ子 トミ子

文

公

涼 千 眉 能 透 世 子 水 子 太

ヤケッパチで乗った電車を間違える かぎっ子にますます遠い童唄 手応えは確かじっくりリール巻く 落胆はしたが明るいタイガース ウインチを巻けば港が活気づき

岩新智勝庸

水信造久美佑

て義る子

義ル江涼 イ子美子

残業で帰宅をすれば妻おらず 落胆は春の小川に捨てて行く

羽津川公乃報

岩美川 柳会

人生に計算出来ぬ岐路がある 赤字の愚痴を家計簿にぶっつける 面の皮捨てて二枚の舌使う 皮算用たぬきも相場読みちがえ 玄関で決めた返事を屋根でする 足す一は三と答えて敵視され 美代子 喜与志 嘉津江

守護霊も計算出来ず株に負け 風邪を引いてから計算が狂いだし 計算に涙の数は入れるなよ 帳尻が合わぬ夜更けのにがいお茶 計算は下手でも損はしない主義 計算へ逃げる姿勢も決めてある 美恵子

八千代 希久代

それなりの個性野に咲くすみれ草 本当のことしか喋らない個性 ぬるま湯の中でふやけてゆく個性

たず子 しげお 諷云兒

勘定にはらはらさせる呑みっぷり

高望みしすぎて落胆ばかりする 尻尾巻く姿妻子に見せられぬ 私の個性知っている鏡

個性強くて大きな丸がまだ書けぬ 鼻歌が耳障りへと夫婦仲 流人エレジー海向いて立つ墓一つ どん底のくらしに歌を忘れない 耳たぶを染めて告白聞いている 赤く咲く望みを秘めている冬芽 赤門の派閥で占める回り椅子

武庫坊

落胆の顔は見せぬと紅をさす 柿の木のてっぺんにある柿の自棄

美 田月

計算の強い女房に舵任す

ダーうちの子であった

やけ酒で飛ばせるウサは知れたもの

93

逆玉 使い捨て計算ばかり強くなり の輿にソロバン積んである 柳塔わかやま吟社 宮口

忠

雑煮からおんなの四季が動き出す

良 子育ての答えを急ぎすぎないか 解き放つ愛から父の樹が育つ 育て終り夫婦ゆっくり茶を啜る 育ち盛り僕人形じゃありません

紀久子 温室で育てたことを忘れてる

克子報

克保信

平野百合子報

はる女

とよ子 7

お婆ちゃんまさかの時に利用され 理想ばかり追うて財布が軽くなり おおげさなリボンが届く敬老日 薬風呂あしたも歩く足を揉む 百歳を祝うリボンを胸につけ

賑やかな輪の声漏れる風の中

賑やかなことがお好きな無精髭 賑やかにもてなす母の細い腕

子 男

孫と遊ぶ我が家に初春の賑やかさ 淋しくてつい賑やかな中にいる 年明けて賑やかにする雅子さん 賑やかに帰って行った忘れもの

IE

博

団体をリボンで動かす寺めぐり 年金の利下げの傷が深くなる 年頃になって重荷と気付く義理 自画像を飾るリボンは赤にする

登志代

稚好

君武

笑 枝 治

さよならしか言えぬ理性が情けない 手土産の重さで無理もきいてやり 金利読む指から消えてゆく温み 良心を言えば味方が不利になる 可 冨

人ゆるす気持をくれた広い空 青空は希望も夢も聞き入れる 突然に朗報初春の空かける 腹割って話せる故郷の空の色 冬の空ひとり女の旅かばん 青空を巻き戻したい星空で 大空へカーパイ背を伸ばす 大空で世界のことを考える

柳ささやま社

十二月頭の中を突きぬける 柿干して留守番だけの老いとなる 貞

列に並んだ孫へお年玉

とみ子 テ つや子 ヒサ子 百合子 7

和 美

植村客遊子報

飾り立て作り立て女みな美人 埋み火をかきたて燃える時を待 足腰が弱ると口が元気づく 子のために下げた頭だ悔い はない サワ子 岳 玉 詩

頑なに丸と決めてる雑煮餅

めでたさへ酒の弾みへ待つ雑煮

三枝子

まあるくなれと雑煮炊く

雑煮箸この幸せを逃がすまい 母はもう雑煮の仕度初明り 雑煮餅食べてハッスルする決意 雑煮ふと母に電話がしたくなり 正座して雑煮を祝う誓い事 不可能は無いと雑煮の粘り腰

紀美女

柳化粧櫓

吞寿武和鉄

子雄成治

子州秋

栄美子 実

悟ることないが白髪が目立っ 実のつかぬ桜は花の石女か 死んでやると来たこの川が深すぎる 皺伸ばすアイロンぬくもるひまがない 歯並びがよくていつでも笑い りも鍬をかついだ律義者

遊雨大

峰 雀 さとる

代 苗

はる子

思い出は皆な嬉しい事ば

か

音楽会揃いの服で皆若い 白い足袋履いてやさしい絹の音 病床で妻が指図の台所 母似だと言われ娘はきらう歳 足りなくて土産あの宅やめとこか 同じ事姑が言うたら角が立ち 句会室初めての人と話出来 人生を鈍行で行く律気者

夢もなく過ぎた夢追う一人酒

レンゲ手間の掛った物が煮え

正敏報

柳塔唐津支部(前月分) 久保

聞こえない二人だんだん太い 年の瀬に物入りなんと忙しい 募金箱呼び声高く風寒し 庭に梅桃桜東から

金さんに裁いてほしい元麻 高剛虹

手をとってシグナルを待つ老い二人 奥の奥見えてイエスと言いそびれ

治青紀旭幸 幸琴一恒夫明司汀

犬好きは犬が知るのか尻尾振る 給食を待つ老人に笑顔あり 黒豆と妻は今年も知恵くらべ

94

誤解生むいくさへバラが咲き誇る 夢の続きも一度見たいなと思う 遠い日の夢が私の始発駅 活動へプラス思考でつっぱしる 根まわしの活動金を播きにゆく 活動のちからで変わる虚から実 年越しのそばを待ってる除夜の鐘 泡ひとつ生まれ河童のプロポーズ 八人を生んで母は語らない 生む生まぬくすくす笑うのは媚薬 無精卵生むニワトリの猜疑心 絵筆も皿も生みの苦しみ知っている てのひらに夢を握っている火照り 夢追って捨てたふる里遠くなる うしろ姿ばかり追ってる白昼夢 ガン細胞かげでごそごそして困る 同権を叫びつづけた青い女史 愛鳥の活動家もいる焼とり屋 日本の裁判あんまり長過ぎる 老いぬれば雨傘陽傘の役もする よろこんで貰って下さる干支作る 赤い靴履いた人形今いずこ 夢にまでまた亡き父に叱られる 食品のレジがバテてる年の暮れ 億が総活動で出来た富 の隅で男女あしたの愛を生む 宮崎シマ子報 亮 長 幹生 柳宏子之 美千子 とみを 夕花 かつみ しづ子 ふさ子 喜久亭 ミチコ 美柳 幹俊 正義 洋 泰 久 ŀ 伸 美 男 豊かさに慣れ根性の足りない子 極楽に行ける切手を探してる うれしさが伝わる切手選っている 胸のうち切手をはってうちあける 軽口の旨さで司会よろこばれ クイズ解くキーは貴方に預けとく 定年へクイズのくれたフルムーン ときかねるクイズに春のうつがある 国会の疑惑のクイズうやむやに 少数派にまぎれこんでた風見鶏 鶏の声町内がもめてます 鶏の素足が未来までつづく 鶏の声けっこうと聞くよい目覚め 根性が裏目パチンコ負けつづけ 温室を出て根性を口にせず 根性は有るが情けに飢えている 何食わぬ顔して屈指の素封家で 屈指より平凡が好き温いから 誕生日年末なのでほっとかれ 単身赴任妻の切手が不意を突く 筆まめが切手三枚はってきた 歌麿の切手に軽く恋をする お通夜に軽口が出る隅の席 末の家計喜劇をくり返す 口をたたき社交にそつがない より根性望みたい総理 己の影をもてあます 岩佐ダン吉報 シマ子 弘天恭 啓一郎 浪速子 およろ 富志子 けい子 美津留 壮之助 U 文 彦晴で時 直 風 南 仲人はスポーツ好きを強調す 平日の理髪朝から混む師走 平日を優先させる指定席 平日の顔でライバル足を組み 貰い子とわかり両親うろたえる 履歴書に根性を書く場所がない 学歴を言わず根性引抜 平日の妻の行方が判らない 平日の鳩は常連よく見分け 平日の休みになれた新入社 補聴器がだんだん世間狭くする 二人歩けばすぐに噂の故郷の町 ちぐはぐな二人が狭い路地を抜け わが城と思えば広い1DK けつまずくたびに歩幅が狭くなる バブルはじけてからは視界が狭くなり 狭い部屋広く使うも主婦の知恵 2DKに住んで奥様お嬢さま 観光にされてる狭い田を守り 百歳になっても損得考える 損得に鈍感だって生きられる 損得は抜きで尽してあげたいの 損ばかりしながら長生きしています ストリップでバッタリ逢うた目のやり場 空襲にうろたえる間なく散った親 柔かい手で握られてうろたえる かされた倖せ朝の陽を拝む 京都塔の会 か n 松川

坊鳥

諷云 E 詩

白渓子

ただし

子

武庫坊 佳英

秋

杜的報 ダン吉

柳宏子

キク子

的

損をしたみたいに払う消費税 あの恩もこの恩も鳴る除夜の鐘 戦国の女性哀れに菊人形 ほめ合うてあとは笑い声になる 柳塔とっとり (お市 武田

しげお はつ絵

倉吉川柳会

なあ酒よ俺の心は分かるまい

洋

17

渡辺

善句報

X

午前四時いくさ始まる酉が鳴く 目覚ましに明日を委せて捻子を巻く よろこびの華が大内山に咲く いい事がいっぱい明日が怖くなる 女かな祈るその手で髪なおす

秋秋草女

七五三いと神妙に手を叩

ちかし 秀邦 子代

美

良

石花菜 碧

とみお かつみ

よしえ

由多香

美智子 康玲

独柳

よしお 圭一郎 しげる 侑 友 里 明日の事ラッキョむいて考える

白鳥は無心に祈る人に舞う 青い鳥飼って亭王が邪魔になる 焼き鳥で誘い出されてカニで酔う ソマリアに平和の鳥を飛ばしたい 金鵄章おやじの功そっと拭 寒い朝息の白さを確かめる 新聞がまだ来ぬ朝の雪を掻く 棒グラフ谷間で寒い風を漕ぐ 背信を見つめる寒い女の眼 老いの身を暑さ寒さが責めたてる シベリアの墓標寒さに堪えている 寒がりの猫も私の部屋を出ぬ 過ぎたこと忘れてしまい夜が明ける 苦境にも明るい笑顔妻は見せ 冬の雨傘は明るい彩を選る 明と暗昇進ポスト一つ空く

一つ黒いカラスも白くなる

のりゆき

よろこびは隠していても顔に出る 祈る度深い奈落を覗き見る 明日の朝味噌汁にする蜆買 い鳥探してバブル見直そう

0

ぼのと東空赤く明け染める

神様が祈りに○×つけている 鳳凰が代々木の森で舞っている 死地脱出それから祈ることを知る 鶏舎にも注連飾りしてはるを待つ 海へのぼる陽を守護神として祈る

輪多朗

Ш

粗

晩学の私に明日の電池買う よろこびの涙は拭かぬままでい 酉の刻寝るには早いマンガ読む 空を翔ぶ鳥も本音で鳴いている ご祈祷の値段をきめるのに迷い

柳塔まつえ吟社 恒松 叮紅報

百歳の笑顔茶の間に春の風 共白髪回り続ける夫婦独楽 年金でパンクしそうな長寿国 長生きの余徳は弥陀の手に貰う

振り返る生涯酒は友だった 年金をちぎって夢と酒をのむ さてもさても酒は愛想のよい奴だ 居酒屋で仮面一枚ずつ剝がす 火の鳥になって行きたい北の国

きみえ 多賀子 代仕男 太泡

尼崎尾浜川柳会

前田

いわお報

サングラス掛けてつまずく老いの坂

勇次郎

歳月は笑って許す事もでき 太陽が笑うと陽なたぼこ笑う 長生きの年輪で焼く炭の音 生きをして遺書を書き替える

E.

柏手に心の隅を覗かれる 明けましてお芽出度いよね福笑い 笑っては男がすたる父の役 表情も和んで病母の初笑い ケセラセラ笑うピエロの舞台裏

礼服の裾折り返す借衣裳 礼服で男代理の席に立 遠縁と知る礼服の初対面 礼服がキングサイズを持て余す 柏手の意味もわからぬままに打ち 柏手に呼吸を合わす老 百人が百の柏手持つ願 一月の柏手の音神の音 い二人

黒留が簞笥の底で待ってい 盃の底で動いた七福神 七福神は笑顔たやさぬ家が好き 礼服が父を泣かせる祝唄 た

楽天家もいて賑やかな七福神 今年こそ乗り遅れまい宝船 時々は七福神に裏切られ 七福神七つの海を越えて春

紅子江子

子丸江庵

甲子園の砂も記念にけずられる 待つ方も待たせる方も気が長い ばあちゃんが気長に貯めていた小銭 無職でも気長に待てぬ遅れバス 記念にと母が残した知恵袋 お茶りけに干柿が出る峠茶屋 野仏に話しかけたい冬日和 待合所落穂ひろいの絵でなごむ みの虫は揺れて気長に春を待ち かあさんが気長く守る黙秘権 女になった記念日は別にある 地の果てまでも日本人の居る凄さ 転びつつ耐えて懐かしい走馬灯 よく見える眼鏡で明日へ立ちあがる n 服鏡 手がかかる 夢之助 末貞 石 弘向尚 正昌鹿 澄 治子太浦

> 世い やがて冬の陣棒切れも集めよう 螢きて想いの丈を光らせる 渓谷の螢は誰に会いに行く 生き生きと川の流れを読む螢 水飲んだ螢が帰らない

森井 青居報

お正月すてきな夢がみたいなあ 中1 小5

忙しい振りも師走の女たち ポケットにテキストがある娘 産みたての卵遠い日の記憶 一月一日ポストを何回ものぞく 0 料理 千代美 史 菁

講習会我が家にメニューひとつふえ いつかまたあえると想うおみなえし 湯殿からあふれる音がする電話 ちんどん屋昔昔の手を振って ふと目覚めさあ挑戦をする作句 爱子 喜美子 浪 子 喜久恵 ヤスエ 気がかりが溶けて安堵の日がしず

to

麻

芽が出たら話そう貧しい種をまく 夏 喜枝

年賀状書き書き午前様を待ち 琴の音が迎えてくれた古都の宿

りくどい話は秋に似合わな

比呂子 静房貞 7

手のつ

淀まない流れに螢帰り着

太陽の下でストレスなど抱かぬ 小春日に亡夫の靴を拭いて見る 種あかしされないまんまそれ 師も走る諭吉も走る十二月 福寿草ひとつの愛を温める

ふさ枝

親と子の風呂でクイズがパンチする

の螢が翔んでもう十年

鳴る方の水も螢は信じない ぴきの螢団地を騒がせる 螢の灯白に還ってゆく情け 汚染され螢のお宿今いずこ

てい子

戻って来た螢に苦い話聞く 受験期の胸で螢が指を折る 大切な

螢模様の
浴衣です

のりこ

よき師良き友私は果報者である 老いの足躓いて知る世の移り

H

林で迷い螢は死んでゆ

政岡日枝子報

の姉妹気長に笑い撒く 柳塔きゃらぼく

いわ

人工の螢でとぶ事知らぬまま

千荒瑞夕 介枝子子 初日 山紫水明子の故里に職がな 郷愁の音でほどける竹の皮 あれもこれも伝え足りない娘が 花片のポトリ未練など持たぬ の出ここで拝めたらなと思

白静不伸一政

風朽子路己

40

人生の秋を教える木守柿

柳塔あおもり

風呂へ行くむかし下駄ばきい 取り立てが持っていました風呂がえり 自分でもうまいと思う風呂の ひざを曲げ二人で入る家の風呂 ぬるま湯で煩悩いつか神と逢う 家族風呂楢山からも降りてくる ま車 明 朱堅つ一

背を流し大人になった娘が眩 幸福論たとえば髪の浮く湯舟 お湯なんてどうせ男の夢じゃない

我を去り我に戻り

し風呂の 中

幸せは晩酌を待つ風呂があり おぼろ月ウインクされた露天風呂 湯上がりの爪は優しい顔で切る 湯屋を出てロダンの顔に舞い戻る

思い出がぬくく溢れる実家の風呂 露天風呂もみじ葉肌にひたと付き 露天風呂こだわりぬけて湯が溢れ 人居の風呂に電話が鳴り止まぬ

しまい風呂ようやく母の今日終わる

棒鱈になる僕だけの露天風

叶 C 甫

二る光保樹花 97

五楽庵 黙 ツ祥 子

千加子 峯 生恵子 男

冬ごもりしますと雨戸閉めている

り道の名人ママが帰らない

のある限り老化は進まない

みのる

JII

高田美代子報

おみ拭いの大仏さまがクシャミする 寒そうな裸祭に湯気が立つ 寒いからじっと腕組みする達磨

川竹

松風報

縄文の歴史が重い出土品 本紙より重いチラシが中にある 孫に会う重い荷物が苦にならず

良妻の仮面は届くとこに置 頂点に立って鎧が重くなる 一年が新しくなる屠蘇に酔う

カラフルに生きて孤独を抱く女 迫害に耐えて父さんヒゲのばし

株主へきれいな帳尻を見せる 定年に帳尻やっと合ってくる 帳尻が合って二人の熱が冷め 辻褄が合うて帳尻赤字です とても優しい妻をしっかり演じよう 真心の値段です手作りです 社内報離婚の記事は載ってない

退屈を絵にしたような昼の月 退屈が鼻ひげまでも手が伸びる 職退いた退屈孫に埋められる 朗らかな顔を揃えたネガ覗く

トミ子 婦美枝

退屈な女が恐い話する 退屈を娘に分ける長電話

わかあゆ川柳会

退屈を茶房で埋めるループタ

風坊

千恵子 ち

功 風

松本はるみ報

又ひとつ夢がこわれた流 残月に覗かれ朝の露天風呂

智重子

美しい嘘が荷物になってくる

はるみ ちよえ

北風がシャツの厚さを笑ってる 防寒具作るピークは暑い夏

さりげなく裸電球光ってる 逆なでは無視しておこう忙し 北風のノック聞いてる不眠症 生きたまま冷凍された魚の目 国民を逆なでにして高いびき 逆なでの風さからわぬことにする この笑顔演技であろうとなかろうと

年賀状トサカの赤に念を入れ 鶏冠だけ飾り雄鶏逃げ回り

くちばしの黄色にとさかつつ 首相の鶏冠色も形も去勢され

かれる

騙されぬように鶏冠を立てておく 嘴で鶏冠に愛をたしかめる

しげお

子の賀状帽子みたいな鶏冠書き

与呂志

均等法女の鶏冠でかくなる 矢面に立つととさかが燃えてくる

一十一世紀へ女性の鶏冠大型化

例に似ずとさかふりたて反撃す 国民の鶏冠逆なでした五億 鶏冠まで来ている政治への不信 帳尻は合ったことなし子沢山 帳尻の合わぬ一生かも知れぬ

海

売り出しを横目に冷たい雨

美代子

底冷えの列島慕って渡り鳥 とったりの裸と裸貴とりえ 冷えたのを救ってくれたのはピエ 生きている証か今日も腹が減

清博

好聖

泉利栄子

柳ねやがわ

お互いに音痴でうまい批評する 涙腺にピリオドドラマはもう見ない 遅蒔きの夢を見てから医者通 政治家をほめ殺しとは考えた ピリオドの余白うずめた恋心 荷になるが持ってお帰り福寿草 お荷物になっているのに認めな 反省を背負って生きている余生 真直ぐに生きた人生それでよし 末っ娘を嫁がせ肩の荷を下ろす すまないのそのひと言を言いそびれ 回復期歩ける夢ももつ間 12 かすみ 勇太朗 黎之助 明

連想ヘピリオド ダイヤのAが出て 反省し他人の声聞く耳を持つ ピリオドに女黒髪刈り上げる 反省へ自分ひとりを責め過ぎる ピリオドが近い怒りんぼのままで あやめ 吉之助 とし子 英壬子

波留吉

美しいピリオドですと通夜の席 手作りと書けば豆腐も箔がつく

脱線のスリル知らない俺の靴 夢一つひからびている小引出 太陽が見てる私の貧しい手 お荷物にならないように従いてゆく 荷くずれもなしに走った父の貨車 老母の背の丸さ苦労をかけすぎた ピリオドの後も角膜生き続け ふるさとのせせらぎに聞く童歌 柳宏子 欣史子 頂留子 ルイ子

礫度

はびきの市民川柳会 榎本 吐来報

たかし

武

食進むあとひと口を思案する

池

森子報

尾長鶏通天閣であくびする 草野球まずグラウンドの籤に負け

詩人には雪しんしんと積もる音 暴走音響かせ深夜の自己主張 騒音を避けたキャンプに鳥の声 手拍子にふんわり乗って夢を見る 正座しか出来ないように育てられ 上司との視線に困る場に座り 立てば芍薬座れば牡丹よその妻 カラオケの輪に生き生きとした音痴 音の無い街で傷心抱いている にっこりと笑うと人斬る癖がある ゴールしてにっこり笑顔ギャルの汗 岩信 ぎいち 志津江 胡村 たけし 美津留 吐 重 辰 一屯 昇

> じょんがらの三 快方に向って母の食進む 初春は巻寿司かぶり厄落し 正直に信じた話に裏かかれ 進めども無明の闇は晴れやらず

味で舞台は紙吹雪

子

7

回れ右しません進む道一つ

新しい暦私も殼を脱ぐ ゴミの日に丸するだけのカレンダー カレンダーふくよかな胸見てしまい みつこ ダン吉

両目あけてからのダルマが狂い出す 辻褄を合わす商魂たくましい 割勘は辻褄合わぬと下戸嘆き 辻褄が合わなくなると呆けたふり カレンダーの妻の印がややこしい 両方を立てて裁いて年の功 両方がコップの中で譲らない 弁護士が辻褄合わす知恵を貸し

男

シマ子 絢 かつみ 平

無位無冠人情もろい作業服 事あれば一丸となる絆持つ ハンドルを持たせば明治まだ動く 不況風サンタの袋チトすぼみ イポーズ少しお腹を引っ込める

子 忘年会酒が覚めれば思い出す 評判になって世間を狭く生き 定年になって年金気にかかる 趣味の会心拓ける友ができ

美代子 あれを見て何思うかと面の数 向い風受けてもペダル踏める幸 寒霞渓の馬引く老いの仏顔 鼻歌で歩けば丸い風に逢う

どの道も裏目うらめの風が吹く 厄落し出来ないままに陽が沈む 厄落し母は秘かに鈴を振る

花

柳塔おっぱこ吟社 木村 明人報

説教を我慢している膝小僧 菊の花一年かけて見て貰う 善人の足跡のある遍路道 くに子 白柳子 よしみ ひかり かおり いさむ IE. スミエ

井上 直次報

途中で立つ席は隅が都合いい

一億円?丸が一個たりないな

小菜実子

チカエ

マサエ

伽名子

紅白の美声に酔うてそばを食べ 好きと言われ重荷になってくる男 どことなく甘えてみたい人が好き 眞 洗郎光

別嬪さん毎月変わるカレンダー

りつえ

その裏の裏を母は漏らさない

吹雪く夜の修羅を男の胸できく 厄落しの積り会長引き受ける 愛憎の吹雪が描き出すドラマ 裏方に徹して髭を伸ばしてる 裏の手で今日は無言で絡み合う

吹雪く夜は君の呪縛に委ねよう

敦

敏

柏手を打って神主厄落し 裏側を覗くある日の好奇心

三三子

メロドラマ今日も仕事の手を止める

堅物の部屋にヌードのカレンダー したたかに生きた姑の座りダコ 人妻と座れば春の風になる 鈍行へ老婦揃って座る旅

カレンダー今年こそはがぶらさがり

ほんとうに好きかと言えばそんなこと 好物の粕汁匂う妻の留守 大好きと書かれた孫の手紙抱く 好きな人好きと言わずに特攻隊 美しい患者に医師も不整脈 方敞直

プリンスの恋美しく父子二代 薫 博 宣 史 司郎子次

> 無い袖を上手に振ってうちの魔女 どたん場で頼りになるのはうちの魔女

泰 道昭

吟平報

読み捨ての新聞に愚痴折り畳む ささやかな風に会いたい笹の舟 畳替え出来て正月すぐそこに 腹の虫おさえ平穏保ちます 巨美恵子 甫江キ邦志 正山エ人重 邦志山

ヤケ酒がやけに明るい縄のれん

目立たないように真心知恵を貸 宅配に真心一杯つめてやり 真心に言葉はいらぬ体当り 真心に凍った心解け始め 若鷲の真心翔んで行ったまま

初詣

出張の帰りを待っている枕

真心が溢れセーター温かい 若者と語るある日を教えられ かず男真実一路行く

すみれ

吟

平 香

お正月ほめごろしに合う妻の酒 掃除洗濯不倫もこなす女です 富志子

年の瀬の疲れを憩う三ヶ日

JII

会

河内

月子報

お料理を楽しく習う亭王族

弁天さんは魔女でしょう

能面の裏も表も魔女だろう とても陽気な魔女と聖夜のタンゴなど 魔女の棲む森から男帰らない

路地裏の魔女が今夜もピアノ弾く 積木つむ掌で年玉を数えてる 輪の中に楽しい人いて出られない 楽しみにしていなさいと釣天狗 金三郎 紀美女 頂留子

食卓のサラダはいつも話好き たのしみを追っかけてみる夢欲し 限界を知ったか魔女が尼の道 東洋の魔女を知ってる層も減り 魔女に似た伯母が近所に住んでいる 目にひかれ魔女と一緒に堕ちて行く 巫女の袴の折り目立つ 美子 てるよ 福信寿芳小 博 美水鹿

踏めば鳴る落葉たのしむ暇が欲し だんだんと妻の賀状が増えてくる 近頃の若い魔女には勝てません 兀旦の青空へ持ついい予感 ローンも済んだお正月 かりん Ξ

髪白い友寄り合って初笑い 魔女つれて買いに行きたいジャンボくじ 酔うほどに君は愛しい魔女になり 政治家で魔女を掌中に入れている つ年取ってもやはりおめでとう 僕川報

IE. 雄

正月に開ける地酒のもらいもの

地下街で迷い出口が見当らず

薬局の隣へ富山の人が寄り 二人ずつ座るベンチは仲が良い 残り物猫も魚に手をつけず 大相撲裸で稼ぐいい世界

禁煙の夫可笑しくも哀しくも バス旅行居眠り誘ういいガイド

鬼の留守昼寝をベルに起こされる

久 静

まつ き

えんね

代

東口あんたいつまで待たせる気 どんな子を生むか東大卒の嫁 生きて行く音東から朝が明け

きく子

東京へ下宿さがしに母がゆく 雑魚寝して東も北もない枕

しなやかな心窮鳥抱きしめる しなやかに文楽人形の指の影 人待ちのサロンでドラマ生まれます

田実子

占いがブームになっている不況 粥炊いて白寿の父と答え合う けんめいにリハビリしてると質状の字 女棋士しなやかな手できつい石 しなやかにとどめを刺した京訛 喝の武器錆びてきたおじいちゃん の猿見ていると気がなごむ

武庫坊 的 子

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

下手がいたい所をついてくる

書初や中近東にある火種

サロンでは金の話はせぬことだ

一笛

萬

的

しなやかに衣ずれの音 ただし とく子

つえ子

喪が続き年金寒い春となり 川柳塔みか月

土橋

(小)英

子

喜与志

故郷の山の雄姿が夢に浮く 虫食いの系図がとてもいかめしい 耐え抜いたうしろ姿にある自信

川柳で見知らぬ郷に友ができ

ナイスプレー鳴りもの入りで湧く拍手 無器用で焼餅やけぬ女です 姿見に背筋伸ばせと論される

ふる里で新年の宴 賑やかい

かつ乃 孔美子 苗

初採りで蕗の薹味噌ほろ苦い ちぎれ雲気ままな旅の初体験 苦と楽が背中合わせで芝居する

新 同 岸 田 人 萬的・狸村・勝晴推薦 紹 中 介 桂 文 子 時

賑やかに東海道の上り線 初冬の道でしゃがみ込んでるのは父か 長女次女こん立表が賑やか 感情のもつれ賑やかさへほぐす 坂が賑やかで響かない土鈴 元日でも煩悩舟は沖へでる

> 日枝子 とみお くに子

由多香

新家完司川柳集

鬼遊・天笑・鶴丸推薦

書初めの筆スラスラとよく動く

きみ子 香枝

黒

田

能

子

薫風・恭昌推薦

一歩違って母の味がでぬ

振袖の娘をつくろうている姿 丘に句碑はるか向うに虹を見た

バイバイの姿が消える曲がり角

みさ江

時を語れど姿は明治生まれなり

人っ子賑やかな味知りません

マネキンの姿が憎いなと思う

菜の花のにぎわう村で田を守る

人間の姿にあきれ鳴くカラス

汲瑞睦

うまく化けたね姿見が皮肉言う 淋しいな留守番猫がでむかえる 中流のくらし恵まれている自覚 母の死期わかっていたかカラスたち 話せぬが通じる仕草孫の顔

A 5 判 120頁 1000円 (送料 310円) 鳥取県東伯郡東伯町徳万597 新家完司 **〒**689-23 松江0-9685 (赤碕川柳会句集刊行係) 郵便振替

句集紹介

『平成五年』

m; 内 天 笑

は信条だろう。

く第一句集『平成元年』は絶賛を博した。 通りだ。平明で切れ味の良い句にファンが多 常連として頭角もあらわされたのはご承知の 投句されて以来、これまで常にベストテンの たのがご縁で翌年7月の第四年度夜市川柳に 呼んで下さいとある。59年秋松江でお会いし 望には「完司」として再出発。カンチャンと ると紹介されており、翌6年7月号の柳界展 昭和59年9月号の川柳塔誌に新同人新家まさ 体三行組はとても読みやすくて親しみがある 『平成五年』が上梓された。A5判5号明朝 『平成元年』につづいて新家完司川柳集□ ともだちを数えて歩く花の下

> う女性作家が私の周りに多い。とても羨まし に伝えて読む者の心をしっかり摑まえている の句もよく整理されていて自分の思いを確実 ープで深い思いやりがあるからだ。その上ど い風貌とはうらはらに、彼の句はとてもナイ い。その秘密はあのクレーターばかりのごつ 天才に負けないように努力する

があり、ただ笑わせるだけに終っていない。 これらの句に彼の繊細なものが現れている 少し穿ちを利かせ、ペーソスのある句に 善人と善人にらみ合っている 待ちぼうけ誰も財布を落とさない 相槌を打たぬと怒る酔っぱらい お酒かと思っていたらお茶が出た 鍵いっぱい持ってあなたも寂しいか いそがしい人が手紙をよくくれる 傷ついていないふりなら慣れている にんげんと鬼と見分けがつきにくい

かい

には自分を掘り返している句にいい句が多い。 あり、これらは社会派の句と言うべきか。更 川柳の原点とも言うべき批判精神が根底に 差は開くばかりわたしとお月さま 花火工場の近くに安い家がある 悪い人になかなか罰が当たらない 確実に善意の傘が減っていく

躍を切に期待いたします。

『平成五年』には三五八のいい句が詰まっ

自選のあと天根夢草氏に再選を委ね 「完司さんの句ウ好きヤわア」と言

女性には生んでもらった借りがある

何かしてあげたいけれど人の妻

これら自己批判の句には完司流の風格がある。 流されぬように重たい靴を履く えらそうに言えぬわたしもいいかげん 悪口を言わないようにガムを嚙む 拳銃が欲しいわたしを撃つ拳銃が 何を捨てると小鳥のようになれるのか

これらの句はそれぞれある極限状態を持っ 化粧しても耳はけもののままである 物置の鉈が頭の隅にある 母が死に母が飼ってた鳥も死ぬ 樹が匂う何か話しているようだ 美しい刀よ人を斬るなかれ 連敗の力士の顔をじっと見る

犬ともこれで別れることが出来たであろう。 生きる歓びを共にしている姿勢がまぶしい。 ない。一緒に生かされているもののすべてと ていてとてもセクシーな完司像が彷彿とした。 動物や植物に接する時の愛も並のものでは この句をうんと味わいながら、今後のご活 おふくろさんとも親しき友三鈷さんとも愛 要るものは僅かなものよ花の下 恐竜が見たのと同じお月さま おふくろも風の仲間となりにけり 丘の上すすきか死んだ人たちか いもうとのような夜店の金魚たち

門谷たず子川柳句集

『花ごよみ』

丸山よし津

小学校・女学校の十一年間を共に学んだ親

友の門谷たず子さんが、金婚記念川柳句集 『花ごよみ』を上梓されました。何はともあれ、金婚おめでとう、ご出版おめでとうと心れ、金婚おめでとう、ご出版おめでとうと心れ、金婚おめでとうと心れ、金婚おめでとう、ご出版おめでとうと心からお祝い申し上げます。 た生、並びに都大路主幹奥山晴生先生の讃辞を絵に描いたような写真、川柳塔主幹西尾栞を絵に描いたような写真、川柳塔主幹西尾栞を絵に描いたような写真、川柳塔主幹西尾栞を絵に描いたような写き彫りにされています。 川柳は年代順に七つに分かれ、各章には、たず子さんの美しい文字で表題が記されています。 当時は年代順に七つに分かれ、各章には、たず子さんの美しい文字で表題が記されています。 がけずる「愛の詩」と言えるでしょう。 族に対する「愛の詩」と言えるでしょう。

> 手の届く距離で振り向く夫がいる 春宵一刻三人の子と水割りを 片方が病んで重たい夫婦箸 朝市へあの子この子へ荷がふえる 朝市へあの子この子へ荷がふえる 撃二つ干して夫婦という絆 円周の中に子を置き孫をおき 靴二足愛のかたちで脱いである 縁あってふたりで乗った花筏 一病もつ夫に合わせるしじみ汁 続編も家族でいたい欠け茶碗 殊に、門谷家の一人娘としてたず子さんを 殊に、門谷家の一人娘としてたす子さんを 殊に、門谷家の一人娘としてたす子さんを なしみ育て上げ、大家族になってからも終生、 いは格別。

ですらかな母へ最後の紅をぬる さよならも言えぬ別れに細雪 絹の糸はじいて亡母を呼びもどす てっせんが亡母のコートの色で咲く 花手桶亡母と二人の時を持つ 気がつくと亡母を真似てる返し針 気がつくと亡母を真似てる返し針 そしてロマンチックなたず子さんらしい句 黒揚羽かるい眩暈の陽の中に パラソルに逢うた余韻をたたみこみ 遠花火炎えたい時もある女 あれも小さな恋かもしれぬ椿の朱 値れて掌にとれば散るシャボン玉

私たち級友を川柳畑へ引っぱってくれた思がら、最後まで一気に読みあげてしまいましがら、最後まで一気に読みあげてしまいました。

五十年の足あとを一読すれば分かるようにひからの出発で、大阪・博労町に、株式会社び江屋を創立、社業を隆昌に導いたご立派なご夫君を扶けて、商戦の最前列で腕を振るうたず子さんも、ご家庭へ戻れば良妻賢母、ご夫君へは勿論のこと、三人のお子様ご夫妻、お孫様方へそそがれる心配りは、細やかに行お孫様方へそそがれる心配りは、細やかに行き届いています。

ります。

風書房刊)

川柳塔社常任理事会(2月1日)

▽田中文時(岸和田市)岸桂子(出雲市)黒田能子(芦屋市)3氏の同人推薦を承認。
▽大阪文化団体連合会への入会を決定。
▽『川柳塔』発送について協議し、川島諷云
児氏を中心に新しい態勢を作ることとする
『氏を中心に新しい態勢を作ることとする
いて審議することを決定。

嫁と娘のはなやぐ厨重ね鉢いとしさと重さを胸に孫ねむる

本 月句会

二月六日(土)午後五時半 メンズファッションセンター

夏磯典子さんの二人が受賞した。巻紙の手紙 んと、ずっと手を引き、それを支えている神 で美しい友情をたたえ、色紙軸と色紙「うる 自由ながら皆出席を続けている本間満津子さ 行われた。名付けて『さわやか賞』。目が不 名の出席者を迎え、定刻通りはじまった。 はじめに、心暖まる表彰が西尾栞主幹から 感が猛威をふるう中、二月句会は八十九

島小石さんへの黙祷が捧げられ、板尾岳人氏 れていることを立証した。上質のユーモアを いた句を示し、両者の垣根が今やほとんどと されているのを歎き、新聞の俳壇から書き抜 て買っているという。依然、川柳が世に曲解 まり、近所の古本屋に出た川柳関係の本は全 の「おはなし」に入る。氏は川柳を愛するあ 一月二十二日に亡くなった前主幹夫人、中

引退を秘めた土俵の砂煙り 死に土産 大阪場所に招かれる

雑巾をたくさん縫うて老いてゆく

日本人 外国人もない土俵

ハワイ勢いるので土俵狭くなり

土俵から見えるところにママがいる

土俵から両親の顔見え隠れ

万雷の拍手を受けた。

うるませながら、お礼の言葉を述べる二人は、 わしき絆尊し春の風、栞」が贈られた。声を

> と呼びかけて結びとした。 生かした句が作れるよう、今後も努力しよう 月間賞は田中薫氏(尼崎市)に輝く。 (記録―ダン吉・みつ子) (司会-東雲) (受付―智子・冬葉

水戸泉 負けた土俵は塩辛い 相手の目 睨みつけては塩をまき 力士より気になる女が砂かぶり 勝った日の土俵せまいなと思う 黒星が続く土俵が怖くなる 全勝の土俵が怖い落し穴 決着を土俵の上でつけてやる 男なら土俵の上で勝負しろ 土俵では勝てぬ男が罠を張る 土俵際 突っぱっている二浪生 九条の土俵だんだん狭くなる 恋よりも土俵に生きる鬼になる 土俵入り明治の森に雪が舞う 土俵からすでに美人を見つけてる 土俵入り故郷の母が泣いている 勝したら土俵小さく見えてくる 編英 子 [|] 岩美智子 Ξ 欣史子 かすみ 典 諷云児 佳絹保 度 郎 生 郎

落日の男が歩く剣が峰 八百長は土俵一番知っている

子に譲る土俵は少し大き目に 借返す土俵だんだん遠くなる 土俵から降りた背中を叩かれる 土俵の鬼で甘いマスクを持っている 興奮の土俵 座布団飛んでくる 土俵去る一礼 人間取り戻す 土俵から降りると普通の子にかえる 土俵から気迫を盗む技盗む 倒れたらケガやあっさり土俵割る 人生の土俵に待ったなんかない オーマイゴッド土俵に青い目が耐える いさみ足 土俵のこわさ見てしまう 諷云児 みつ子 英壬子 柳宏子 白渓子 太茂津

土俵ではとっても強い男だが 男の骨がぎしぎし鳴っている土俵 土俵からこの世を見ると風ばかり (福) 英

兼題にくさん 宮崎 シマ子 選 マドンナがいつも土俵のそばに居る

元

紀

初大師 人出に酔うた鳩の群 たっぷりとお乳を飲んだ子の寝顔 お年玉ふとんの下に貯めている たくさんの核に難儀をする地球 愛されて母にたくさん叱られる たくさんも少しも同じ孫の指 (新) 正 ダン吉

女

くちぐちをうまく聞いてる保母せんせ 不器用がたくさんの悔い抱いている たくさんの中で選んだのがお前 寄せ書に飲み助たんと名を連らね たくさんもないがと温いお裾分け 餞別をたくさん貰ってとばされる たくさんの中で一人が見つからず 人妻に優しいひとがたんといる 陰口はもったくさんと輪を離れ たくさんは無いがと渡す温い友 たくさんを言わぬ小言に刺があり たくさん笑ってそして淋しさのり越える 繁華街 嘘がたくさん歩いてる 茶が旨いたくさん話題持って居る 生きているからたくさんの嘘をつく たくさんはないがと駄賃にぎらされ 子だくさん苦労の数と愛の数 友達がたくさん欲しいにぎりめし たくさんの罪があるので死ねません たくさんの絵馬で神様過労ぎみ 森林へたくさんオゾン吸いに行く 親の夢たくさん詰めたランドセル 殺し文句をたくさん詰めて封をする たくさん聞いて一つ覚えた薬の名 たくさんの情けに出会う雪女 摑みたいものたんとあり 頂留子 柳宏子 恭 美正 たず子 満津子 頂留子 透 葉 太 風

> 百千のありがとうからひろがる和 たくさんな家族でよく泣きよく笑う 真っ白になろうと千の罪流す

ありがとうをたくさん言えた尊厳死 楓 楽

たくさんおあがり未だに母は言うてくれ 満 州

悪智恵をたくさんもらっている善人 兼題「上 シマ子

上役のデスクへ花を絶やさない 上役になってもどって来た同期 恨まれて上役さらにえらくなり 上役の器量知ってる紙コップ 新米課長 号令ばかり掛けたがる 義理チョコの数だけ上役の人気 上役の妻ひと言が行き届く 上役を選べないからつまらない 上役の弱みにふれたとばっちり 上役に風邪も文句もうつされる

上役の小言 耳栓詰めておこ 上役の娘と会わぬようにする 長いものの中に上役入れてある 社友会まだ上役の顔をする 上役にうまく取り入るすかんたこ 上役にケチがいるので困ります

眉 朱

夏

中 上役がセクハラの記事睨んでる 反骨の上役あくびばかりする 上役の机上さそりの玩具乗る

上役の左遷は僕のせいだろう 友達のような課長で使いよい 上役が休みをとれと言いだした 上役の孤独がエレベーターにある 叱られる役を上司に頼まれる 上役が出世を捨てて近くなり 口紅をキリリとひいてきた上司

諷云児

上役と一しょに走る二分前

たくさんの欠点ぐるみ好きと言う たくさんの言葉は要らぬ笑い顔

みつ子

上役が古い薬を売り歩く

左遷地の上司とウマが合いすぎる 上役と会うときシャネル5の世界 此頃聞きあきて 豆の的にされ

上役が休むと治る偏頭痛 上役のあせりオフコン動かない

柳宏子

保

諷云児

上役の弱みはマドンナから洩れる このところ上役なぐる夢ばかり 上役の弱みにぎっている女将

柳宏子

ダン吉

郎

上役にひと呼吸おく自動ドア

上役に千円貸したら一めん屋

部長のボールより飛ばす みつ子

北

上役の大きな石が死にそうだ

選

ご好意に甘え半分ずつ濡れる 甘い顔見せると高い物ねだる 定年でゆっくりあける砂糖壺 甘い顔してたら会計させられた わたくしの掟は飲むと甘くなる フィナーレと気付かず男甘くなる 甘口のけつねうどんが好きやねん 甘い言葉を久しく聞いたことがない ライバルの笑顔だ甘くみるまいぞ 上等な毒だな甘く心地よい この頃の母は躾が甘いなあ これだけは甘い親でも承知 せず 松文 欣史子 東 寿 庸 笛佳正 子 雲 子 佑

甘い

ぜんざいは甘いと決めていた不覚 塩少し効かすと甘味生きてくる 気安さにうっかり甘えてた不覚 甘いのは苦手と仲間知っている 甘いのも好きですねんと如才なし 子育ての甘さ警察から電話 ひもじかった体験があり子に甘い 真珠婚 甘い言葉が聞こえない 昔菓子の甘さに浮かぶ里景色 考えの甘さを敵に教えられ 庶民の声は甘くない 美人に甘過ぎる みつ子 白渓子 歌 利絹公 武子子生秋雄

目の回る一日だった腹が減る

信用の尺度

甘かった詰めに裏木戸叩かれる 冬の螢は甘い話を聞きあきる 甘い空想をしてたら乗り過ごし 男はんの甘い言葉に気いつけや 甘い話が落ちてい

孫の顔見ると財布が甘くなる ばあちゃんの甘さときどき利用する 人間は甘ったれだなまた戦火 企画書が甘く逆風受けている 蟻がいちばん知っている 絹 歌

ダン吉 子

武庫坊

楽

森 7

どの男も女に甘く出来ている 冬山をまだ甘く見る山知らず

ジキルとハイドけじめが甘くなる余寒

満津子

恵まれて自己採点が甘くなる

Ħ

い言葉を操る細い目の

男

自問自答

甘い答を出している

しげお

妻に名前を呼んでるようじゃまだ甘い

兼題

取れそうなとこから回る金集め 満 敏

塩

ほなさいなら蛇の目が回る祇園町 小回りがきいて気軽に使われる 縄張りを回ってタマに子が出来る (新) 正 寿

回し読みした友も老い 文満章 州久美子代

伏せ字本

得意先回り不況を思い知り 酷い矢が貫くカモが飛び回

> 森鬼天岳保 笛 子遊笑人州 独楽回しそんな遊びがあっ ってる地球きれいになりたくて 回回る芸もあり

たっけ

児房

回りくどい話 肩書きに回り持ちとは書いてない 地球が回るああ人間は戦好き

回り椅子さむいゲームを繰り返す 気弱な僕である

ダン吉

美代子

秋郎

掌の上で回り男は策を練る お百度を回り万朶の花を見る 春の入口で歯車回りだす 花時計が回る確かに春が来る

反対に回る一票 伏せてある ジョーカーをそ知らぬ顔で回される 振袖の姿 観客を泣かせた舞台回りだす 女系家族の運命で回る糸ぐるま 回り大きく見せる芸の虫 鏡に回ってる

よく口が回るまだまだ大丈夫 回れ右したら明日が見えますか 母の忌や思いがめぐる走馬燈 僕の血といっしょに善玉悪玉も 白梅に亡母を重ねている輪廻

たず子

かすみ

シマ子 人秀

回り道して母さんを見てこよう

天王寺発

終着駅は天王寺

コンタクト落として地面這 錯覚のはじめ太陽の方が回

11 回る

いい事があってお酒もよく回る

太茂津

射月芳

だまされたままでも回る母の独楽 度

回れ右させてはならぬ第九条

保

州

月になり貴女の周り回ります

指一本

高 黨

風

回り道したなあ妻とうまい酒

風

気まぐれと思う指切りしてしまう アンニュイよ十指に余る恋の果て 白魚の指からポロリ魔女が出た 抱擁に指の先まで熱くなる

指全部揃うています保育器で

(福)英

云児

初恋はフォークダンスで触れた指 半跏思惟の指から春がこぼれ出る 弥勒菩薩の指の影から春になる 母の手は指の先まで温かい 武庫坊

的

皇太子 指組み替えて組みかえて 人をさす指は不遜な言葉もつ 後ろ指さされる恋をわすれかね 数珠を繰る指に亡夫のくれたもの いい湯だなポキンポキンと指を折る 小指をたてててれもせず シマ子

> 合掌の指のすき間に過去がある 病む指で折られて飛べぬ鶴となる 鳴る指を鳴らして風に立ち向う 矢面に立って人差し指に勝つ 指先を零れ枯れ野に根をおろす

合掌にそむきたい指だってある

金になる指へ政治が来てとまる 一から億の数となり

古希になる五本の指を確かめて 節くれた父の指見て酌をする 指切りに期限があったとは不覚

魔術師の指もソロバン弾いてる 追いすがる凄い力が指にある ひとつかみの指に目盛りがついている 名人の駒は静かに指を出る 指切りをして真直ぐに帰るなり 美代子 しげお

拍手する指の隙間は分かるまい 人を指した刑かも知れぬ指の冷え 佳 たず子

秋

水掬う指から逃げてゆくいのち

男の指ははや引金を引くかたち

風

と健在 により削除いたします。 田沼 2月号―P7上段9行目の「連綿 柳沢」の句は、作者の申し出

あざやかな小指が鬼の骨を抜く

マニキュアの指ひらひらと嘘をつく 意気地ない指ポケットを出たがらぬ

人を指す指の奢りを見てしまう

全日本柳人写真名鑑

と日川協加盟柳社一覧を掲載した大名鑑 大会・国民文化祭文芸大会の全受賞作品 ・顔写真・自選三句を収録、全日本川柳 生年月日・職業・所属柳社・住所・電話 全国二千六百人の柳人の氏名(柳号) 頒価3500円 (〒380円 A5判·520頁·箱入美装本

北一一一・七〇二号 全日本川柳協会

申込先

- 530

大阪市北区天神橋二丁目

振替口座(大阪7)3575 (06) 352-2210

全国紙上りんご川柳大会

明記、 枚まで)、住所・氏名・柳号・電話番号を 「りんご」の句を葉書一枚一句(一人二 9月30日までに左記へ

2次選者 1次選者 大手門歯科内 弘前市大工町五〇一六 波多野五楽庵 川柳塔あおもり (あおもり

新子 (川柳展望



中島小石さまを悼む

藤

よ」―受話器を取ると、中島小石さまが亡く 霊前にお詫びに上りたいと念じつつ、安らか さがいつまでも心に残り、一日も早く治って ことができず、お見送りができない不甲斐な た。私は風邪で床に就いていてとても起きる あみだ池のお寺で行われるというご通知でし なられ、今晩お通夜、お葬式は明日正午から 「おばあちゃん、薫風さんからお電話です 発されましたので、私は小石さまのことが気 で開かれることとなり、みなさんはバスで出 歓迎会を兼ねた二次会が「ジパング日本海」 は遠く青森から来られた波多野五楽庵さんの 緒しようと思って参加しましたが、その日 、新年のごあいさつに行かれるので、私もご 毎年一月十五日、

が、路郎、葭乃先生のお供で浜寺のお宅を訪 早く着いていたら私一人でも十五日におたず 同封されていました。この手紙がもう一日、 たということで、ご自身が描かれた花の絵が た。元気でお正月を迎えられ、熱心にリハビ リも続けて左手で字や絵も書けるまでになっ 谷局からご次男の研郎さまの代筆で届きまし ねしていたのにと、悔まれてなりません。 思い起こせば、四十年近く以前になります その翌日、小石さまのお手紙が東京の世田

> 亡くなられたり、川柳から遠ざかられ、今も 席させて頂いているのは私一人だけではない 持ち、その子どもたちも社会人となっていま す。小石さまも私も四十代で人生の真盛り、 問し、小石さまにお目にかかったのが始めで かと思います。 川柳にどっぷり漬かっている私の思りは、い まだ子育てに手が放せない時代でしたが、そ つの間にか新しい人ばかりで、本社句会に出 れぞれの子どもたちは今では巣立って家庭を

報を聞き、淋しさがひしひしと身に染みてと る三井酔夢さん、篠山の小西富士子さんくら の久米奈良子さん、舞踊への道に進まれてい は、質状だけの絆となって続いている書道家 次々と思い出されるのです。もう私の身近で をした楽しい思い出や新年句会のことなど、 ように私の瞳の中に浮かびます。ご一緒に旅 めどなく涙した一夜でした。 の竹内花代子さん唯一人です。小石さまの計 いで、川柳の会合でお顔を合わすのは、高槻 てこの世を去っていかれた方たちが走馬灯の 床に就いていると、小石さまをはじめとし

) 冥福を心からお祈り申し上げます。 櫛の歯のこぼれて涙もろくなり 水仙の闇の動きを臥床より



に浄土へ参られるようお祈りを捧げました。

にかかりながら帰宅しました。

帰途、柳宏子さんが欠かさず小石さまのお宅 川柳塔社おめでとう会の

3 月各地句会案内

	F1 (##) F18	A 18 1 18 6 16
	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	1日(月)午後1時から つくる・郵便・暗い・カード	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎いくしま	5日(金)午後1時から ようやく・眉・損・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
西宮北口川柳 会	8日(月)午後1時から 黄・おどる・占い・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩55 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
八尾市民 川 柳 会	10日(水)午後6時から 勝つ・虫・自然・ニュース	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
南 海川柳会	12日(金)午後6時から 野心・親方・群集・冗談	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳塔まつえ	13日(土)午後1時半から 珍 客・音 痴・開 く	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅
川 柳 塔わかやま	14日(日)午後1時から 沈 黙・蝶・直 感	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 南・原色・うきうき・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南步5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木) 正午から 自分・役者・本物・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島楓云児
富 柳 会	18日(木)午後1時から 早春・やっぱり・その後	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
京 都 塔の会	19日(金)午後1時から 丘・迫 る・無 茶	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
南大阪川柳会	19日(金)午後6時から 内幕・口もと・姿・常	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川 柳 ねやがわ	21日(日) 正午から 漬け物・庭・パワー・自由吟	秦公民館 京阪寝屋川市駅からバス 〒572 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉
岸 和 田川 柳 会	25日(木)午後 6 時から サイン・筋・忙しい・倉庫	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳東大阪	27日(土)午後 6 時から 地図・ハンドル・破れる・霧	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉 3 丁目 3 - 21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	28日(日)午後1時から 式・独立・カンニング・(地獄)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

[★]日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

集

後 記

の他大勢の役回りであり、

団をつくっても、そのうち 働き者だけを集めて精鋭隼 なことを書いていた。 るだけ…」 ―数学者でエッ と働いているふりをしてい 働いているのは二割ぐらい きらめて二割ぐらいは働き 怠け者だけを集めると、あ の二割しか働かず、 森毅氏が、ある雑誌にこん セイストとしても知られる ★「ハタラキアリは本当に ★面白いのはそれからで、 あとの八割はウロウロ 反対に 付・司会・脇取など、 句会でも選者のほかは、 そのような人たちがいなけ ればドラマは成立しない。

うに、構成員の二割にあた とが可能で、船頭は多けれ 集団でも維持・運営するこ 逆の方向から考えると、一 ば多いほどいいというもの る働き手があれば、どんな 体を支えることができるよ 割のアリでハタラキアリ全 るのか知らないが、これを ンテージにどんな根拠があ ★二割と八割というパーセ の僅かな人数で足りる

ものらしいし、個人として 始める一というのである。 か数名で、残りは脇役かそ でも、主要な配役はたかだ ★どのような芝居やドラマ ったりする」としている。 わったり、ときに八割にか も、ときに二割のほうにま たいていの集団はそんな 出版を祝いたい。 多大のご協力にも感謝し、 真名鑑』が完成した。本社 た日川協の『全日本柳人写 のスタッフで取り組んでき に昨年来、編集部プラスX の同人・誌友のみなさんの ★栞主幹・薫風理事長を柱 でもなさそうだ。 E ☆「染色は薬草に始まる」

ナシ・紫根など、昔は染料

ないものだろうか。

来年がある

頂戴しました。私はりんごを作っ 柳塔あおもり代表からこの色紙を 言葉を頂きましてありがとうござ 日本国中からお見舞や励ましのお て居りますが、19号台風の際は 辻白渓子」—波多野五楽庵川 来年があるとりんごの木が喋 身の来年もきっとあるぞと励まし ごの木ばかりではなく、この私自 家を訪れるりんご作りの方々に読 飾りに入れて玄関に掲げました。 です。ほんとうにありがたいこと てくれているのだと思いついたの いたのです。その内に私は、 に仰ぎ見ては、拝むような気持で んでもらい、私自身も毎朝のよう 私はこの色紙をりんご型の色紙 真喜内 りん

そは」と奮い立ちました。 たちは、「来年があるぞ」「来年こ いました。このような心尽しに私

☆三月は雛の月。

関心を持つようになり、新 家の周りの草や木で染色を 今年は皇太子殿下の御成婚 やぎと、ときめきを覚える 始めた。お蔭で私も染色に ☆婿の仕事の関係で栃木県 も話題になることだろう。 つになっても、お雛様に華 も間近で、十二単の美しさ 過疎地に住んでいる娘が い発見を楽しんでいる。 女はいく 虫力もあるので、 ラニスケの原料であり、防 守ってきたという。黄色の ゆかたや野良着にして身を どの解毒作用があるので、 と言われている。昔から親 上経っても虫に食われてい 染めた正倉院の紙は千年以 染料のキハダは胃腸薬のダ マムシ・毒グモ・ムカデな しまれている藍染。 その他、紅花・クチ キハダで 藍には 立ちをする媒染剤が必要で も名句を生み出す媒染剤は ことがあるように、 って思いがけない色が出る 句は出来ない。媒染剤によ 葉が適当でなければ、 かんでも、それを表わす言 ある。川柳もいい着想が浮 は、灰やミョウバンなど、仲 ☆美しい色に染めるために 方薬として使われている に使ったものが、現在は漢 川柳に

作品募集

銀 水 初步教室人签 課題吟 香の 河煙 (3句) 花

5月号発表

柳笼

CIII

cm

1葉に1句を書き、

枚)同封のこと

小春藤出内川尾 沢城井 子笑香果 泉坊雄

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌 友、茴香の花欄は女性、その他 はどなたでも投句できます。

選選選

選選選

秘 境」 番 組 6 月号 初歩教室「生きる」

夜市川柳嘉集

第10回「タオル」 中尾 藻介選 ハガキに3句 3月末締切 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

NE ₹545 510 年 年分分 印刷行人 価 六 三千八百円 七千五百円 JII 百 (送料共)

本社3月句会

兼お 投会席 は 題 な

題芽

痛押

会 日

メンズファッ

ショ

地下鉄谷町 4下中央区内本町

時

月

8

後5

いす

電06.94 西林西宫桜小 2句以内 は楓弥干 選選選選子角8

本社 4 月句会 5日(月)

兼題 「ピカピカ」「抜く」「引 力」 岩

NHK川柳作品募集

題「覚悟」 森中恵美子選

ハガキに3句 4月10日締切

投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43

「ラジオセンター」川柳係

発 表 3月の放送は高校選抜野球大会 のため中止

西日本文字放送作品募集

課題「少年」 橘高 薫風選

ハガキに3句 3月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20 大手前ウサミビル3階 西日本文字放送 川柳係



白島海岸

潮騒のリズムに 身をゆだねて 心地よいくつろぎを

国立公園 隠岐の島

施設のごあんない

収容人員 45名 客室 13室 舞台付広間 42畳 駐車場 乗用車10台 冷暖房完備 旅館



〒685 島根県隠岐郡西郷町 TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330



Perre Parchen



泣いて笑って…… 夜を通り過ぎたら また陽がのぼっていた 男のロマン



オーエスケーの 紳士服

株式会社大工工大丁

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7 (06) 941-8018